金瓶梅

支那の社會狀態

中卷

井上紅梅著

金瓶梅

支那の社會狀態

中巻



井上紅梅著

金瓶梅

一五

正月十五日は元宵節で李瓶兒の誕生日に當る。西門慶はその前日に玳安を遣はし、羹菜四盤、酒一罈、壽桃一盤、壽麵一盤、金織絹衣服一襲に吳月娘の名刺を添へて贈つた。折柄李瓶兒は寐起きのまゝで髪を梳いてゐたが、斯くと聞いて玳安を寢室に喚び入れ、月娘に對する先日の禮とけふの禮を一處に述べ、迎春にいひつけて四盤の茶菓子を出し、更に二匁銀と一枚のハンカチを玳安に與へて、

『奥さん方にそう言つて下さい。後刻案内狀を差上げますから、あしたは是非お揃ひで被入しやるように』

と託け、盒を昇いて來た二人の人足に錢百文づゝ與へて玳安を歸へした。そこで李瓶兒は五枚の柬帖に吳月娘、李嬌兒、孟玉樓、孫雪娥、潘金蓮の名をそれ〴〵認め、又竊に西門慶宛ての柬帖を具へ、これには晩に來て吳れと書き、馮媽媽を使に出した。

當日月娘は孫雪娥に留守居させ、李嬌兒、孟玉樓、潘金蓮と共に孰れも金ピカのコッテリした裝ひで四頂の轎に乘つて門を出で來興、來安、玳安、書童を從へて獅子街に赴いた。

李瓶兒の新宅は四けん間ぐちで奥へ向つて三棟の家が並び立ち、街道に臨んだところに樓がある。儀門の左右三間の廂房を客間とし、その一間は打ち拔いて奥に通するようになつてゐる。そうして最後の一棟は三間を寐室とし一間を炊事場としてある。その後には小廣い庭があつて壁を仕切つて喬皇親家の花園に接してゐる。李瓶兒は先づ衆女を客間に案内し、型の如く挨拶了つて裏庭に請じ入れ茶を薦めた。晝近くなつて李瓶兒は豫ねて準備して置いた樓上の部屋に衆女を案内した。そこには四台のテーブルを屏風で圍ひ、街に臨んだ方には湘簾を掛け、種々の彩燈を吊し、歌妓董嬌兒、韓金釧兒は席に侍つて酒を酌み歌を唱つた。

吳月娘は花摸樣麗しき猩々緋の通し袖の襖を上に着、若綠の緞子の裙を下に穿き、貂鼠の裘を内に着てゐる。李嬌兒、孟玉樓、潘金蓮は凡べて白綾の襖と藍緞の裙であるが、そのうち李嬌兒は沉香色金ぶちの比甲、孟玉樓は綠色金ぶちの比甲、潘金蓮は大紅金ぶちの比甲を重ね、頭上に翡翠眞珠を滿飾してゐたが、そのうち鳳釵を半ば卸して窓に凭つて往來を見た。何しろその日は燈市の眞最中で上を下へと雜踏し、街には數十座の燈架を置き、それに思ひ〳〵の意匠を凝した燈籠を吊つてある。

　山石を穿つたものには雙龍水に戲れ、雲霞を映ずるものには燭鶴天に朝す。金蓮燈、玉樓燈には一片の珠璣あり。荷花燈、芙蓉燈には千圍の錦繡を散ず。繡球燈は皎皎潔潔たり。雪花燈は拂拂紛紛たり。秀才燈は揖讓進止の狀ありて孔孟の遺風を存す。媳婦燈は容德溫柔にして孟姜の節操を示す。和尚燈は月明柳翠と相連り、判官燈は鍾馗と小姐と並び坐す。師婆燈は羽扇を揮つて邪神を倜降し、劉海燈は金蟾に背して至寶を戲吞す。駱駝燈、靑獅燈は無價の奇珍を馱す。猿猴燈白象燈は連城の秘寶を進め、七手八脚螃蟹燈は倒しまに淸波に戲れ、巨口大髯鮎魚燈は平かに

綠藻を呑む。銀蛾は彩を競ひ雪柳は輝を爭ふ。兼ねて龍沙は七煎に戲れ、五老は丹を獻ず。書吊は流蘇を挂け、九夷八蠻來つて寶を進む。村裡の社鼓は隊々として喧鬨し、百戲貨郎は椿々として鬪めき、巧轉燈は一來一往し、吊燈は或は仰ぎ或は垂る。琉璃瓶は美女奇花を映じ、雲母障は瀛洲閬苑に並び、王孫は爭つて看る、小欄下に蹴鞠する齊眉を。仕女は相携ふ高樓の上、妖嬈として色を衒ふ。卦肆は雲集して相幙に星羅を講す。新春の造化如何定らん、一世の榮枯おのづから准あり。又彼の高坡に站し詞曲を打談する者あり。楊恭は到り看る這の揺响鈸を。游脚僧は三藏を演說し　元宵團子を賣る者は果餡をうづたかく重ね、粘梅花を賣る者は枯技に花を咲かす。春娥を剪つて斜に鬢邊に插すは鬧春風。頭上に金光を飛ばし日に耀くは禱凉釵。圍屛の畫は石崇の錦帳。珠簾の綸は梅月の雙淸。鰲山の景は覽れども盡きず、又まさに豐年の瑞ありといふべし

吳月娘は一通り見渡したが餘りに樓下の騷しさに懸念され、李嬌兒と共に席に戻つて酒を酌んでゐる。金蓮と玉樓は二人の歌妓を從へて尙ほ窓に凭り飽かず眺めてゐる。金蓮は白綾の襖の下に襲ねた金べりの袖口の中から、六個の金鐙指環を嵌めた春葱のような十指をあらはし、身内を

摸つて口中に西瓜子（シーカツ）を摘み入れ、其皮を往來の人の頭に吐きかけ、玉樓と共に、ホヽと笑つた。
『大姐姐（ダーチー〳〵）、一寸來て御覧なさいよう。あすこの軒下に掛けてある二つの繡球燈は、マァなんて旨く出來てゐるでしよう。向ふへ行つたり、こつちへ來たり、ころ〳〵ころ〳〵轉がるように出來てゐますよ』
とさも面白さうに指差した。月娘は内で何か答へたが出て來なかつたので、金蓮は、
『二姐姐（アルチー〳〵）、一寸此處に來て御覧なさいよ。向ふの架の上の大魚燈の下には澤山の小魚がさがつてゐましてね。鼈や海老や蟹や色んなものが泳いでゐますよ』
と輿に乘じて叫んだが、李嬌兒は返辭もしない。そこで又側にゐる玉樓に向つて、
『三姐姐（サンチー〳〵）、この婆兒燈（ポールテン）とあの老兒燈（ロールデン）は面白いぢやありませんか』
と言つた時忽ち一陣の風が吹き來つて婆兒燈の下半部を吹き切り、大きな法螺穴のような格好になつたので、金蓮は思はずキヽ、と高笑ひした。
その時群集は押し合ひへし合ひしてゐたが、金蓮の姿に目を付け、中には不良少年もあり、

『あれはなんだらう。公侯府内の身内の者だらうか』

『いや違ふ。王孫家のお妾さんが、お忍びで來てゐるのさ。でなければあんな立派なナリをしてゐるわけはない』

『いやそうではない。あれは或る金持が自分の別莊へ藝妓を喚んで、看燈させてゐるのだ』

と評判まち〳〵の中に或る一人は物知り顏に、

『手前達はあれを知らないのか。閻魔大王の妻で五道將軍の妾さ。詳しく言へば縣前の生藥屋で官吏に金を貸附てゐる西門大官人の身内の者さ。恐らく彼奴等は大娘のお供で看燈に來てゐるのだらう。あの綠の比甲の方は知らないが、大紅比甲の女は好く知つてゐる。あれは餅屋の武大の嬶で亭主を殺して色男と一處になつた大變者さ。この一二年流石に世間に面出しをしなかつたが今見ると見違へるような立派な奧さんになつた』

とわざと大きな聲で聞よかしに喋つた。月娘は流石に用心深く恁ういふ時に飛んだ馬鹿者が出て思はぬ間違を來したら大變と、急に二人を內に喚び入れ歌妓に彈唱させて酒を飮んだ。やが

て好き折を見て身を起し、

『二娘、けふはいろ〳〵御馳走樣で御座いました。私と二妹（李嬌兒）は失禮ながら之れで中座することに致しましよう。二人の姉妹（玉樓と金蓮）を跡に殘して置きますから宜敷お願ひ致します實は主人も外出してをりますし、内は女中ばかりでまことに氣懸りで御座いましてね』

李瓶兒は承知せず、

『あら大娘、なんですねえ。大節句のけふ、燈籠に火を點けない中にお歸りになるとは餘り飽氣なう御座います。旦那がお留守でもお宅には姑娘（孫雪娥）が殘つておいでぢや御座いませんか。月が上るまでお遊び下さい。私は皆樣をお送り申します』と引き留める。

『二娘（李瓶兒）折角のお引留めですが、私しは餘りこれがいけない方ですから失禮致します。どうぞ二人の姉妹を私し同樣に思召して下さい』

『あら未だ早う御座いますよ。一杯の酒もお干しにならないうちにお立ちになるとはあんまりな。私しは先日伺ひました時にはあるだけの盃をみな引受け、それでもお饒しが出なかつたの

に。まことに詫びしい處で碌な物も御座いませんが、けふは私しの志に免じてごうぞゆる〳〵遊ばして下さい』

そこで大銀盃を出して李嬌兒に渡し、

『二娘是非これで一杯ごうぞ。私しは大娘には決して大きな杯を差上げませんから』

と洒をなみ〳〵と注いだ。月娘は已むなく一杯飲み干し、二人の歌妓に二匁銀を一つづゝ與へ

李嬌兒が飲み了るを待つて席を立つた。そうして玉樓、金蓮に對つて、

『私達は一足先きへ歸るが、お前さん方は此處に殘つてゐて名代を勤めて下さい。いづれ小廝に提灯を持たせてよこしますから其時までごうぞお願ひしますよ。內が無人だから餘り小廝を待たせないようにね』

と言ひ含め、李瓶兒に門口まで送られ轎に乘つて立ち去つた。

西門慶はその日應伯爵、謝希大と共に自宅で飯を食ひ、それから三人連れで燈市見物に出掛けた。獅子街の東口まで來た時、けふは李瓶兒家に妻妾が喚ばれてゐるので、二人の悪口家に見ら

れては大變と、
『東街には碌な物はないよ。西街の大燈を見ようぢやないか』
と西門慶はスタ〳〵西街に入つて紗燈賣の群がる前まで來て好加減に見物し引返へそうとする處へ孫寡嘴、祝實念にハタと行逢つた。
『おや大官人、これはお珍しい。貴方にお目に掛らうと毎日待ち焦がれてをりました』
と言ひつゝ一方應伯爵、謝希大に向ひ、
『君達はあんまり不實だね。大官人の看燈になぜ俺れを誘はないのか』
西門慶は應謝のために程好く言譯けし、
『祝兄弟、氣を惡くしては困る。こゝの二人とは今往來で逢つたばかりの處さ』
祝實念はハヽと笑つて、
『そいつは妙だ。時に大官人、これからどちらにお出掛けになります』
『そうだね。かう揃つてみれば一つ料理屋へ行つて景氣好く飮まずばなるまい。實はけふ內の女

つた』

『料理屋も好う御座いますがね。李桂姐の處へ行つてやらないと可愛さうで御座いますぜ。暮の中から不景氣を食つて、それに大宮人は近頃些つともお顏を見せて下さらないと言つて、泣面をしてをりましたぜ。けふは外の日ごちがひます。大節何だから是非行つてやつて下さい』

西門慶は李瓶兒と晩の約束があるので、

『私しはけふ少し用事があるからあしたにして呉れませんか』

と言つたが皆は肯かず、已むなく引きずられてゆく。李家の前に來た時李桂卿は盛裝して門前に立つてゐたが一同を見て、いそ〳〵中堂に迎へ入れた。祝實念は大聲上げ、

『三媽、早く出て來ないか。我れ〳〵はけふ大宮人をお連れ申して來たぞ』

と言ふ。間もなく老婆は杖にすがつて出て西門慶に向つて鄭重に挨拶し、

『旦那、この頃ごうして被入しやらないの。何かお氣に障つたことでも御座いますか。わたくし

はこれでも一生懸命にお勤めしてゐる積りですが、定めし他に好い處が出來たので御座いましよう』

祝實念は嘴を入れ、

『御老人、そいつは全く旨く言ひ當てた。圖星といふところだ。大官人はな。此頃それは〳〵美しい新色が出來たので毎日そこへ入り浸りだ。けふ圖らずも燈市で出逢つたのを幸ひ。否やといふのを我れ〳〵二人で無理に此處までお連れ申して來たのだよ』

老婆は眞に受けず、

『それは本當で御座いますか』

と孫寡嘴に訊く。孫は調子を合せ應謝の二人を指し、

『本當だとも。大體いふと此二人が惡いのさ。大官人と一つ方角の神樣となつて色んなカラクリをやつてゐるのだからね』

老婆はハヽと笑つて、

『いゝ應二哥に限つて𠀋んな事はありません。屹度私しごものために宜敷取り爲して下すつたに違ひない。なるほど金持の旦那は一人の藝妓で滿足するわけはないが天下の錢には皆眼があります。かう言つちや口の幅ッたいようだが、内の桂姐に限つて何處へ出しても引けを取るような女ぢやないと思つてをります。だから如何に引張凧の大官人でも自然此處へ落ちて來ます』

孫は冷やかに笑つて、

『ちげゝねゝ。さうだとも、アニキの新色はな。内色でなくて外色だ』

西門慶は立つて、

『老嫣嫣（ラオマーく）、うつかり此奴の言葉を信じると大變だぞ。此奴は天災人禍的老油嘴（テンツアイイニンウオーテューユーツイ）、老殺才（ローツアツツアイ）だ』

と孫の肩を打つたので一同はドッと笑つた。西門慶は懷中から銀三兩出して、

『けふは大節句で友達を御馳走したいから、これで一つ宜敷くやつて與れ』

と桂卿（クイチン）に渡さふとしたが彼女は否んだので、老婆に向けた。老婆はこれを握り締めながら、

『まあ旦那。こんな御心配をなすッて下すつては困りますよ。如何に私しごもが錢に渇ゝてをり

ますからとて、節句にお酒を出さないといふ事がありますか。どうぞ之れは元へお納め下さい。そう、度々、旦那の懐中を痛めさせては冥利が悪う御座います』

と強ひて押返へさうとするを應伯爵は側へ寄つて、

『老媽媽、餘計な遠慮は要らぬことだよ。早く取るものを取つて、出すものを出すのだ。大官人は兎に角俺れ達が干上つて仕舞ふ』

『なるほどそうで御座いましたね。では厚※しく頂戴致して置きましよう』

と銀を懐中に納め、

『大官人、毎度御散財掛けまして相濟みません』

とわざとらしく禮を言ふ。應伯爵は人の悪い笑みを洩し、

『おい、此處で一寸笑話がある。皆さん、聞いて下さい』

と左のような事を喋つた。

或る道樂息子が某樓の歌妓に夢中になつて通ひ詰めてゐる中、一日わざと襤褸を身に纏つて來

ました。老媽は相手にせず暫く彼を客堂に待たせたまゝ一杯の茶も出しません。やがて息子は腹が餓つたから飯を食はせて呉れといふ。老媽は早年で内で食ふ米さへないといふ。では顔を洗ふ湯を持つて來て呉れといふ。水屋にやる錢もないので暫く水をキラしましたといふ。そこで息子は懷中から銀十兩出して卓上に置き、ではこれで米と水と買つて來て呉れといふ。老媽は慌てゝへイ〳〵ありますとも、ありますとも、旦那、飯を洗ふ顔を食べますか。顔を食ふ飯を洗ひますかと言つた。

一同は皆笑つた。老婆は躍氣となり、

『貴方、それはあんまりですよ。私しはいつ旦那に开んな事をしました。昔から开んな話はあるわけはない』

應伯爵はわざと高聲揚げ、

『これ〳〵老媽、耳を持つてこッちへ來なさい。私しはスッカリ聞かせてやるから。大官人はな近頃花二哥の元の色女呉銀兒と好い仲だよ。お前の内の桂姐などは、とうに御不用物だ』

老婆はセヽラ笑つて、

『それは一寸受け取れませんね。口強いようですが、内の桂姐は呉銀兒と比べて優るとも劣る者では御座いません。それに旦那と此家とは切つても切れぬ親戚の間柄です。若し左んな事があつたとすれば金に任かせた一時のお慰みで御座いましよう』

間もなくテーブルの用意が出來一同席に就いた。李桂姐は此日ふだんの束ね髪に杭州産の金モール細工の釵と翡翠の梅花鈿を挿し、眞珠を綴つた鉢巻に金龍の墜子を垂れ、上には白綾對襟の襖、下には紅羅の裙子を穿き、玉のように琢き立てた化粧姿であらはれ、先づ上席に對つて萬福と挨拶し、桂卿と共に横席に坐し、折柄運び出された茶を各人に薦め、自分達もお招伴して何やら話した。やがて保兒は卓上の茶碗を片附け酒肴を陳設して一同杯を擧げる。そこへ布簾をかゝげてコツソリ覗いた四五人の藍縷着物がある。手に三四升の瓜子を持つて進み入り衆人の前に跪き、

『旦那様がたにお節句の御祝儀を申上げます』

と叫んだ。これは架兒といふ一種の乞食で節句時を當て込みに物眞似などして錢を貰ひ歩くのである。西門慶はその中の于春兒といふ男を識つてゐたので、

『手前達の仲間は何人だ』

と訊く。于春はペコ〳〵頭を下げ、

『ヘイ〳〵外に段綿紗と靑蠅越が待つてをります』

といふ。段綿紗は應伯爵が此處に伺候してゐるのを知つて這入つて來た。

『おや應爹、此處にゐらしやいましたか』

と頭を下げる。西門慶は彼等の捧げた瓜子を受取り巾着の中から銀一兩出して地に投げつけた

『そら御褒美が出た』

と于春は一同を顧み、

『どうも有難う御座いました』

と異口同音に禮を述べ、外へ出て朝天子單進の一藝を演じた。架兒等が立去つた跡で西門慶は

酒を命じたので、桂姐は紅袖を雙び垂れ滿酌の金杯を薦め、肴烹異品、果献時新、倚翠偎紅のたゞ中に、桂卿は箏を彈じ桂姐は琵琶を奏で各々得意の歌を唱ひ酒二巡りした頃、忽ち靑衣に黃板鞭を着けた三人の男が現はれ、手に一羽の燒鵝と二瓶の老酒を捧げ、

『旦那樣がたに節句の御祝儀を申上げます』

と叫んだ。これは圓社といふ物貰で蹴鞠を献ずるのである。西門慶は彼等を見ると一人は白禿子一人は小張閑、一人は羅回子といひ何れも會識の者である。そこで、

『お前達は外へ出て待つてゐろ。酒が濟んだら三度ほご蹴つてやる』

と言付け、卓上にあつた四盤の嗄飯と一皿の點心と一つの大酒壺を取下げて與へた。彼等はそれを食べ了つて球に氣を入れ、待つてゐると軈て西門慶は外面の院中に立現はれ、先づ一蹴り踢つて李桂姐を外へ喚び出し、二人は圓社を相手に種々の蹴業をした。圓社は程好くあしらつて球が横に斜れそうになると巧みにこれを受け返へし、李桂姐、西門慶の取り好いように仕向けるので百蹴百發まことに見事の晴業だつた。圓社は褒美の金を目當てに西門慶の前に出て頻りに譽め

そやした。

『桂姐は近頃大層御上達なさいました。球の力が強くて迚も私しどもには受け切れません。此一二年過ぎたら恐らく土地で第一の名人で御座いましよう。二條巷の董官女兒などは足許にも及びません』

と空々しいお世辭を述べ立てたが、當の桂姐は二回ほどやる中に、苦しそうに吐息を吐き、球は砂塵を飛ばし額に汗をかき、袖中から春扇を出して涼を入れ漸く腰を立てなほした。そこで今度は桂卿、謝希大、張小閑の三人組で競技し白禿子、羅回子はその世話役となつた。一同蹴了り西門慶は充分の賞金を與へて圓社を立去らせたが、その時可成り日暮れになつてゐたので李瓶兒の約束を思へば氣が氣でなく、

『私しは少し用事があるから、けふはこれで失敬する。皆さん、ゆツくり遊んでゐて下さい』

といふ。

『大官人が歸つて仕舞へば我れ〳〵が殘つてゐても仕様がない。一同引揚げることにしよう』

と應伯爵の提議で一齊に散じた。

譯餘閑談

〔元宵〕亦元夜といふ。東京夢華錄に正月十五日を元宵といふ。韓偓の詩に「元宵淸景亞元正」又煮團子を元宵と言ふ。これは其日に必ず川ゆるので斯く言ふ。

〔壽桃〕誕生日を賀ふ桃の實の飾物で、南京ではうどん粉で作り、蘇州では米の粉で作る。又近頃ガラスなどで造つたものを見受ける。

〔壽麵〕誕生日を賀ふ支那うどんである。これは日本の蕎麥と同じ意味で末長かれといふ縁喜を含んでゐる。

〔盒〕盒は大きな組重で二人して舁ぐ。又極く小さな煙草の鑵などをも盒といふ、凡べて印籠蓋、かぶせ蓋の物を盒といふ。

〔柬帖〕　此處では形式を備へた案内狀を言ふ。

〔儀門〕　支那家屋は空地を置いては奥へ奥へと家を建つ。儀門は大門の次ぎの門で二番目の家屋の中程にある。本來官署の門名で儀あり象すべしといふ意を取つたのである。清末儀門を宜門となし、正門に對する旁門をいふ。これは全く訛つたのである。

〔院子〕　院子は支那家屋の家と家の間の空地を言ふ。

〔樓〕　樓はいふまでもなく二階である。本來の支那家屋には二階建が少いので、特に數寄を凝し往來に面して物見を作つたわけである。

〔花園〕　花園は庭園で院とは異る。これは大抵家の側面に別區劃を設けて數寄を凝す。

〔湘簾〕　湖南廣西より產する斑竹で編んだ簾、貴重品である。

〔彩燈〕　彩燈花燈は重に六角燈籠で隈々に花結の絹紐又は絹絲を垂れ、非常に絢爛たるものである。

〔比甲〕　は外部に着る袖無しで現在馬甲と言つてゐる。

〔鳳釵〕　鳳釵は一本の物ではない。種々の珠玉を以て頭髮を滿飾するのである。舊劇楊貴妃などに扮する女形の頭飾はそれである。
〔荷花燈〕　荷花は蓮花である。
〔繡球燈〕　繡花は樂玉。
〔判官燈〕　判官は陰間の判官である。鍾馗嫁妹などといふ芝居があるが、此處では恐らくそれを材料に取つて燈籠を作つたものであらう。
〔劉海燈〕　劉海蟾は仙人の名。本名劉操と言ひ遼の進士であつたが後ち呂純陽の弟子となり道家南宗の祖となつた。
〔鮎魚燈〕　鮎は日本の鯰である。
〔螃蟹燈〕　螃蟹は日本の蟹。
〔雪柳〕　雪柳は日本のゆふに似たもので、紙條を剪つて綠葉に懸けたもの。
〔龍沙七煎〕　今不明追つて調べる。

〔五老〕堯は舜を率ゐて首山に升り河渚に遊ぶ。五老の游ぶあり。蓋し五星の精なり云々と。竹書紀年といふ書に記さる。

〔流蘇〕流蘇は鳥の尾を緝めて之を垂るゝ事旒の如し。其蕊下垂するを以て蘇といふ。凡そ璽篋、旌旗、帳幕及び馬飾の類、これを以て飾る。

〔貨郎〕荷を擔ぎ鼗鼓(まめ太鼓)を振つて小間物を賣る者。

〔巧轉燈〕廻り燈籠。

〔齊眉〕齊眉は夫婦相敬ふ賓の如きを言ふ。此處では一組の男女といふ意ならん。

〔卦肆〕露店易者。

〔造化〕神の定むる運命、又しあはせといふ意味にもなる。

〔鬧春風〕又鬧蛾々、鬧嚷々などといふ。烏金紙を以て蛺蝶の形を剪り、朱粉を點染し、檜葉を傍に添へ、銅線と針を心にして簪を作り、元日帽巾の上に挿す。迎春の意なり。

〔鑄涼釵〕銀製洞窓の釵を涼釵といふ。夏日結髪の蒸れを防ぐ

〔鰲山〕 鰲山は燈籠の飾物で、天宮に型取り種々の宮殿露臺を組立つ。内に伶人種々の人形あり。

〔西瓜子〕 西瓜子は西瓜の種を煎つた物である。口中にて皮を噛み擴げ、中の仁を食ふ。或は南瓜の種あり。畧して瓜子ともいふ。これはホンの娯み食ひで西洋人のチューイングガムと同じやうな用途である。婦女が此皮を噛んで樓上から知らぬ男の頭の上に吐き掛けるなど挑發の意味がある。

〔錢の眼〕 錢の眞中の方形の孔。

〔天災人禍〕 同じくわざわいだが天災人禍とつかひ別けるところは支那式だ。老油嘴はお喋舌り、老殺才はくたばりそこないいいいいいい位な處だ。

〔釵と鈿〕 釵は二股簪である。鈿は金屬で作つた花である。要するに鈿は脚が短く釵は脚が長い。

〔羅〕 羅は日本で言ふ絽織である。

〔架兒圓社〕いづれも物貰だが此時代のものは遊客を滿足させるような一藝を持つてゐたらしい。

一六

その夜西門慶は李瓶兒家に來たとき大門は既に鎖され、客待の轎もない。偖ては皆歸つたなと戸を開けさせて中に入ると、折柄客堂の燭に對してゐた李瓶兒は素服の立居も輕やかに階を下りて出迎へ、

『おや、ようこそ被入しやいました。もう少し早ければよかつたのに、三娘さ五娘は今しがたお歸りになりましたよ。大娘は貴方が御不在だと被仰つてズッと前にお歸りになりました。一體けふ貴方はごちらへ被入しつたの』

『けふは、應謝と一處に午前中から看燈に出掛け、お前の家の前まで來る積りであつたが、途中二人の友達に出逢ひ、とう〳〵妓家に引張り出されて否應なしに今までお相手さ。私しはお前と約束があるので氣が氣でなく、手水に立つ振りして裏門からコッソリ拔け出して來た。それでな

ければ今夜は屹度夜が明けて仕舞ふのだ』

『おやそうで御座いましたか、ごうもわざ〳〵有難う御座いました。奥さん方も早々お歸りになつたし、内が無人といふお話はあつたが、若しや私しのこりなし方が惡いかと内々心配してをりましたの、貴方のお顏を見て今、漸く安心しました』

そこで堂内の花燈に火を點じ、暖簾を卸し、金爐に獸炭を添へ寶篆に龍涎を焚き、珍味佳肴を卓上に置いた後ち李瓶兒は一杯の酒を西門慶に捧げ、

『拙夫に別れましてから便る親戚とてはなく洵に心細う暮してをりますが、今日此一杯を貴方に献じて主從の約束を致しましよう。私しは御覽の通り醜い者ですが、貴方のお側で床を上げ床を疊み、奥さん方と一處に仲睦しく姉妹の御緣を結びたう御座います。私しは將來如何なる出來事が起つても決して不滿に思ひません。貴方のお考へは如何で御座います』

と叩頭して滿眼に涙を泛べた。西門慶は嬉しさやる方なく一つの手に杯を持ち一つの手に李瓶兒を引起し、

『どうぞ起き上つて下さい。貴方のお志は肝に銘じて忘れません。御配慮なさるな。けふの佳き日をお祝ひ申してウンと御酒を戴きます』

とガブリと一杯の酒を飲み畢つてその盃を返へした。馮媽媽は台所で働いてゐたが間もなく壽麵を作つて出て來た。その時西門慶は李瓶兒に對ひ、

『けふはどんな藝妓が來たのかに』

と聞く。

『董嬌兒と韓金釧兒を喚びましたが、二人は晩までお相手して、三娘五娘を送つて花を貰ひにお宅に伺ひました』

そこで又杯を取り交はし繡春迎春は側へ來て酌してゐる時、ヒヨツコリ玳安が這入つ來て李瓶兒に叩頭し、けふのお祝を申上げた。李瓶兒は程好くこれに答禮し、迎春に命じて台所から壽麵と點心と一本の酒を持ち來らせ彼に與へた。西門慶はそれを見て、

『お前、それを食べたらスグ歸つて吳れ』

と言付けると李瓶兒は側から、

『奥さん方には內証ですよ。旦那が此處に來てゐることは』

と銀二匁を與へ、

『これでお節句の瓜子(カツ)(西瓜の種)をお買ひなさい。あした私しは貴方に鞋を買つて上げるから』

と言ひ足した。玳安は、

『はい、委細承知しました』

と叩頭して出て行つた。馮媽媽はその跡を固く鎖した。李瓶兒は漸く安心し、西門慶と打ち解けて猜拳をなし、又三十二枚の象片牌を持ち出し卓上に茜紅の苫條を敷いて骨牌を翫んだ。花子虛が死んだ當時西門慶は旣に迎春繡春の二人の女中を手に入れてゐたので今は何事も遠慮はないそこで床上に蒲團をのべさせ、紫錦帳の內で看牌し且つ酒を飲んだ。

『あの部屋はいつ出來ますね』

と李瓶兒は突然西門慶に訊いた。

『二月から起工することになつてゐるから、もう暫くの辛棒さ。こツちの庭と向ふの庭と通じるようにして、前に築山と藤棚を設け後ろに花見樓を作る筈だ』

『ではね。此處の茶箱の中に三四十斤の沈香と、二百斤の白蠟と、二鑵の水銀と、八十斤の胡椒がありますからね。貴方はあしたそれを持つて行つて銀に替へ、工事費の足しまへにして下さいませんか。大娘にそう被仰つて下さい。私しは是非妹分になりたい。何番目の末でも決して厭ひません。貴方さへ捨てゝ下さらなければ』

と又も涙をほろ〳〵と落す。西門慶は可愛さ餘つて身をぞく〳〵させ、ハンケチを出して涙を拭いてやり、

『わかつた。わかつた。お前の心はスツカリ讀めた。決してヤキモキするな。喪が開ける頃には屹度部屋が出來る。それまでの間暫く我慢して吳れ。今お前を內に喚んでも好いが、何しろ空間がないのでどうする事も出來ない』

『貴方がそういふ考なら私しはあした行きますよ。部屋などはどうでも可い。五娘と一處に寐て

も差支へないぢやありませんか。あの人は本當に好い人です。又孟三娘も大層親切氣のある方ですね。あの二人と私しは丸で一つ胎から出た姉妹のような氣がします。唯あの大娘はどちらかといふと眼の中で人を掃くような方だと思ひますわ』

『それは何か思ひ違ひだらうと思ふ。妻は一寸無愛憎のようだが、あれで中々人が好いのだよ。でなければ大勢の女が默つてゐるわけはない。あした向ふとこつちと通じるようにして三間樓にお前を住まはせることにするが、どうだらう。お前の考は』

『ゑゝ是非そうお願ひ致します』

二人は四更頃まで語つてゐたので、翌日はグツスリ寐過ごし、晝飯頃迎春は粥を薦めると李瓶兒は漸く起上り髪も梳かずに西門慶と半盞の粥を啜り且つ酒を命じた。そこで又一段の興を添ね何やらしてゐるところへ、玳安が馬を曳いて迎へに來た。西門慶は寐室の窓越しに用向を聞くと

『川廣のお客が三人連でいろ〳〵の品物を持つて參り、八個月の擔保で銀百兩貸して呉れと申込みましたが、傅二叔が取斗らひ兼ね、奧樣に相談すると旦那を喚んで來いと被仰いました』

と玳安は言ふ。

『お前は眞逆俺れが此處にゐると言やしないだらうな』

『へい、ゆうべは桂姨家にお泊りになつたと申上げました』

『からもう役に立たない奴等ばかりで仕樣がないな。そういふ事は凡べて傅二叔の仕事だ。一々俺れを喚ぶにも當るまい』

『傅二叔が引合ひました處、お客樣が旦那と直接に御相談したいと申しました』

李瓶兒は側から、

『賣買は大事なことです。早く行つておやんなさいな。それに折角子供が使に來たのに貴方が行かなければ、奧樣が變に思ひますよ』

『お前は知るまいが、彼奴等は品物のハケクチに困つて來たのさ。わざとヂラすのも掛引さ。慌てゝ行けば屹度附込まれるからね。まあ考へて見るが可い。淸河縣廣しと雖も纒つた荷物を引取るのは内ばかりさ。向ふが來ても來なくとも俺れの方は些つとも困りやしない』

『だけれど餘りイコヂになつて人から怨まれても損ですよ。けふは私しの言ふことを聞いて早くお歸りなさい。そうして又おいでなさいな。柳の葉のように末長くね』

そう言はれて見ると仕方がなく西門慶はしぶ〳〵立ち上つて髪を梳き、顏を洗ひ網巾を戴き着物を着換へてそれからゆツくり飯を食ひ、眼紗で顏を包んで馬に騎り漸く家に歸つて來た。店では四五人の客商が首を延ばして待つてゐたので早速買賣の相談が初まり銀のよしあしなど論じて取引が濟み彼等は立去つた。やがて西門慶は金蓮の部屋に來て見ると彼女は待ち兼ねたように、

『貴方はゆうべ何處へ被入しつたの。本當の事を被仰い。若し少しでも噓を吐けば灰神樂を上げてやるから』

『きのふお前達は皆向ふへ喚ばれて行つたので俺れは淋しくて堪らず、應二哥と一處に燈籠見物に出掛けたのは可いが、とう〳〵桂姐の家に引張り込まれ、夜通しつきあひ酒で閉口したよ。今內から使が來たので漸く歸つて來た處さ』

『フンそうで御座いましようとも。貴方の魂は妓館の內にあつても身體はどうにどこへか行つて

ゐたのでしよう。私しごもがきのふあすこに喚ばれたのは、表面のお體裁で、內証は晚に貴方に逢ふのが目的、玳安の野郎も御主人のおしこみで近頃滅切り口前が上りましたよ。きのふ空馬を曳いて歸つて來た時、奧さんが旦那はごこへ行かれたかねと聞くと、彼奴は口の下から旦那様は傅二叔と一處に看燈にお出掛けになり、只今桂姨家で酒を飮んで被入しやいます。そうしてあした迎へに來いと被仰いました。なごと旨い事を言つて其場を繕つてゐました。私しは此奴め何を言つてゐやがるかと思つて、あとで糺問すると包み切れず、とう〳〵白狀しましたよ。ごうです證據はチヤンとこちらに上つてをります。悪い奴だ。玳安の畜生は、主人とぐるになつていろんな細工をしてゐやがる』

『俺れは何も玳安にいひつけて开んな事を云はせた覺ねはないが、恐らく彼奴が氣を利かせたのだらう。實はゆうべ喚びに來たので仕方無しに向ふへ行つて見ると、李瓶兒は泣きの涙で實に可愛そうだつたよ。何分人手が無くて淋しいから是非此處に嫁入りしたいといふのさ。部屋はいつ出來るのだと訊いて數百兩の品物を出し、これを銀に替へて早く部屋の修繕して下さい、そうし

てお前と一處に暮して義姉妹の緣を結びたいが、お前が果して承知するかどうだかと云つて大層心配してゐたよ』

『それは願つたり叶つたりです。私しもねえ。此處へ來てから誰れ一人味方になる人がないのでホンに心細う御座います。あの人が來て吳れて仲好く暮したらどの位心強いか知れません。諺にもいふ通り、船多くして港を塞がず、車多くして路を碍げず。私しが若しあの人を嫌つてゐたら最初から近づけやしません。それよりも大姐姐の心を好く紀した方がいいでしよう』

『お前がそう云つて吳れるのは有難いが、何しろ未だ喪服が開けないのだから考物だよ』

と云つてゐる間に西門慶は袖の內から彈のような一物を取り出した。金蓮はこれを手にして暫くの間見詰めてゐたが何に用ゆる物かわからない。

『なんだか、訝しなものですね。恁うやつて握り締めてゐる中に腕が妙に痲れて來ます』

『これは南方緬甸國から傳へ來た倣勉鈴といふ物で、値は僅か四五兩のものだが爐內へ入れて事を行へば頗る妙だ』

『まさか、ではゆうべ』

と云つて金蓮は腹を抱へて笑つた。

或る日西門慶は一人の才取と立會つて李瓶兒の香蠟類を錢三百八十兩で賣拂ひ、其內百八十兩を李瓶兒の手許に殘し置き、殘金二百兩を受取つて工事費の足し前とした。そこで陰陽生が擇んだ二月八日を起工の日とし、大家人來招と主管賁四に銀五百兩を渡し、磚瓦木石及び職人の手間賃一切の支拂を彼等に任かせた。賁四は本名賁第といひ內相勤番の者であつたが、不都合の廉で逐ひ出され、其後大家の使用人となつたが乳母さ出來合つて駈落ちし、古着渡世をして暮してゐる中、琵琶簫管の藝事で西門慶と懇意になり、店の秤差しを勸めさせたが、中々世才に長け萬事拔目なく立働くので今度の普請係り　拔擢されたのである。

三月上旬は花子虛の百個日に當り、西門慶が普請を初めてから一個月有餘となつてゐた。李瓶兒は豫じめ西門慶と評議し、花子虛の位牌を燒いて後ち、家は賣らふか賣るまいか。若し賣らぬ考なら番人を寄越して下さいな。私しは貴方のお側で床を上げ床を疊み一生お世話をしたいので

御座います。何番目の妾となつても決して厭ひません。と相變らず涙を流して嫁入を急き立てる西門慶はいつもの通りなま温い返事をして、吳月娘と潘金娘と相談してみたところ皆異存はないいづれ部屋が出來上がる頃には喪服も開けるから、それまで待つて、遲くはない、などといふ。

李瓶兒は躍氣となり、

『貴方にそういふ眞實心があるなら、なぜ一日も早く工事を急がせて私しを引取らふとはしないのです。かうしてゐると一日が一年で待遠しくて溜りません』

『俺れは充分察してゐるよ』

『では位牌を燒いたら一先づ荷物を潘五娘の處へ運びましよう。新部屋が出來上るまで御厄介になるこいふことで、あした私しは向ふへ行つて話しますから、貴方からも宜敷とりなして置いて下さいな。三月十日は恰度百個日に當りますから、僧を喚んでお經を上げ靈を燒きます』

西門慶は承諾して一夜寐た。翌日家に歸つて金蓮に此話をすると、自分は異存はないけれど一往月娘に相談して御覽なさいといふ。そこで月娘の部屋に入り、一伍一什を語ると折柄髪を梳い

てゐた月娘は、

『貴方、それはいけませんよ』

と見事に反對した。

『第一未だ喪が開けないのでしよう。第二あの人の夫は貴方の信友ぢやありませんか。第三あの家はあの人の指圖で表面買つたことになつてゐるのぢやありませんか。それに澤山預り物もありますし、諺にも機は早くはないが梭は早いといふ。世間の噂を聞いてみると花家の親戚花大は簪にも棒にも掛らないゴロツキだといふぢやありませんか。若しそいつの耳にでも這入つたら頭の上の虱を掻く位の事では追ッつきますまい。私しのいふ事は趙錢孫李は愚か、誰れでも恐らく悪いとは申しますまい。だが此言葉をお用ゐになるとならないとは貴方の御隨意です』

そう言はれて見ると西門慶は一言もなく、前廳に來て椅子に凭れ、暫く考へてゐたが、偖てこれといふ名案も浮かばずスゴ〳〵金蓮の部屋に引返して來た。金蓮はヂロリと見て、

『大姐姐は何と被仰いました』

『いやもう大反對さ』

と西門慶は溜息吐き前記の次第を語る。金蓮は冷やかに笑つて、

『大姐姐のお話は至極御尤もです。初じめ親しい友達であつて其人の家を買ひ、そうして其人が死んで其人の妻を娶るといふのは、誰れが聞いても少し變に思はれますね』

西門慶は少し顏をしかめて、

『それは兎も角、俺れは花大の野郎が一番氣掛りだ。何しろ彼奴と來ては、輪の中でじつと納まつてるやうな奴ぢやないかね。服の開けぬ前に嫂が再婚すれば屹度何とか因緣をつけるに違ひない。そうかと言つて今更約束を反古にするわけにも行かないし、困つたものだ。何か好い工夫がなからうか』

『フン幵んな事はなんでもない事ぢやありませんか。貴方は向へ行つてそう被仰い。五娘と相談してみたところ、今、二階にウンと藥材が積み込んであつて、此上荷物を容れる餘地はない。暫く客間が出來るまで待つて吳れ。尤も向ふの部屋は出來る丈け急がせてゐる。その中造作も出來

上り漆が乾く頃にはお前の服が開ける。今無理に五娘の部屋に割込んで、葷さこも精進ともつかず、氣兼ねしながら暮すのも馬鹿馬鹿しいぢやないか。暫く時節を待つが好い、とそう被仰い』

『ウムなるほごそうだな』

と西門慶は喜んで此說を容れ、早速李瓶兒家に出掛けて行つた。李瓶兒は何は偖て措き話の模樣を聞くと西門慶は聊か言ひにくさうな體で、

『五娘に話してみたところが、新部屋が出來上るまで待つても遲くはなからう。何しろ彼奴の部屋は今いろ〳〵の物がゴチヤ〳〵に散らかつてゐて手が着けられない。それに服が開けない中にお前を娶るこ花大は屹度文句を言ふよ』

『开んな事はありません。彼奴が訴訟を起したので分けるものは分けてやり、取らせるものは皆取らせました。それに今更何も文句をいはれるわけはありません。諺にも嫂叔は門を通ぜず、初婚は父母に從ひ、再嫁は自分で極めるといふぢやありませんか。若し何こか言つて來たら私しはウンこ彼奴に恥をかゝせてやるから、大官人、決して御心配なさいますな。そして少しは工事が

進んだのですか』

『今漸く三間樓の屋根を葺いてゐる處だからね。漆がスッカリ乾くまでには五月の月へ入るだらう』

『そうですか、ではそれまで待ちましよう』

と酒肴を出して歡飮した。それから三十日間西門慶はパッタリ足を止めた。三間の玩花樓も落成して殘るは藤棚ばかりとなつた。五月五日李瓶兒は一席の酒を備へて西門慶を喚び迎へた。一つは粽の紐を解くこと、二つは嫁入の相談であつた。私しは此月の十五日に僧を喚んで讀經燒靈し、更に吉日を擇んで輿入をしようと思ひますがどうでしようといふことであつた。西門慶は、

『一體その日の顏振れはどんな者だね。花二哥の兄弟は皆來るのかね』

と訊くと、

『ねヽ招待狀を出して置きましたから來るかも知れません』

と李瓶兒は答へた。間もなく五月十五日となつた。その日は應伯爵の誕生日に當つたので、西

門慶は銀三匁の割前を彼に送り、一方銀五兩を玳安に託して李瓶兒家に贈り、晩に除服する約束で平安畫童の兩人を手傳ひにやつた。

正午、應伯爵家にゆくと謝希大、祝實念、孫天化、呉典恩、雲理守、常峙節、白賚光の外、賁第が今度新に加はつたので以前の通り十人組の會合であつた。席には二人の俳優が彈唱して酒を薦めた。一人は呉銀兒の兄弟呉惠といふ者で好く識つてゐたが他の一人は識らない。彼は跪下して、

『私しは鄭愛兒の兄鄭奉と申す者で御座います。どうぞ末長く御贔負を願ひます』

と挨拶した。西門慶は二人に銀二匁づゝ與へて首席に就き、かれこれする中に夕方になつた。玳安は馬を曳いて迎へに來たが聽て西門慶の側近く進み、

『二娘が早く來て下さいと被仰いました』

と囁いた。西門慶は目顏で向ふへ行けと知らせた時、應伯爵は忽ち玳安の肩を捉らへ、

『コラ俺れの前で逐一白狀しろ。キサマは質の好くない奴だぞ。俺れの誕生日は一年に幾度ある

と思ふ。未だ日が頭の上にあるのに一體誰れの使で馬など曳いて來た。内の奥さんの御川か、そ
れとも又あの邊の十八子のお使か、有體に申せ。若し噓を吐いたらお祝ひに一つ拳コツを與れた
上、一生嫁取りをしてやらないぞ』
『ハイ〳〵有體に申上げます。實は誰れの指圖でも御座いません。旦那が夜更しすると身體の毒
だと思ひまして、やつがれが氣を利かして迎へに參りました』
『馬鹿を拔かせ。汗んな道理があるものか。宜しい。けふは此儘にして置くが、いづれ其うち證
據を擧げて化の皮を引ん剝いてやる』
と一壺の酒と四盤の菜を取り卸し彼に與へた。やゝ暫くして西門慶は着更へに立ち、玳安を小
影に喚び寄せ、
『お前は向ふの家の顏振れを見て來たか』
『はい見て參りました。花三は鄕里に歸り花四は眼を病つたといふ事で出席しませんでした。唯
花大は夫婦揃つてやつて來て一日飲み食ひしてゐましたが、おやぢは一足先へ歸り、嬶が殘つて

奥さんから銀十兩と二枚の着物を貰ひ何やらお禮を述べて、之れも今し方歸りました』

『彼奴は何とか言つてゐやしなかつたか』

『いゝ何の異存がありませう。あした二娘が輿入れすれば三日の間お內へ來て世話をすると言つてゐました』

『そりや本當か』

『何で私しが嘘を申しましよう』

斯くと聞いた西門慶は喜び面に溢れ、

『そこで齋はもう濟んだのか』

『へい和尚はとうに歸りまして位牌の始末は濟みました。旦那に早く來るようにと二娘が被仰いました』

『ウンそうか、では外へ行つて馬の仕度をして呉れ』

玳安が出て行かふとする時、忽ち內廳から應伯爵が現はれた。

『此不屆者め。俺れには好加減の返辭をしやがつて、影へ廻つて主人と一處に旨い相談をしてるやがる』

『おい、あんまり大きな聲をして呉れるな。人聞きが悪いや』

と西門慶は笑つてたしなめると、應伯爵は聊かムキになつて、

『前にチャンと渡りをつけて置きさへすれば、何んにも言やしないのさ』

と席に引返し、衆人の前で此事をぶちまけ、西門慶を引ッ張り出して談じつけた。

『一體アニキはどういふ氣でゐるのだらう。恁ういふ大事なことを我々兄弟にも告げず一人で取極めて仕舞ふとは間違つてゐるね。花大(ホワダー)位ゐの奴が此縁談に反對したとて、我々兄弟が一瘤りとなつて贊成すればわけもなく話は纏つて仕舞ひます。さあ一々打ち開けて下さい。若し面倒が持ち上つたら、もとより火の中水の底も厭はぬ覺悟だ』

祝實念は側から、

『そうだともそうだとも、若し此事が李桂卿や呉銀兒の耳に這入つたら、こちとらの外聞に關は

るからな』

西門慶はしようこごなしに笑つて、

『では皆さんにお話し致しましよう。縁談は既に纒りました』

謝希大はこゝぞご膝を進め、

『そりやあ何よりお芽出度う御座いました。お輿入の時には一同で伺ひますから四人の藝妓ご振舞酒を、ごうぞタンマリごお願ひ致します』

『ゐゝ申すまでもなく皆さんを御招待致し升』

祝實念は隙さず、

『あしたはあした、けふはけふで前祝に是非一杯あがつて下さい』

そこで應伯爵は杯を執り、謝希大は酒壺を執り、祝實念は菜を捧げ、その餘の者は皆拜跪して西門慶の新娶を祝し、一度に三四杯の酒を盃に灌ぎ込んで彼に薦め、二人の俳優も跪下して十三腔喜遇吉日の一套を彈唱した。此時祝實念はそう言つた。

『あした宴會の時、是非この二人を喚んでやつて下さい』

西門慶が未だ答へぬうち、鄭奉は口を掩ふて言ふ。

『委細承知し致しました。その折は屹度伺ひます』

そこで又一杯飲んでゐる中に日が暮れた。西門慶はもう堪らなくなつて、

『皆さん御免』

と立ち掛けると、應伯爵はいつかな肯かず、無理槍に引留めようとする。謝希太は二人の中に割つて入り、

『惡る止めするのはそりや無理だ。先きやさほどまで思つてゐるのだからね』

と旨くその場を扱ひ西門慶を出してやつた。そこで西門慶は馬に騎り一散に馳け出して獅子街に來た。李瓶兒は孝髻を去り喪服を脫し、艶服艶粧して酒よ肴よと彼を迎へた。そうしてなみなみと酌いだ一杯の杯を彼に捧げ、四度叩頭してやうやく口を開いた。

『わたくしはけふ、先夫の靈を燒きました。若しおいやでなかつたら巾櫛の歡を奉じ、于飛の願

を遂げたいと思ひますが如何で御座いましょう』
と型の如く誓を立てゝ起き上つた。西門慶は下席に下つて一杯の酒を婦人に献じ席に就いた。
『けふ花大夫婦が來たそうだね。それで彼奴等は何とか言つてゐたか』
『私しは晝飯を出してから部屋に喚び寄せ緣談の話をしてみると、あの人達は一も二もなく贊成して、若し私しがあした行くなら三日間お手傳すると言つてゐました。私しは銀十兩と二枚の着物をやつたところ二人はしんから嬉しさうにお禮を言つて歸りました』
『向ふが開うといへば手傳ひに寄越しても差し支はないが、若し愚圖愚圖拔かしたら俺れは承知しない積りだ』
『私しだつて承知しませんよ。そんな理窟がありませんからね』
と銀象嵌の鍾に酒をなみ〳〵と盛つて西門慶に薦めた。何しろ近々輿入れする嬉しさに、李瓶兒は顏にこみ上げるやうな笑みを湛へた。
『けふ玳安が應家に貴方を迎へに行つた時、屹度皆が何んとか言つたでしょう』

『いやもう大變な騷ぎさ。初じめ應伯爵の野郎が嗅ぎつけて皆に發表したと思ひねエ。お祝だお祝だと言つて四方八方から杯が降るように集る、そうして逃げ出そうとすれば通せん坊をする。俺れは實に閉口したよ。漸く胡麻化して命辛ら〲出て來たところさ』

『貴方はそうされるほど、却て嬉しくはなくつて』

西門慶は李瓶兒の醉態を見ると唯もう可愛さと戀しさに身内顫き、二つの口から丁香を吐き、桃と杏がカチ合つた。

『哥さん。一刻も早く私しを引取つて下さい。そうすれば貴方も便利だし、私しもどの位安心するかしれやしません。今のようぢや心配で心配で、長く斯うして置かれたら屹度病氣になりますよ』

譯餘閒談

〔暖簾〕暖簾は綿入の布簾である。冬期部屋の入口に掛く。

〔金爐〕ソップ皿のやうな形で金屬製直徑一尺五寸乃至二尺位。表面左右に把手あり。

〔獸炭〕粉炭を獸形に作る。晉書に羊琇は性豪侈、炭屑を錬つて獸形に作り酒を温む。洛下の豪貴、咸な競うて之に效ふ。

〔寶篆〕寶篆は寶鼎だらうと思ふ。恐らく表面に篆刻してあるから斯くいふのだらうと思ふ。

〔龍涎〕龍涎又は龍泄といふ。眞甲鯨の内臓から分泌する一種の液で凝結して臘となり、岩に附着し或は海面に泛ぶ。淡灰色にして紅白の條あり、不透明にして揮發性を有し火を呼び易し。香料中の珍品なり。汎水、滲沙、魚食等の種類あり、汎水尤も上品なり。西名 Ambergris 日本では鯨の糞といふ。香譜に云、龍涎は大食國より出づ、其地龍多くして洋中の大石に蟠伏し臥して

涎を吐く。涎、水面に浮ぶ。土人は衆魚游泳して爭つて之れを嚙るを見て、往いて之れを採ると云々こ、蘇軾の詩に「香似龍涎仍釅白」などこあり。

〔猜拳〕猜拳は日本でいふナンコである。細い物を握んでその數を言ひ當てるのである。支那では餘程古くから行はれたものこ見ヘて、唐人の詩に「城頭擊鼓傳花枝、席上搏拳握松子」こあり。これは日本よりも餘程複雜で席上に備へある三色の種物（西瓜子こか杏仁こか松子こか开んな類ゐのもの）を雙手に握んでその一を出し、先づ奇耦を言ひ當て、次に數、次に色を言ひ當てゝ初めて勝負を決するのである。

〔牙牌〕三十二枚の象牙牌に骰子の目の二面を刻したもので、種々の遊戲法がある。現在盛行する牌九こいふ賭博は此牌で行はる。詳細は拙著支那風俗中卷賭博研究の條を見よ。

〔苫條〕これは日本の疊表みたようなものだらうこ思ふ。茜紅に染めてあるから隨分綺麗だつ

〔沈香〕沈香、白蠟、水銀、胡椒などいづれも當時の貴重品であつたのだらう。蕃地から大明皇帝へ貢献した目錄の中に此種の品物が餘り數多くなく記載されてある。

〔川廣〕 廣は四川と廣東とをいふ。支那藥材の集散地である。

〔眼紗〕 塵除けのため紗を以て眼を覆ふ。此處は人目を避けるためだ。

〔網巾〕 糸或は毛を以て網を作り髮を裹む。明初より行はる。

〔做勉鈴〕 四ッ目屋式の翫具。

〔第一云々〕 物事を贊成したり反對したりする時は第一何々第二何々と數へ上げるのは支那人の癖らしい。罪を數へるといふ言葉は恁ういふ處から出て來たのである。

〔趙錢孫李〕 日本の源平藤橘などと同じ意味である。

〔十八子〕 俗に變化の多き事物を言ふ。黃梅天（つゆの空）は十八變、女長じて十八變などといふ諺あり、此處では色街の女を指す。

〔噯飯〕 噯飯は飯の菜をいふのだらうと思ふ。

〔齋〕 齋は僧飯である。法事に振舞ふ精進料理である。

〔內廳〕 支那家屋の中央の客堂である。

〔巾櫛〕　巾は手を拭ふもの、櫛は髪を理するもの、巾櫛を執るは婢妾の仕事である。李瓶兒は謙遜して斯くいふ。左傳云定姜曰余は巾櫛を以て先君に事へり。

〔于飛〕　詩曰鳳凰于飛。夫婦和合の意なり。

一七

五月二十日は帥府周守備の生日であつた。西門慶は此日五星の祝儀と二枚の手帕を持参し、衣帽を整へ大白馬に跨り四人の小厮を従へて往訪した。鼓樂は客を迎へた。席間には夏提刑、張團練、荆千戸、賀千戸等の武官連がゐならんで酒席のうちに演劇の催しがあつた。玳安は一旦主人の衣裳を持ち歸りて日が西に傾く頃馬に騎つて迎へに來た。

『只今西街口で馮媽媽に逢ひましたが、彼れの申すには今日顧銀匠が注文品を持つて参り、旦那に是非見て戴きたいと申してをります』

斯くと聞いた西門慶は愴慌身を起して辭し去らうとすると周守備は肯かず、

『けふは貴方を最後までお止め致したいと思ひます』

と巨盃を出して薦める。

『大人の仰せに從ひ、此一杯を潔くお引受け致します。實は聊か用事があつてゆツくりしてゐられないのは甚だ遺憾で御座います。恕罪恕罪』

と言つて一杯を飲み干し立ち去つた。

李瓶兒はあの約束を思へば待遠しくてたまらず馮媽媽を出して樣子を探らせる。晩に來るといふので漸く安心し待つてゐると果して來た。李瓶兒は新調の裝身具を出して見せ、

『どうです、好く出來たでしよう』

『ウム如何にも好く出來たね。この艶は何とも言はれない。二十四日に結納して來月四日輿入れといふことにしようぢやないか』

そこで酒肴を調へ二人は一杯飲んでゐる中に丫鬟は席を拭き、紗帳の內に蘭麝を焚き絞絹を展べ衣裳を脫した。それから簫を吹くといふ馬鹿らしい仕業があつたがこれは說明の限りにあらず

西門慶は婦人に對つて、

『花子虛在世の時と較べると、どんなもんだらう』

『それは較べものになりませんよ。あの人は夢のように生きて夢のように死んだ人です。老公公在世の時は別室に寐てゐましたし、それからあの人が自由の身體となつた時には毎日内を外にしてゐたので、穢いから私しは決して寄せつけませんでした』

こそう言つて四角の盒の中から菓子を摘み出し、小金壺の内になみ〳〵とある瓊漿を杯に汲んで渡した。一更時分表の戸を慌たゞしく叩く者がある。馮媽媽は燭を點じて出て見ると、それは玳安であつた。西門慶は床の中から怒鳴つた。

『あした來いと言ひ付けて置いたのに、なぜ今時分來た』

玳安はイキセキ駈けつけたらしく部屋の入口に立ち、

『只今突然お孃さんとお壻さんが澤山の荷物を持つて御到着になりました。旦那をスグ喚んで來いと奥さんのお言ひつけで御座います』

西門慶は喫驚して撥ね起き、着物を着てスグサマ家に歸つた。家に歸つてみると客堂には燈燭があか〳〵として娘と壻と顏を並へて荷物は山の如く積載されてゐる。壻の陳敬濟は西門慶の顏

を見るや泣いて叩頭した。

『楊老爺が彈劾され聖旨が下り南牢に護送されました。一家一門は使用人に至るまで桎梏を受け充軍といふことに極りました、昨日府中の楊幹辦は夜通し奔走してをります。父は驚き、私と大姐に手廻りの物を持たせて當分こちらに避難せよと申されました』

『それでお父さんは』

『父は東京の伯母の家に隱れて樣子を探る筈です。いづれ事が治つたら厚くお禮をすると申しました』

『お父さんから何か手紙でもありましたか』

『はい、此處に御座います』

と陳敬濟は袖の中から一封の書を出す。西門慶はとりあへず封を切つて見ると、

春生陳洪頓首書奉

大德西門親家台覽茲に餘情を敍べず、邊關警戒雄州掠奪の件にて兵部王尙書は兵を救はず、軍機を愰りたるより、朝中の老爺に連累し、倶に科道官に依つて、重く彈劾され

聖旨惱怒あらせられ南牢に護送して監禁し三法司の會同審問あり、其門下親族用事人等は例に依つて邊境戍衛軍に充つ、生は此消息を一聞して驚愕投ずべき所なし、先づ小兒と令愛と箱籠を隨身して出發せしめ暫く親家府上の寄寓を乞ふ。生はこれより上京して姉夫張世廉に依て其後の成行を見る。事終るを待つて家に歸り恩に對して重報の事忘れざるべし、誠に恐る縣中甚だ聲色あり、別に銀五百兩を小兒に帶領させたり、返す〴〵も親家の費心を忘れざるべし、燈下草々不宣

仲夏二十日洪再拜

と認めてあつた。そこで取り敢へず酒飯の仕度をし、呉月娘が出て相手をしてゐる間に一方家人に命じて廳前の東廂三間を掃除させそこを二人の住居とした。そうして箱籠等一切の荷物は月娘の部屋に納めた。陳敬濟は別に五百兩の銀を出して西門慶に渡し宜敷運動して呉れと頼んだ。そこで呉主管を喚んで銀五兩與へその夜竊に縣署内の文書を調べてみたところ、果して東京から左のような通告が來てゐた。

兵科給事中、宇文虚中等一本を以て懇に宸斷を乞ふ。亟かに誤國の權奸を誅し、以て本兵を振はし以て邊境の禍を消せん。臣聞く、邊境の禍は古より之れあり、周の太原、漢の陰山、唐の河東、五代に及んで刻々寧日無し、我が　皇宋建國に至つて干戈四境を浸す者已に一日に非ず、然れども未だ聞かず、内、蛀蠹無くして外、腐朽の患あるを。語に云、霜降つて堂鐘鳴り雨下て柱礎潤ふ。迪吉逆凶必然の理あり。譬ば病夫腹心の疾已に久し。精血内に消ね、風寒外より入らば四肢百骸病を受けざる無し。盧扁と雖も能く之を治するなし。焉ぞ能く久しからん乎。今天下の勢、正に猶ほ病夫尫羸の極なり。君猶ほ元首也、輔臣猶ほ腹心也、百官猶ほ四肢也。陛下九重の

上に端拱し、百官庶政各下に盡職し、元氣内に充ち榮衞外にまもらば則ち虜患何に由つて至らん哉。今兵戈の患を招く者、崇政殿大學士蔡京に如くは莫し。本、憸邪奸險の資を以て寡廉鮮恥の行を濟す。讒諂面諛、上、輔君當道して贊元理化する能はず。下、宣德布政して元元を保愛する能はず。徒に利祿を以て自ら資け、希寵固位、樹黨懷奸して蒙蔽君を欺き、善類を中傷す、忠士これが爲に解體し、四海これが爲めに寒心す。朱紫を聯翩し一門を萃聚す。近頃たゞに議を失ふのみならず、伐東を主議し、内三郡を割き郭藥師の叛あり、卒に全國の背盟を致す。兩ながら和好を失ふ。此れ誤國の大なる者にして皆京の不職に由るなり。王黼は貪庸無賴にして行、俳優に比すべし。京の汲引を蒙つて政府に荐居す。未だ幾ならずして本兵を謬掌し、惟慕位苟安を事り終に一籌の展ぶべきものなし。欝に張達は太原に殘り之れが爲めに張皇失散す。今兵內地を犯し則ち又妻子を挈げて南下し自全の計を爲す。其國を誤る罪は誅戮に勝るべし。楊戩は本、紈袴膏粱を以て切に祖蔭を承け憑るに寵靈を藉る。兵柄を典司し閫外に濫膺し、大奸、忠に似て怯懦無比。此三臣は皆朋黨固結して內外を蒙蔽す。

陛下腹心の蟲者也。數年以來災を招き異を致し本を喪ひ元を傷く。役重く賦煩にして生民離散し盜賊猖獗、擧兵犯順して天下の膏腴已に盡き、國家の綱紀廢弛す。髪を擢くと雖も以て京等の罪を數ふるに足らざるなり。臣等罪を核科備員に待ち諫職す。徒に奸臣國を誤るを目擊し而して皇上に之れを陳べざれば則ち上は君父の恩に辜き下は平生の學ぶ所に負く。伏して宸斷を乞ふ。將に京等一干黨惡人犯を或は廷尉に下し以て薄罰を示し、或は極典を致し以て顯戮を彰し、或は例に照して枷號し、或は之を投じて荒裔し、以て魑魅を禦かは天意可回、人心暢快、國法以正、虜患自ら消せん。天下の幸甚、臣民の幸甚なり。

聖旨を奉じて蔡京を姑らく輔政に留め、王黼、楊戩を三法司に拿送し會問明白の來說あり。欽遵によつて續いて該三法司は過を定め、惡人犯王黼楊戩は本兵に職せず、縱に兵を深く入れ、生民を荼毒し兵を損じ將を折る。內地を失陷し律まさに斬に處すべし。家人、書辦官は手下事を壞る者なり、董升、盧虎、楊盛、龐宣、韓宗仁、陳洪、黃玉、劉盛、趙弘道等は枷號一個月に處し日滿ちて邊衛に發し軍に充つ。

西門慶はこれを讀んで色を失ひ暫く考へてゐたが軈て竊に家人來保、來旺を寢室に喚び寄せ、
『お前達はこれから大急ぎで東京へ行き、樣子を探つた上、その道筋に宜しく運動して呉れ。只陳老爺の處へ行つてはならんぞ。人目につくと困る』
と言ひつけ金銀寶玩を駄馬に着け脚夫を雇ひ、別に銀二十兩を二人に與へて、五更頃コツソリと且つ大急ぎで出發させた。
西門慶は一夜睡らず夜が開けるを待つて來昭賁四を呼び起し花園の工事を中止させ、大門を固く閉め他人の出入を謝絶し、又差し迫つた用向きの外は家人の外出をも禁じた。そうして彼は部屋の内を往つたり來たりして宛ら熱地にある蜒蚰のように煩悶した。無論李瓶兒の事など九霄雲外に忘れ去つた。呉月娘は慰め顏に、
『今度の事は陳家が向ふで仕出かしたので、內の方とは關係が離れてゐます。何も幵んなに心配するには當りませんよ。寃罪には眞犯者があります。借財には債權者があります』
西門慶はイラ〳〵して、

『默れ、女の知つたことぢやない。娘と壻と此處へ落ち延びて來た以上は近處の手前も考へなければならぬ。機は早くはないが梭は早い。羊を打てば駒驢は戰くといふぢやないか。若し怨みを抱く者などあつて根堀葉堀り穿鑿されたら俺れの家はどうなると思ふ』

これには流石の月娘も返へす言葉がない。實際門は固く閉めても禍は天上から來るものである。偖て李瓶兒は一日二日と待ち明かし三日目に馮媽媽を見せにやると何故か西門家の大門は鐵桶の如く固く鎖され人ッ子一人出て來ない。不思議に思つてゐるうちに約束の二十四日となつた。そこで馮媽媽は再び西門家の前に來て、今度は思ひ切つて戸を叩いたが更に答ふる者がない。暫くの間向ふ側の軒下に立ち樣子を見てゐるとやがて玳安が出て來て馬に水やる。馮媽媽はそつと彼の側に近寄り、

『哥さん、どうして近頃旦那は外へ出て來ないの。二娘の結納の仕度は此通り出來てをりますよ』

『おや誰れかと思つたら馮媽媽か。奧さんの方ではもう仕度が出來たのか。今この仕事が濟んだら早速旦那に申上げよう』

『ではね、此品物を持つて行つて旦那にそう言つて下さい。二娘は毎日苦勞してそれはもうおいとしい位窶つれて被入しやるよ』
玳安は早々馬を片附け内に入つたが、やゝ暫くして出て來た。
『旦那にそう申上げたところ、品物は正に受取つた。いづれそちらへ出向いて詳しい話をするこ被仰いました』
馮媽媽はスグに飛んで歸り李瓶兒に此話をした。それから李瓶兒は毎日待つてゐたが更に音沙汰がない。五月は早くも過ぎ六月初旬こなつた。彼女はもう待ちあぐんで茶も飮まず飯も食はず盆槍してゐる。或夜獨寐の床に耳欹てゝゐるこ忽ち戶を叩く者がある。それは正しく西門慶の聲なので、彼女は笑つて部屋に迎へ入れ、積る怨や喜びを述べてゐる中、鷄は啼き夜は明け、男は急に身を抽いて立上つたので驚き覺めアッこ一聲叫んだ時忽ち姿は掻き消す如く見失つた。馮媽媽は仰天して馸けつけて見るこ彼女は半信半疑の眼を見開き、
『西門旦那が今出て行つたが、お前は戶締りをしたかね』

『おや旦那がいつ被入しつたのです。それはチトをかしう御座いますね、奥さん心の迷ですよ。私しはチャンと見てをりましたが、影も形もありません』

それから彼女は丸で狐つきのような様子で毎晩男の夢を見ては妙な事を言出し、顔の色は黄ばんで身體は日々に痩せ衰へ、碌々食事もせずに寐てばかりゐる。潘媽媽は心配して醫療を勸め大街口の蔣竹山に來診を請うた。竹山は三十足らずの小柄の飄巾者で婦人の臥室に案内された。見ると婦人は髪もおどろに衾を抱へて坐し、憂愁に堪へざるような有様である。丫環は茶を勸め褥甸を備へ竹山仔細らしく前に進んで脈を執り、美しき婦人の顏をじつと眺め、診察終つて偖て言ふやう、

『フムわかりました。奥さんの御容體を拜見すると、肝脈絃は寸口を出して洪大。その陰脈は寸口を出して久しく魚際に上つてをります。主として六慾七情の致す處、故に陰陽交々爭ひ忽ち寒く忽ち熱く中に欝結して遂げない象ちがあります。瘧に似て瘧に非ず寒に似て寒に非ず、白日則ち倦怠嗜臥、精神短少。夜晩神守らず金夢は鬼と交す。これは早く治さないといけませんよ。若

し長引くと骨蒸の疾となり恐らく癆纏の憂がありましよう。惜しむべし惜しむべし』

李瓶兒はやうやく面を上げ、

『どうぞ先生を煩はして一服の良薬を戴きたいと思ひます、いづれ治つたら厚くお禮を致します』

『いゝ決して左んな御心配には及びません。これから歸つて調劑致しますから、それを飲めばヂキ治ります』

と言つて立去つた。馮媽媽は銀五星の藥價を包んで藥を受取り、さつそく病人に飲ませた處その晩から好く寐られて食事もだん〳〵進み日一日と元氣恢復し、數日の後ちには髪も上げ部屋の外を出て歩くやうになつた。

一日李瓶兒は酒肴を備へて竹山を招待した。竹山は豫ねて婦人の容色に心を留めてゐたのでいそ〳〵身裝りを整へて往訪した。中堂に入つた時婦人は盛裝して現はれ、先づ時候の挨拶を述べて茶を薦め部屋の內に請じ入れた。部屋の內には既に酒饌を陳設し麝蘭の薰り心地好く竹山の胸を悸めかせた。小丫鬟繡春は婦人の側に立つて金蒔繪の盤を捧げてゐたが中には銀三兩の禮金が

載せてあつた。婦人は玉盞を高く擎げ竹山の前に進んで禮を述べた。

『このあいだぢうは色々有難う御座いました。お蔭さまで病氣がスッカリ治りました。けふは床上げの祝で先生に此盃を差上げます。何も御座いませんが、どうぞお樂にゐて下さい』

竹山大に氣取つて三兩の銀を横眼に眺め、

『御丁寧の御言葉痛み入ります。病氣を治すのは醫者の役目で御座いますから斯樣のお禮を頂戴しましては濟みません』

『これはほんの私しの志です、まことに失禮ですが、どうぞ納めて置いて下さい』

竹山は再三辭退した後ち漸く受取つて席に就いた。そうして杯を擧げ乍ら婦人の顏を竊み見た

『奥さんはおいくつです』

『私しは當年二十四歳で御座います』

『それはマア花の盛りで御縹緻と言ひ何と言ひ洵に申分のないお暮しですが、どうして鬱結症に罹られたのです』

婦人は笑つて答へた。
『夫に別れて獨り淋しく暮す中、思はぬ病に罹りました』
『旦那はいつお隱れになりました』
『夫は去年十一月傷寒病に罹つて落命し、數へること恰度八個月になります』
『醫者は誰れをお喚びになりました』
『大街上の胡先生です』
『あゝそれは飛んだことをなさいました。あの男は東街上の劉太監の屋敷内に住んでゐる法螺吹です。太醫院出身でないから脈を見ても恐らく解りますまい。貴方はなぜあんな者にお見せになつたのです』
『近處の者に薦められてあの人の診察を受けたのですが、夫の死んだのは何も醫者が悪いといふわけでもありません』
『時に奥さんはお子供衆が御座いますか』

『いゝえ一人も御座いません』

『それはお淋しう御座いますね。未だお年が行かないのに孀暮しでお過ごしになつては冥利が惡う御座いますな。何とか好いお考へをなすつてはどうでしよう』

『私しもいろ〳〵人に勸められましてね。先頃一寸約束をしました』

竹山思はず膝を乘り進め、

『おゝそうでしたか。一體先きは何處の何者です』

『あの縣前に生藥屋を開いてゐる西門大官人です』

『ゑ、貴方はあの男とお約束なさつたのですか。それはまあ飛んだことで御座いましたな。私しは彼の内情を好く識つてをります。彼は表は商賣人ですが内實はゴロツキです。家内には五六人の妾と大勢の女中がをりますが、少し氣に入らないと片端しから叩き賣つて仕舞ふといふ有樣です。貴方は今私しにお話しになつて好かつた。それでなければ飛んで火に入る夏の虫で、出るに出られず大變なことでした。彼奴は打老婆（ターローポー）の親方です。坑婦女（カンフーニユー）の領袖です。それに近頃東京か

ら差し紙が廻つて來てゐるようですから、いづれあの家も官に沒收される事になるでしよう』
婦人は此言葉を聞いてしばし開いた口が塞がらない。思へばあすこに大分の物を預けてあるが此頃彼がピツタリ足を止めたのはそういふ魂膽かと考へ乍ら、一方竹山の恭謙な樣子を見て心動き、
『御親切にいろ〳〵敎ゑ下すつて有難う御座います。私しは全くそういふことゝは知りませんでした。何處か外に良い口があつたらお知らせ下さい。私しは貴方のお言葉を確く信じます』
竹山はこゝぞと極めて眞面目な調子で、
『奥さんは一體どういふ方面をお望みです。それに依つて私しも考があります』
『別に大した六ヅかしい注文はありません。そう申しちや失禮ですが、若し先生のような方があつたら』
竹山は渡りに舟、と思はず席を立つて婦人の前に兩膝突き、
『それは願つてもない良緣です。實は妻を失つて久しく獨身暮しでをります。内には厄介者は一

人もをりません。若し奥さんがそういふ思し召しがあれば』
と憫然な聲を出して見上げた。婦人は笑つて彼の手を取り、
『どうぞ、お立ち下さい。貴方はなに年のお生れです。奥さんはいつお隱れになりました。若し結婚なさる積りなら媒人を立てなければ禮儀に背きやしませんか』
竹山は跪下したまゝ、
『私しは今年二十九歲正月二十七日卯の時の生れです。不幸にして昨年妻に別れました。實は貧乏暮しで何も貴方に差上げることが出來ないのは遺憾ですが、貴方がそう被仰つて下されば、仲人などゝいふ者は別に必要の無いことだと思ひます』
婦人は誇らしげに微笑んで、
『そうですか。開んなら内の馮媽媽を假の媒人として吉き日を撰んで聟入なすつては如何で御座いましょう』
竹山は慌てゝ拜跪し、

『それはもう願つてもない有難いことです。私しは再び父母に邂逅つたような氣持が致します。全く三生の大幸です』

と立上り、一杯の交歡酒を飲み合つて結婚の約束した。竹山はもう有頂天になつて夜明けまで酒を飲みつづけてやうやく歸つた。婦人はそこで馮媽媽と相談し、西門慶はもう迚も當てにならないから竹山を聟に取つた方が好いと極め、六月十八日を擇んで竹山を迎へ、三日を過ぎて後ち婦人は三百兩の銀を出して彼に與へ、己が家を手取れして間口二間の藥店を開いた。そ　で竹山は往診に出たり藥を賣つたり中々急がしかつた。間もなく一頭の驢馬を買つて往來を走り廻つた

譯餘閒談

〔守備〕守備は官名である。明初南京守備等の職を置き、勳戚及び太監等を任命してゐたが、その後軍事日日に繁くなり一城一堡に此官を置いた。淸時代には綠營武人の職であつた。守備は

都司に次ぐ官位で日本の陸軍大尉位の資格である。明初は顯職であつたが中葉以後益す〳〵下落し清時代には極めて低い地位となつた。

〔提刑〕提刑は刑獄を點檢する役目である。所部の獄訟を掌察し其曲直を平かにするためである。明清時代には按察使と言つた。一省の司法長官であつた。

〔團練〕團練は本來義勇隊である。唐時團練使といふ官あり、大は十州を領してゐたが、後ち刺史の職分に入り、宋時その名目はあつたが虚位空官であつた。

〔幹辦〕宋官多く幹辦の名目を用ゆ。幹辦皇城司、幹辦公事の類あり、これを幹辦官といふ。

〔大姐〕小姐大姐は女子の通稱で、日本語のお孃さんとか、ねえさんとか言ふ位の意味である現在少しく變化し令孃に對して小姐を用ゐ、女中に對して大姐を用ゆ。

〔尙書〕兵部尙書は陸軍大臣位の役である。

〔科道官〕科道は觀察御史である。あら探しの役目である。左の給事中と同じ。

〔給事中〕給事中はお諫め役である。明時代には吏戸禮兵刑工の六科に分けて給事中の職を置

いた。

〔大學士〕　唐宋時代には宰相これを勤めたが、明初六部に政權を移し大學士は顧問官こして備へられ官位は僅に五品であつた。後ち宣宗の時、三揚入閣し、師保尙書を以て大學士を兼ね、六卿より尊くなつた。淸はこれに因り、位は正一品で宰相の職分こした。

〔三法司〕　理獄の官である。明淸時代重大事件は刑部、都察院、大理寺等會審す、故に三法司こいふ。

〔褥甸〕　褥甸は脈を見る時、腕を置く小蒲團である。

〔寸口〕　寸口は手くびから一寸下がつた處に動脈があるのでそれを指示したものである。

〔魚際〕　魚際は親指の下、即ち掌こ下臂と接合した部分の凹處である。王叔和脈經に云ふ、魚際より高骨に至る。しりぞいて一寸の處を其名を寸口こいふ。その骨自ら高し、寸より尺に至る名けて曰く尺澤。故に尺は寸後尺前の部分でその名を關こ言つてゐる。陽より陰に入る境であるから關こいふ。

〔骨蘸〕　骨蘸は病名である。現令何病に當て嵌るものか一寸わからない。

〔屬纊〕　屬纊は子供が出來ないこいふ事である。

〔五星〕　星は秤りの目盛りである。祝儀、無祝儀の贈銀は銀何匁こ言はず何星こいふ。藥禮の場合にも醫者を敬ふ心から斯く言ふ。

〔傷寒病〕　腸窒扶斯。

〔太醫院〕　太醫は官名である。秦漢太醫令あり、少府に屬す。醫藥を主る。歷代これに因る。隋、太醫署を置く。宋改めて太醫局こなす。元又改めて太醫院こなす。明淸みな之れに因る。世俗皇室の醫を稱して太醫又は御醫こいふ。

〔打老婆〕　打老婆、坑婦女いづれも婦女を虐待する男である。

〔交歡酒〕　交歡酒は一杯の酒を二人で飲み干すのである。

一八

偖て來保來旺の兩人は東京萬壽門內の宿屋に着き、翌日街に出て樣子を探つてみると、兵部王尙書は昨日審問の結果罪狀明白となり聖旨下つて秋後處決さるべし。只楊提督部下の親族人は未だ全部逮捕するに至らず從つて之れは未決になつてゐる。そこで二人は禮物を懷中し、龍德街の牌樓の下まで行つて暫くそこに立つて蔡府の門前を窺つてゐる。間もなく靑衣の男が一人府內から出て來て急がしげに東の方に行く。それは見識越しの楊幹辦であつたが、彼一派には決して口をきいてはならぬといふ主人の言付けがあるので其まゝやり過ごし、恐る〳〵門前に進んで、

『太師老爺（タイスーラオヱ）は御在宅で御座いますか』

と訊ねた。門番は横柄に、

『老爺は朝中の議事から未だお歸りにならないが、その方は何で左樣な事を訊ねる』

『實は管家翟爺に少々用事が御座いますので是非お目通りを願ひたう存じます』

『管家翟爺も生憎不在である』

これはタヾでは埒が明かないと思つたので、來保は懐中から銀一兩出してそつと門番に渡した門番は俄に面をやわらげ、

『お前は老爺にお目通りしたいのか。それとも又學士太師老爺にお目通りしたいのか。大家翟謙は老爺丈けのお係だが、小管家高安は家事一切の切盛りをしてゐる。それに只今老爺は朝中の議事でお急がしいので、此處には唯學士太師老爺丈けお在でになる。お前は何の用かは知らぬが、高管家に逢つて話をした方が早道だよ』

と親切に教へて呉れた。そこで來保は楊提督府中の者であることを語ると門番は粗畧に扱はず早速高安に引きあはせた。

『手前は楊爺の親戚の者で御座います。本來楊幹辦と同道して老爺に稟見を求むる筈でありましたが、後方で食事をしてゐる間に幹辦が出て仕舞つたので一足遲れて參りました』

と來保は銀十兩の包物を恭々しく差し出した。高保はこれを受取つて、
『おゝそうでしたか。楊幹辦は今の先き此處を出て行きました。老爺は朝中の議事で急がしく未だ御歸館ありません。暫くお待ちなさい。大爺に引見致しますから』
と氣輕に來保を引連れ第一大廳の旁に設けある儀門を潛つて南向き三間の客堂(第二大廳)の前に暫く待たせられた。そこには綠漆の欄杆、朱紅の牌額などがあつて、中にも目立つのは大理石を彫刻した天子の御筆、欽賜「學士琴堂」の四字である。元來蔡京の子蔡攸は父にも勝る寵臣で祥和殿學士兼禮部尙書を勤め太乙宮を取締つてゐる。
やがて蔡攸は深衣軟巾といふ打扮ちで正面の台上に坐し、來保を側近く召し寄せ、
『その方は何川あつて參りたるか』
と問ふ。來保は拜跪して、
『やつがれは楊爺の親戚陳洪の家人で御座います。府中の楊幹辦と一處にお目通りを願ふ筈でありましたが、圖らずも幹辦は先きに參り、甚だ申し遲れて相濟みません』

と懐中から一通の掲帖を取出して捧げた。蔡攸は之れを受取つて見ると白米五百石と記してある。そこで思はず微笑を洩し、

『蔡老爺は連日閣議で心配されてゐる。殊に昨日は三法司の會審あり、楊老爺は右相李爺の秉筆に依つて聖上の寬恩あり、その部下の犯人は追つて罪を精査してそれ〴〵處分あるべし、その方はこれから李爺の方に參つて宜敷取りなして貰ふが好い』

來保は叩頭し、

『やつがれは李府を存じませんが、どうぞ楊爺の名に依つて老爺の御憐憫を仰ぎたう御座います』

『李府は天漢橋の北、高坡大門樓ぢや。その邊に參つて當朝の右相、資政殿大學士兼禮部尙書諱は邦彥と申せば誰れ知らぬ者は無い。只今家人を差添へて遣はすに依つて同道するが可い』

と直に祇候官を喚んで一封の書を作らせ、管家高保に旨を含めて同道せしめた。

その日朝中の議事散じ、李邦彥は一人の公卿に送られて轎を已が府內に乘り入れ廳上に立つた門番は慌たゞしく馳せ寄り、

『只今學士蔡大爺のお使で管家が參りました』
と言上した。邦彥は身に大紅緺紗袍を穿ち腰に玉帶を繫け、禮服其まゝの姿で、
『おゝそうか、早速此處へ通せ』
と先づ高保に面會し、次いで來保來旺を喚び入れた。高保は蔡攸の封書に禮物の目錄を添ゐて差出した時、來保來旺は廳臺の下に拜跪し禮物を捧呈した。邦彥は一通り之れを見終つて、
『蔡大爺のお言葉添ゐで、しかもそれが楊老爺の親戚の申出とあれば、斯る禮物を受ける事は心にもないことである。況んや楊爺今回の件は昨日聖心飜り、事無く落着した。たゞ其部下の若干人は科道官の論告重く、それ〲罪を決した』
と言ひ乍ら堂侯官に命じて求刑書を持ち來らせ來保の閱覽を許した。見ると
『王黼部下にては書辦官董升、家人王廉、班頭黃玉、楊戩部下にては書辦官盧虎、幹辦楊盛、府椽韓宗仁、趙弘道、班頭劉成、親黨陳洪、西門慶、胡四等みな鷹犬の徒にして虎の威を假る狐の輩なり、ゆゑに勅を乞うて法司に下し、或は之を荒裔に投じ以て魍魎を禦ぎ、或は之を典刑に置

き以て國法を正しうせん』

と記してあるので喫驚し、

『やつがれは此西門慶の家人で御座いますが、どうぞ老爺、開天の大御心を以てお救ひを願ひます』

と額を地にすりつけた。高安も拜跪して彼のために申添へた。邦彦は五百兩の金銀に心動き、侍者に命じて書案筆硯を運ばせ、巻上の西門慶といふ字を賈廉と改作して示した。そうして禮物を受取つた。尙ほ蔡學士に宛て返書を認め、高保來保の兩人に銀五兩一封づゝ渡して立去らせた

そこで來保は途中高管家と別れて宿屋に歸り、早々行李を收めて出發し、夜を日に次いで清河縣に歸つて來た。そうして東京に於ける運動の次第を逐一申述べた。西門慶は頭から水を浴びせ掛けられたようにゾツとして月娘に對ひ、

『早く運動させて好かつたよ。若し一日遲れたら取り返しのつかないことになつた』

と語つた。それから二日ばかり過ぎて門を開け、暫く中止してゐた花園の工事も再興した。同

時におもてにもぶら〳〵出歩いた。玳安は或日馬に騎つて獅子街を通ると李瓶兒の家がいつしか立派な藥屋に化けてゐる。朱塗の小櫃、金ピカの額、軒頭高く吊した掛け看板も目立つて店內には藥材がウンと積んであり中々繁昌の樣子。

『二娘が番頭を雇つて藥店を開きましたよ』

と歸つて西門慶に告ぐ。眞逆彼女が蔣竹山と結婚したとは知らぬから半信半疑でゐる。白露冷やかに秋風そよ〳〵と吹く七月央頃西門慶は馬に乘つて街上を通ると忽ち應伯爵、謝希大の兩人に行き逢つた。

『おやこれはお珍しい。私しどもは度々お宅に伺ひましたが、いつも御門がしまつてゐるので遠慮してをりました。時に奧さんをお迎へになつたそうですが我々に御披露なさらないのはどういふわけです』

『こんな事をお話するのもいやだがね、實は此間から親戚の陳家に少しゴタ〳〵があつて嫁取ごころの騷ぎでなくなつた』

『ゐゝ幵うでしたか、些つとも知りませんでした。時にけふは全くの奇遇ですから、我れ〳〵二人は是非とも貴方を歡迎しなければならない。これから一つ吳銀兒の家へ押しかけましよう』と有無を言はせず引張つてゆく。西門慶は已むなく二人の相手をして夕方になつて漸く追放され、東街口まで來た時、南の方からヨロ〳〵やつて來た馮媽媽とハタと行き逢つた。馮媽媽は慌てゝ其塲を脫づそうとするのを西門慶は醉眼に早くも認め、

『おいお前は何處へゆく』

『城外の寺に魚藍會がありまして、二娘のお使で亡くなられた二爺の箱庫を燒いて參りました』

『二娘は此頃景氣が好いこいいふ話ぢやないか、俺れはあした御機嫌伺ひにゆく積りだ』

『何の貴方、好い處の騷ぎぢやありませんよ。あの緣組は鍋の飯を食ひ込まれてゐるようなものです』

『ゐ、二娘はもう結婚して仕舞つたのか』

『だつて旦那もあんまり酷う御座いますよ。私しが結納を持つて行きましたのに、それから何の

お話がありませんですもの』

『ウム、で、一體相手は誰れだ』

『相手はね、命の親のお醫者さん』

と馮媽媽はありし次第を殘らず語り、

『これといふのも皆旦那の罪ですよ』

西門慶は斯くと聞いて人もあらふにあのチビの助平と結婚したかと思ふと腹が立つて堪らず、物をも言はずそのまゝ馬に一鞭呉れて立ち去つた。家では呉月娘、孟玉樓、潘金蓮、西門大姐の四人が前廳の廣庭に出て月下跳馬索兒(ユヱシヤートンマソール)といふ遊戲をしてゐたが、今歸つて來た主人の姿を見て月娘、玉樓、大姐は早々奥へ引込んだ。獨り金蓮は居殘つて庭の柱に凭り脫げ鞋を穿きかけてゐると西門慶はづかづかと側へ寄り、

『キサマ達は呆れた淫婦だ。百索兒(パサール)などして何が面白いか』

とイキナリ二蹶りほど金蓮を蹶つて、小厮や下女を叱り飛ばし月娘の部屋に行かず、そのまゝ

西廂の書齊に入つて頭からスッポリ夜着をかぶつて寐て仕舞つた。これは常にないことだから衆女は大に心配した。殊に月娘は金蓮を怨んだ。

『旦那が醉つて歸つた時には少し氣を付けて下さいよ。お前さんが鞋など持つてゲラ〳〵笑つてゐたお蔭で、私しどもまで蟲ケラ同樣なお小言を聞くからね』

孟玉樓は側から、

『私しどもは何と言はれても仕方がありませんが、大姐姐(ダーチーチー)まで淫婦の巻添ひを食ふのは酷い』

金蓮は默つてゐず、

『三人も四人も此處にゐるのに私しばかり打たれて本統に間尺に合やしない』

月娘はムッとして、

『旦那がお前さんを打つたのは、私しども一同を打つと同じ意味になります。上下の區別を辨へない人だね。少し言葉を謹しみなさい』

金蓮は月娘の語氣を察し、

『いゝ決してそういふ意味で言つたわけではありません。けふの事は私しには何が何だか薩張りわかりませんが、イキナリ突ッ掛つて被在つたのですから、屹度私を打ちたくなつてお打ちになつたので御座いましよう』

『まさか、そんな事はありますまい。犬だつてタヾは打たれませんよ』

玉樓は側から口を出し、

『大姐姐、小廝を喚んで訊ねてみたらごうでしよう。旦那はけふ何處で御酒を召上つて被入つたか知れないが。いつもよりお歸りが早く御機嫌が悪いのは屹度外で何かあつたのですよ』

間もなく玳安は月娘の前に喚び出された。

『お前はいつも出鱈目を言ふ男だが、けふは少しでも嘘を吐くと承知しないよ。皆に言ひつけて十ばかり打たせるからそう思つておいで。旦那は一體けふ何處へ被入つてごういふことがあつたのだい』

玳安は目を丸くして、

『へい〳〵決して偽りを申しません。旦那はけふ應二叔に誘はれて呉家で御酒を召し上がりましたが、歸りがけに馮媽媽に行き逢ひ、花二娘と蔣太醫と結婚の一條をお聽きになり、急に御機嫌が惡くなりました』

『まあ、あの人も呆れた淫婦だ。無闇に人と結婚して飛んだ飛走りを私しの方へ持つて來たものだ』

『二娘はお嫁に行つたのではなく蔣太醫を壻にお取りになつたので、本錢を出して藥店を開いたところ、それが旨く當つて大層繁昌する樣子で御座います。先日私しはそう申上げたところ旦那樣は御信用なさりませんでした』

孟玉樓は又口を出し、

『そう言へばあの方の御亭主が亡くなつてから幾日になるのだらう。服が開けない中に結婚するなんて全く禮儀を無視してゐますね』

月娘は冷やかに、

『近頃そんな義理難いことを言つても通用しませんよ。禮儀も糸瓜もあつたものぢやない。夜晝男と一處に酒を飮んで戲けてゐる人に何の貞節がありましよう』

此言葉は一つの棒で二つの者を打たようなものだ。玉樓も金蓮も皆喪服が開けない中に再婚したので、少からずアテられ、コソ〱と部屋に下つた。

壻の陳敬濟は此處に來てからもう二ケ月ほどにもなる。父の罪もどうやら極つて彼は日蔭の身となり、長く西門家の居侯をして暮さなければならぬこととなつた。西門慶は彼が毎日遊んでゐるのを退窟だらうと察し、來昭を大門の見張役に轉じ、賁四と共に花園工事の監督を彼に言ひつけた。彼の妻西門大姐は晝はいつも夫と別れて奧に入り月娘その他の婦人仲間と食事を取り夜は前邊の廂房に歸つて夫と共に起臥した。だから陳敬濟は西門家の內庭にどんな女がゐるか少しも知らなかつた。或日西門慶は提刑所の賀千戸を送つて出て行つた時、月娘は孟玉樓と李嬌兒に對つて、

『けふは壻殿の慰勞會を開いてやらうぢやありませんか。あの人も此頃は工事の監督で大分骨を

折つてゐるようです。人の家の子供といふ者は氣の毒なものです。朝は早くから起き日の暮れるまで働かなければならないのだからね。時々御馳走でもしてやらなければ可愛そうですよ。どうでしよう、貴方がたの考は』

玉樓は答へて、

『本統にそうで御座います。大姐が被仰らなければ誰れも先き立つて申す者は御座いません』

そこで一台の酒肴と點心を用意して陳敬濟を奥の部屋へ招いた。敬濟は毎日裏の方で淋しく食事をするのが常であつたが、けふは珍しく月娘に喚ばれたのでその日の仕事を賁四に頼み、いそ〳〵後方に來た。月娘はにこやかに迎へ、

『毎日仕事に御精が出るからいづれ御褒美を出さうと思つてゐました。けふはお父さんがお留守でもあるし、ゆツくり一杯の水酒(スイチユ)を飲んで下さい』

と食桌の前に坐らさせた。そうして月娘は一杯、酒の相手をした後ち小玉を喚び、

『大姑娘(ダークーニヤン)を呼んで被入つしやい』

『大姑娘は只今手が塞つてをりますが、間もなくおいでになります』
すると隣室で骨牌を搔き交ぜる音がガラ〳〵と聞れた。
『誰が抹牌(マーパイ)してゐるのです』
『玉簫が大姐のお相手をしてゐるのです』
そこで敬濟は怒鳴つた。
『お母さんがお喚びになるのに、お前は何故出て來ないか』
大姐は間もなく簾をかゝげて現はれ、夫と向き合つて坐した。月娘は大姐に對ひ、
『お前さんの旦那は骨牌をお取りになるかね』
『ゑゝ少しは知つてをりますが、それも移り香ぐらゐの處で甚だ危ぶないもんですよ』
月娘は一も二もなく此言葉を信じたが何ぞ知らん。敬濟は詩詞歌賦、雙陸、象棋、析牌、道字、何一つ知らぬことがない道樂息子だ。月娘はやがて、
『では隣の部屋に行つて骨牌を取りましよう』

『いゝ私しは誠に不調法者ですから、ごうぞ、お母さんと大姐と向へ被入つて下さい』

『何もそんなに遠慮するには當りませんよ。貴方は娘の聟で、內の子供と同樣のものさ』

と次の部屋に導いた。その時孟玉樓は茜紅の毛氈の上で骨牌をまさぐつてゐたが、今陳敬濟が這入つて來たのを見て急に身を翻へして出て行かふとする。月娘は押し留め、

『これは內の聟さんですから構ひませんよ』

と一方敬濟に對つて、

『三娘ですよ』

と紹介した。敬濟は身を低くして挨拶し玉樓はこれに答へた。續いて三人の女は席に就いて抹牌した。敬濟は傍に立つて見てゐると間もなく大姐が負けたので、彼は代つて席に就き二人の女を相手にする。やがて玉樓は天地分を出し、敬濟は恨點不到を出し、月娘は四紅沉八不就を出したので、雙三不搭、兩么兒和兒不出といふ場では手の着けようがない。それでごうしようかと銘々思ひなやんでゐるところへ、忽ち簾を掲げて這入つて來た者がある。見ると銀絲でからげた高

鬢に活きた花を挿し、ホヽと笑つて口を開いた。
『おやお壻さんが此處へ來て被在るのね』
敬濟は首を捻ぢ向けると、これはまあ何といふ美しい女だらう、五百年のカタキ、三十年の恩愛が邂逅つたように思はずぼーと見詰める。月娘は側から、
『五娘ですよ。御挨拶なさい』
と注意した。敬濟は立上つて丁寧に揖をすると金蓮は輕く萬福と答へた。月娘はやがて金蓮を喚び、
『五姐、一寸此處へ來て私しの手を見て下さい。これは鴉を出したら屹度勝つでしようね』
金蓮は月娘の側近く進み、片肘を炕の欄に掛け、片手を以て白紗團扇を拈りながら覗き込んだ
『そうですねヽ、此手は雙三のくッつきをやり過ごせば天不同ですから和牌が來れば勝ちますよ』
一同はこんな事で夢中になつてゐるところへ玳安が毛氈包を抱へて這入つて來た。
『旦那様がお歸りになりました』

月娘は慌てゝ小玉に言ひつけ、敬濟をそつと潛門から出した。西門慶は家に歸るとスグ花園に入つたが一通り工事を見終つて後ち忍び足で金蓮の部屋に來た。金蓮は慌だしく出迎へ、着物を脫がせ乍ら訊ねた。

『けふの見送は大層早く濟みましたね』

『ウム、提刑所の賀千戶が新平寨の合衞所の相知に榮轉したが、向ふから知らせて來て見れば、送らないわけにゆかない。で一寸行つて來たのさ』

『貴方は御酒氣が無いようですね。一本つけさせましよう』

と丫鬟に命じて食桌の仕度をさせた。西門慶は酒を飮み乍ら、

『花園の棟上には友達が色々の物を祝つて吳れるそうだが、こちらも準備して置かずばなるまい料理人の手が少し足りないようだ』

間もなく日が暮れ春梅は燈を運んで來た。西門慶は晝間の見送りに勞れてゐたので二三杯の酒が程好く廻り寐台に入ると共に雷のような鼾をかいた。金蓮は中々寐つかれず碧紗帳の內でうる

さく襲來する蚊を燒いてゐた。折しも七月二十日の夜で未だ中々暑い。やがて西門慶は目を覺し端しなくも李瓶兒の話が出た。
『本統にあの人には腹が立つよ』
と金蓮は呟いた。
『どうした』
『どうしたも無いもんです。此間貴方が私しを蹴つたでしよう。三人ゐたのに私しばかり目蒐けてさ。お蔭で私しは人から怨まれて間尺に合やしない』
『誰れかお前に愚圖々々言つた者があるのかね』
『ゐゝありますとも。奥さんから散々毒づかれましたよ。上下の區別を知らないなんて、本統に私しは口惜しくて堪りやしない。何だつて貴方は蝦蟆を飼つて病氣のお咒ひするのですよ』
『あれは何もお前を憎んでやつたわけではない。實はあの日呉銀兒とこから歸りがけに、ひよつくり馮媽媽に逢つて話を聞くと、李瓶兒は蔣太醫と一處になつたといふ事だ。人もあらふに矮忘

八を亭主に持つさはあんまり俺れを踏み付けにした話だ。又花大の曲者がそれを見て默つてゐるのも不思議だ。これには屹度何か曰くがあるさ考へたのさ。それに何の怨があつて俺れの向ふを張つて藥店を開いたかさ思ふさ腹が立つて堪らないぢやないか』

『だから私しが言はぬこさぢやない。先きに箸を下した者がおマンマを食べますよ。懲ひ大姐姐に相談したのが貴方の失策です。いつも人にお給仕させてゐては杓子加減が狂ひます。今更誰を怨むこさもありません』

此一言に西門慶は耳の附け根が赤くなるほご慣つた。

『お前にそう言はれるさ恥しい。いづれ俺れは彼奴を追出す口があるだらう』

讒言さいふものは恐しいものである。それから西門慶は月娘の部屋に全く足踏みしなくなつた入川な道具は女中などに言ひつけて取寄せた。

一方潘金蓮は化粧に注意し精限り機嫌を取つたので益々西門慶の寵愛を一身に萃めた。そうして西門慶の留守の間にはそつさ陳敬濟を喚び寄せて茶を飲み象棋なごさして遊んだ。敬濟は悧し

い質で金蓮は心から氣に入つたが、西門慶を懼れて未だ手を下さないでゐる。

一日新築家屋の棟上式が行はれ、紅帛菓盒種々の贈物を受け、大工其他の職人を犒らひ、正午大廳に數多の客を迎へて祝酒を振舞つた。客が散じた頃は日は未だ高かつたが、早朝から起きた西門慶は疲勞して後方へ行つて寐た。其隙に陳敬濟は金蓮の部屋に來て茶を求めた。金蓮は床上に坐して琵琶を彈じてゐたが、

『けふは棟上で表の方には御馳走がウンとあつたのでしよう、私しの處の不味いお茶をわざわざ飲みに來なくとも好さそうなものだ』

『いゝえ、どう致しまして、夜中から起きて目が廻るように急がしく、いまだに何一つ食べません』

金蓮は聲を低めて、

『お父さんは何處にゐるの』

『奥の部屋でお休みです』

『お前さん、どうして今まで何も食べなかつたの。あの春梅や、そこにある餡入の蒸菓子を出し

てお聟さんに上げて下さい』

春梅は四皿の小菜を取り出し炕上の小机の上に置いた。敬濟はこれを食べながら、

『五娘、貴方が彈いて被在る琵琶は何の曲で御座います。何故私しに唱つて聞かせないのです』

『あらまあ此兒は』

と金蓮はホヽと笑つて、

『私しはお前さんの附き物でないから歌を唱つて聞かせるわけにはゆきません。そんな事を言ふとお父さんに言ひつけるよ』

とわざとねめつけた。敬濟は嬉しさうに笑つて跪き、

『五娘、怒つてはいけません。決して二度と恁んな事を申しませんからお宥し下さい』

とわざと謝まつた。こんな風に二人の仲は段々親密になり或はお茶飲みに或は飯食ひに或は肩を擦れ合つたり或はキッスといふ具合に益々際どくなつて来た。

譯餘閒談

〔牌樓〕牌樓は掲示板の一種である。即ち忠孝節義功業偉勳を頌德し、或は官吏試驗級第者の姓名を發表す。形ち門形をなし屋根あり額あり、通行口は中央高く大きく左右小なり、扉無し。石造あり木造あり。少し意味は違ふけれど日本の鳥居に類似してゐる。

〔靑衣〕黑服。

〔管家〕家老執事用人などに類似した役。

〔太乙宮〕太乙宮は星卜を掌る。

〔深衣〕深衣は古代禮服で衣裳相連り、袂あり、一見日本服に似てゐるが、下からかぶつて着用する點は異つてゐる。此處では、ふだん着物に用ゐてゐる。

〔箱庫〕これは何だかわからぬが恐らく花子虛の遺物だらうと思はれる。或は紙製の祭器か

〔月下跳馬索兒〕縄飛び。

〔男女の區別〕男女の區別が餘りに嚴格のため家長ならぬ限りは、男は男、女は女こ別々に食事し、ふだんゆツくり顏を見るこごさへ出來ぬ。繼母や里方の母は聟こ一處に食事さへせぬ。遇ま一處に會合すれば敬濟こ金蓮のような不義の仲を作る。

〔水酒〕水酒は釀造したまゝの酒である。日本酒、葡萄酒、紹興酒、ビールなごは此種の酒である。氣酒は蒸溜した酒で燒酒、ウヰスキー、ブランデーの類である。

〔大姑娘〕大姑娘、此處では西門大姐を指す。日上日下の區別が嚴格であるから、その身分に依つて對手の名稱が變つて來る。例令ば月娘が大姐こ呼ばれたり大娘こ呼ばれたりする。

〔骨牌〕骨牌は一枚の札に骰の目の二面を刻したもので、總數三十二枚である。

〔抹牌〕抹牌は骨牌を取るこご、此處の骨牌の取り方は好くわからないが、天は「六六」「六六」地は「一一」「一一」和は「一三」「一三」である。又四の札は赤ポチであるから紅牌こいふ。么は一である。

〔矮忘八〕 意はチビの助平野郎である。忘八は仁義禮智信忠孝悌を忘れたもの、或は王八に作る。これは五代の王建が若い時非常な無頼漢で牛驢を盗み私鹽を販賣したので、世人は彼を恐れ憎んだ。八は第八番目生れだから王八といふ。後世これが罵言になつた。前の忘八とは別物であるが後世これが混合した。

〔丫鬟〕 女中である。丫頭と同じ。莫愁湖に莫愁女の像がある其結髮の形が丫環である。結髮の名が轉じて女中の普通名詞になつた。

〔杌〕 脚の低いのを杌といふ。

一九

八月初旬、夏提刑の誕辰に當る日、西門慶は祝賀のため巳の刻頃出て行つた。呉月娘は新築の花園を翫賞すべく酒肴を備へ、家内の女丈けで小宴を開いた。何しろ半年がゝりで改築した花園は油漆の色美しい建物がそこゝにあらはれ面目を一新した。

先づ丈五の壁を二百尺ほど廻し、正面に一坐の門樓を建て四方に幾棟の臺榭を設けた。その間に築山あり泉水あり翠竹あり蒼松あり、高くして尖らざるを臺といひ、巍々として峻しからざるを榭といふ。又四季折々の眺めを考へ、燕遊堂は春宜しく桃李、妍を爭ひ、臨溪館は夏よろしく荷葉、彩を鬪はす、疊翠樓は秋よろしく黃菊、金を舒べ、藏春閣は冬よろしく白梅、玉を橫たふ、その外細徑には嬌花の一叢あり、雕門には芳樹の村立ちあり、柳あり海棠あり燈籠あり、月窓雪洞あり水閣亭あり、木香棚は茶蘼架と相連り、千葉桃は三春柳と對をなす。階前には芭蕉あり、

閣後には白銀杏あり、鳥は來啼き蝶は舞ひ游魚は藻内に驚くといふ有樣である。

衆女は此處に集り彼處に離れて或は芳徑の中に手を携へて遊ぶ者あり、或は香茵の上に坐して草を鬪はす者あり、或は見晴し好き軒下に骰子を振つて遊ぶ者あり、一人は檻に伏して花を眺め一人は紈扇を把つて笑つて蝶を驚かす。月娘は園内最高の臥雲亭に坐して棋を圍んでゐたが、やがて酒肴が運ばれたので上席に就き、李嬌兒は對席に孟玉樓、孫雪娥、潘金蓮、西門大姐は兩邊に坐した。月娘は一同を見渡し、

『あゝ忘れた。お聟さんを喚ぶのを』

と言つて小玉に命じて迎へにやつた。まもなく陳敬濟は天青色の羅帽、紫綾の深衣、裏白の黑靴といふ打扮ちで現はれ一同に挨拶して西門大姐の次ぎに坐し、箸を取つた。酒了つて月娘は李嬌兒、西門大姐を對手に再び棋を下したので、孟玉樓と孫雪娥は玩花樓に登つて四邊を觀賞した樓前には牡丹花壇あり、芍薬の圃あり、海棠軒あり、薔薇架あり、木香棚あり、寒に堪へる君子竹あり、雪を欺く大夫松あり。四時折々の花の眺め、次ぎ〳〵に展開するようになつてゐる。無

論その時は牡丹も芍薬もなかつたが、秋の草花が今を盛りと咲きほこつてゐた。金蓮は獨り山陰の池の前で、白紗團扇を手にして蝶を撲つてゐると、敬濟は忍び足で近寄り、

『五娘、貴方は蝶の撲ち方を知らない』

と團扇を引手繰つて煽ぎ廻し皆追ひ除けて仕舞つた。金蓮はわざと嗔つて、

『本統に酷い人だよ。私しは今度こそお父さんに言ひつけてやる』

といふのを平氣で聞き流した敬濟はヒヽと笑つて金蓮を抱きすくめ熱い口接けをした。此有様を玩花樓から望見した玉樓は大聲上げ、

『五娘、此處へ被入つしやい。一寸お話があるから』

と叫んだ。金蓮は急に敬濟を押し除け玩花樓の方へ行つた。

一方西門慶は夏提刑の酒宴の歸途、瓦子巷を通り過ぎた。こゝは所謂ゴロツキ町で宋時の搗子明時の光棍の巣窟である。中にも草蛇裏魯華、過街鼠張勝の兩人は常に西門慶から附屆けを受けてゐたので、彼の顔を見るとニコ〱して馳せ寄つた。

『旦那、けふはどちらのお歸りがけで』
『けふは夏提刑の誕生日で城外の別莊に招待を受け、今歸るところだ。時にお前達に一寸賴みたいことがあるが聞いて呉れるか』
『御冗談被仰つちやいけません。手前どもは始終旦那の御贔負を受けてゐる者で、假令ひ火の中水の底も厭はない位の氣慨は持つてをります』
『そんならあした、俺れの内に來て呉れ』
『あしたと言はずに今此處でお話し下さい。一體それはどういふことです』
そこで西門慶は過日李瓶兒が蔣竹山を聟取りした一件を話し、是非俺れのために辱を雪いで呉れと乘馬のまゝ懷中から四五兩の碎銀を取出し二人に與へ、
『いづれ仕事が片附いたら充分お禮する積りだ』
魯華は受けず、
『旦那、これはまた滅相な事で御座います。いつも面倒を見て戴く私しどもは、假令ひ東洋大海

の蒼龍頭上の角を採れと言はれても、又西岳華山の猛虎の牙を抜けと言はれても其場に臨んで尻ごみしては男が立たない。況して鎖々たる一小事でこんなに澤山頂戴するいはれがない。旦那これはチト受け取れませんな』

西門慶はわざと怒つたような顔して、

『それではお前に頼まない』

と玳安に命じて銀を取り戻し匆々馬をやらうとする。張勝は慌てゝ轡を抑へ、

『魯華、手前は旦那の心持ちを知らねのだ』

と一方西門慶に對ひ、

『まあ〳〵暫くお待ちなすつて下さい』

と銀を受取り頭を地にすりつけ、

『旦那はお宅でじつとして待つて被在しやい。此二三日中にスッカリ片附けて、一つ面白い笑話を御覧に入れます。時に一つ御無心が御座いますが、叶へて戴けませんか』

『ウム何なりとも申せ、俺れの力で出來る事なら盡力してつかはす』
『提刑所の下人に住み込みたいのですが、どうぞ旦那樣の御推擧を願ひます』
『ウムそれはいと易いこと、あす早速夏提刑に話してみよう』
と言つて別れた。歸つて西門慶は金蓮に對ひ、
『俺れはあの藥屋を開いた蔣太醫の面にあした菓子店を開いてやるよ。あの男は如何にも恭謙でまともに人の顏さへ見たことはないが、實は婦人の足許ばかり見てゐる男だ』
とけふの事を語つて二人は笑つた。
偖て李瓶兒は蔣太醫を招贅して二個月餘を經過したが、一旦西門慶の狂風驟雨を受けた彼女は何となく物足りなさを感じ、だん〲嫌氣がさして每日店に來て本錢の勘定をなし遂にはその寐室に入ることさへ拒んだ。竹山も腹を立て帳場の中に立て籠つてゐると或日、
二人の男が店頭に現はれヂロ〱あたりを見廻した。
『おめへの處に狗黃（キユーウオン）といふものはあるかね』

と一人の男は言つた。竹山は笑つて、
『牛黄(ニユーワン)といふ藥はあるが、狗黄なんてものは未だ聞いたことはないね』
『狗黄がなければ冰炭(ピンタン)を貰ひたい』
『冰炭はないが冰片(ピンペン)はある。これは北海波斯國池前に產出する貴重品だ』
一人の男はもう一人の男を見かへり、
『てめへ餘計な事を聞くな。こちとらの欲しいものは新店にあるわけはねえ。それはそうと俺れは一つおめへに聞きたいことがある』
と蔣竹山の方に向きなほつて、
『蔣三哥、てめへも好い加減にとぼけて置け、三年前に死んだ手前の嬶が此魯大哥から三十兩の借銀をして元利共に計算すると今では大したものになつてゐる。俺れはけふそれを取りに來た。てめえも此處に婿入したばかりで、こんな話をするのも氣の毒だと思つて控へてゐたが、もう勘忍は出來ねえ。サア耳を揃へてけえして貰ひてえ』

竹山は目を睜り、

『私しは少しも覺はないが、一體それはどういふわけの金だい』

『默れ、借金のねい奴に誰れが要求するかい、昔から蒼蠅は隙間のねい卵を鑽さねいといふぢやねいか』

『一體お前さんは何といふ人だい。名前も顏も知らぬ人から金を借りるわけもなし、又返へして呉れ、と言はれる因緣もない』

『蔣二哥、それは少し量見違ひだせ。昔から官吏になれば貧乏せず、借金すれば富まねいといふぢやねいか。てめいも以前の事をよく考へて見ろ、あの鈴を振つて膏藥を賣つてゐた時、魯大哥の扶持があればこそけふの位置を占め得たのぢやねいか、手前は知らねいといふのなら俺れは言つて聞かせてやらう。此人は姓は魯、すなはち魯華と言はれる哥さんた。おめいは此前三十兩借りて嬶の葬式を出したが元利とも今では四十八兩だ。サアすぐ返へして貰ひてい』

竹山は驚いた。

『私しは決して开んな金を借りた覺はないが、若し借りた物なら証書や保証人がある筈だ』
『ウムあるとも、保証人は張勝さんこいふ此俺れだ。証文はこれ此通り』
と袖の中から一通の文書を取出した。竹山はムッとして、
『キサマは根も葉もないことを言つて俺れを脅喝するのだな。ゴロツキ、狂犬』
と怒鳴つて顏は俄に蠟のように黃ばんだ。今まで側に默つて聞いてゐた魯華は此時忽ち目を光らせ、デスクを隔てゝ一拳を飛ばせ、竹山の鼻柱を歪むほご打つた。そうして棚の上に載せてある藥材を手早く引湲つて往來に投げ出した。竹山は、
『泥棒』
と叫んで天福兒を喚び、加勢させようこしたが此時早く魯華は天福兒を一蹴したので敢て近寄らない。張勝は竹山を帳場の中から引き出し、わざこ魯華を遮つた。
『魯大哥、四五日待つておやんなさいよ。いづれ金を集めてから受取ることにしようぢやありませんか、ねエ蔣二哥、そうでしよう』

と竹山の顔を覗き込んだ。竹山は益々腹を立て、
『借りた金ならいつ拂ふと言つても可いが、借りないものは拂へない』
と答へた。
『蔣二哥、貴方は橄欖の灰を吃べたのだ。初め澁いがあとで甘味が出て來る。貴方が今快く引受けてやりさへすれば、魯大哥は何も利子まで取るとは言やしませんよ。二三日中に是非片附けておやんなさい。开んな頑固な事を言つても世間の人は皆承知してゐるからね』
竹山は地駄ん駄踏んで憤り、
『あゝ癪に障る畜生だ。俺れはお上に訴へに出る。借りた覺えのないものを無暗に取られて堪るものか』
張勝は笑つて、
『貴方は朝酒を飲んだね。どうも頭が少し訝しいようだ』
と言つた時、魯華は手を伸して又一つ拳コッを飛ばした。不意打ち喰らつた竹山は仰ほのけに

打倒れ、足を八字に開いたまゝ溝の中に落ち込んだ。髪はバラ〳〵に散り亂れて巾幘は泥だらけになつた。竹山は大聲揚げて助けを呼んだ時、保甲は馳けつけ、三人珠數つなぎとなつて其筋に突き出された。

先程から部屋の中にゐた李瓶兒は外の方が餘りに騷がしいので何事かと出て見ると、此始末に暫く呆れてゐたが、軈て馮媽媽を喚んで、看板を皆取り卸させ店の戸を閉めさせた。往來に投げ出された藥材は、人に皆拾はれた跡だつた。

西門慶は此事を傳へ聞き早速夏提刑に內意を含めたので、提刑は翌日三人を引出し先づ地方官の調書を眺め、竹山に對ひ、

『蔣文蕙、その方は魯華より金を借りて返へさず、却て彼に暴行を加へるとはケシからん奴だ』

竹山は答へて、

『私しは此男を全く見識つてをりません。見識らぬ位だから金を借りるわけもありません。然るに彼は貸金があると稱し、亂暴にも私しを毆打した上、店內の藥材を奪つて往來に投げ出しまし

た』

そこで提刑は魯華に對ひ、

『その方は之れに對して言ひ分があるか』

魯華は答へて、

『彼は三年前、私しから銀兩を借りて妻の葬式を出しましたが、今に至つて返へしません。彼は人の家に聟入りして店を開き、今日相當に暮してをるので要求しましたが、却つて私しを詐欺脅喝と罵倒し、暴行を加へました。私しが藥材を奪つたなどとは眞赤な嘘で御座います。はい〳〵此處に証文が御座います。そうして此張勝が証人で御座います』

こ懷中から一通の文書を差し出した。提刑はこれを開いてみると『白銀三十兩、月利三分、返濟期限滿一個年、借用人本縣醫生蔣文惠、妻の葬式費用に充つるため魯華より借用す。保証人張勝』

と記してある。提刑は案を拍つて、

『斯の如き立派な証文と証人があるものを、知らぬ存ぜぬとは不都合なり』

と直に部下に命じて三十大板を竹山に啗らはせた。そうして役人に白牌を持たせ竹山を自宅に護送し、三十兩の銀子を即刻魯華に返却せよ。さらずば汝を衙門（ヤーメン）内に收監すると申渡した。竹山は兩腿を破ぶられ、痛さに堪へ兼ね哭く哭く家に歸つて李瓶兒に哀訴した。李瓶兒は腹を立て、

『馬鹿野郎、开んな借金があるのに、今までなぜ私しに隱してゐたの。お前さんに上げる金など一文もありません。檻獄でも何處でも勝手においでなさい』

と罵つた。これを聽いた魯華は忽ち竹山を衙門に連れ戻さうとした。竹山は彼等を撫め、内に入つて李瓶兒の前に跪き、

『どうぞ、奥さん。佛に供養すると思つて、三十兩の銀を出して下さい。私しは嚴しい拷問を受けて兩腿が腫れ上つてをります、もう一度衙門に引かれて行けば今度は屹度命がなくなる』

李瓶兒は澁々ながら銀を出したので、竹山は再び提刑院に赴いて之れを官吏に渡し、官吏は魯華に渡し、眼の前で證文を引裂き漸く事終つた。

魯華、張勝の兩人は首尾好く目的を達したので喜び勇み、スグ其足で西門家に至り主人に面會し、前記の次第を語り三十兩の銀を出した。西門慶はごうして之れを受取らふ。直に酒肴を調へて二人を饗應しその勞を謝した。彼等は鱈腹御馳走を食べて此處を出たが、歸途賭博場に行つて其金を悉く消費した。

偖て竹山は提刑院から歸つて來るこ、李瓶兒の不機嫌甚だしく、

『貴方はもう私しの家の人ではない。お蔭で私しは病氣しましたよ。今上げた三十兩が其藥代です。自分の荷物を持つてサッサと出て行つて下さい』

竹山は男泣きに泣いた。李瓶兒は本錢も品物も皆差し抑へたから、彼が持つて出たのは少しばかりの藥材と藥研と藥師こ藥箱だけであつた。門を出る時李瓶兒は馮媽媽に命じて一盆の水を竹山の頭の上に浴びせ掛け、

『おめでたう。好い男振りだ』

こ言つて笑つた。竹山が出た跡で李瓶兒はつく〴〵西門慶が戀しくなり、飯も食はず化粧もせ

ず、毎日門に倚つて往來を眺めた。或日玳安が馬に乘つて獅子街を通ると、李瓶兒の店は戸を卸してある。歸つて西門慶に此話をすると彼は笑つて、
『屹度チビの忘八が寐てゐるのだらう。今度は隨分嚴しい拷問を受けたからな。だが彼は醫術を心得てゐるのに、半月の間外に出ないとは不思議だ。いづれ又商賣を初めるのだらうが、其時はその時だ』
八月十五日は吳月娘の誕生日で、數多の客の來訪があつたが、西門慶は月娘とロもきかず、ふいと外へ出て李挂姐の家に行き、應伯爵、謝希大を喚んで雙陸を打つた、やがて桂姐挂卿の兩人は酒を勸め中庭に出て投壺の遊戲をした。酉の刻頃、玳安は馬に乘つて迎へに來た。西門慶は後方に玳安を招き、
『内では何事もなかつたかね』
と訊ねた。
『はい無事に濟みました。お客樣は皆お歸りになりましたが、只大妗子と姑奶々が殘つてゐて、

奥の部屋で大娘とお話して被在います。そうして獅子街の二娘は、大娘のお祝ひとして四盤の羹果と兩盤の壽桃麵と一疋の反物と一雙の手製の鞋を贈られましたが、大娘は使に來た馮媽媽に銀一匁贈り、けふは旦那が留守だから御招待することが出來ないと被仰いました』

西門慶はじつと玳安の顔を眺め、

『お前は何處で酒を飲んで來た。顔が大層赤いぢやないか』

『へい今しがた二娘のお宅で馮媽媽から無理に二杯の酒を薦められ、こんなに顔がホテリました

只今二娘は大層後悔して被在います。此間私しは旦那様にそう申上げたところ、更にお聽入れ下さいませんでしたが、あれは本當で御座いましたよ。そうして今は只旦那のお世話になりたいと泣いてそう被仰いました。以前と較べると大分面窶れがして被在いました。旦那、何とか返事をしてやつたら、ごうでしよう』

西門慶は中々腹の中の蟲が治まらない。

『すべた、淫婦、一旦、他人に嫁して置き乍ら又俺れに附きまごふ。宜しい、このまゝにしても

置けないから、お前は向ふへ行つてそう言へ。日を擇んで輿入れをしろと』
『はい／＼承知致しました。ではちよつくら行つて參りますから、平安と畫童を代りに此處へよこしましよう』
『よろしい、早く行け』
玳安はスグ李瓶兒の家に行つて此由を告げた。彼女は非常に喜んで、
『好哥哥、今度は全くお前のお蔭だよ』
と自ら台所へ行つて菜を作つて玳安をもてなした。玳安は充分御馳走になり、
『二娘、お宅は人手が少いから、あした、私しがお手傳ひに參りましよう。荷物は天福兒をつけておよこしなさい』
次の日人を雇つて五六台の荷物を運ばせた。そうして四五日運び續けた。西門慶は此事に就いて少しも月娘に語らず、受取つた荷物を玩花樓の中に堆積して置いた。
八月二十日一頂の大轎と一疋の緞子と四對の紅燈籠を調へ、玳安、平安、畫童、來興等四人の

小廝を出して李瓶兒を迎へた。獅子街では先づ馮媽媽を出して轎を受け入れ二人の腰元の仕度が出來るこ李瓶兒は轎に乘り、出しなに馮媽媽と天福兒に固く留守居を言ひつけた。西門慶はその日何處へも行かず、藤棚の下で帽巾をかぶり深衣を着て坐し只管彼女の輿入れを待つてゐた。轎が大門に入つた時、暫くの間誰れも迎へに出る者はなかつた。孟玉樓は見兼ねて上房に行き月娘に對つて、

『姐々(チー〱)、花嫁さんが門の内に來てをりますが、誰れも迎へる者がないので、出るに出られず困つてをります。旦那樣は藤棚の下で默つて被在います。姐々(チー〱)、家のあるじの貴方が何とかしてやらなければ納まりがつきません。あとで旦那は屹度氣を惡くしますよ』

月娘は内々癪に障つてゐるので迎へに出るのもいやだが、さりとて夫の手前もあるので、やゝ暫く考へた末、漸く蓮歩を移し湘裙を穿いて李瓶兒を迎へた。そこで李瓶兒は寶瓶を抱きつゝ新部屋に入つた。迎春繡春の二人の腰元は部屋の中を整備し西門慶の來臨を待つてゐたが、彼は舊恨があるので中々出て來ない。

次の日奥の月娘の部屋で李瓶兒と顏を合はせ、彼の女を六番目の妾とし三日の間大宴會を開き客を喚んだ。蓋し西門慶は第一日を金蓮の部屋で過ごしたが、その時金蓮は彼に訊ねた。

『けふは花嫁さんが着いた日ぢやありませんか、なぜ向ふの部屋に行つてやらないの』

西門慶は答へて、

『お前は知るまいが、あの淫婦の眼の中に少しは火があるか、どうかと言ふことを試めしてみる積りだ。二三日過ぎて行つても遲くはなからう』

三日過ぎて客は皆散じたが西門慶は中々李瓶兒の部屋に入らない。わざと奥へ行つて孟玉樓の部屋に寐た。

李瓶兒は三日の間待ちぼけを食ひ、大辱を受けたので今はこれまでなり、と覺悟を極め、二人の腰元を早く寐かせ、床に上つて脚帶を梁に掛け自ら縊れた。怪しい物音に腰元は眼を覺まし燈を剔つて見ると驚くべし。李瓶兒は床上に首を吊つてゐる。そこで隣へ行つて春梅を喚び起し

『大變ですよ。內の奥さんが自殺しました』

と告げた。金蓮は喫驚して起き上り玩花樓に來てみると李瓶兒は唐紅の花嫁姿そのまゝで床上にぶら下つてゐる。急ぎ脚帶を切り放し、兎や角う介抱して漸くの事で清涎が流れ出し甦へらせた。そこで春梅を奥へ遣はし西門慶を喚びにやつた。少し前に西門慶は玉樓の部屋に入つて酒を飮んでゐたが彼女はいつもの調子で、

『貴方、人を娶つて三日もそこへゆかないのは餘りですよ。丸で私どもが細工をしてゐるように當りますから、どうぞ今晩は向へ行つて下さい』

『ウム俺れは百も承知だが、三日過ぎてから向ふへゆくつもりだ。それといふのも、あの淫婦に少しお碗の中の物を食はせ、鍋の中の物を見せてやるのだ。彼奴の亭主が死んでから出來る丈けの世話をしてやつた積りだが、俺れに一言半句も告げないで蔣太醫を聟に取るなど、あんまり人を蹈みつけにした話だ。今になつて漸く夢覺め俺れの處へ來ても初まらない』

『そのお腹立ちは御尤もですが、あの人は屹度人に瞞まされたに違ひありません』

斯う言つてゐるところへ、忽ち儀門をけたたましく叩く者がある。玉樓は蘭香を出して聞かせ

ると春梅である。

『六娘が今、部屋の内で縊れました。早く旦那に來るように、そう被仰つて下さい』

といふ。玉樓は慌てゝ西門慶に對ひ、

『それ私しが言はないことぢやありませんか』

と急ぎ燈灯をともして前邊に馳せつける。金蓮は李瓶兒を抱きさゝへてゐる。月娘も李嬌兒も來た。

『五姐、生姜湯をおやんなさい。ありますか』

と注意する。

『ゐゝ只今少し飮ませました』

と言つた時、李瓶兒は一つ強く噴んで聽て哭き出した。月娘等はいろ〳〵彼女を言ひ慰め漸く正氣附いたのを見て各々部屋に引き下つた。

次の日正午頃李瓶兒は一碗の粥を啜つた。西門慶は李嬌兒に對つて、

『死ぬ眞似をして人を嚇かしやがる。ケシからぬ淫婦だ。俺れは今夜、あの部屋に行つて首吊りといふものはどんなものだか一つ見てやらうと思ふ。若し首を吊らなかつたらウンと鞭を喰れてやる。これも見せしめのためだ』

衆女は此話を聞いて手に汗を握つた。晩になつて西門慶は馬鞭子を懷中して彼女の部屋に入つた。玉樓、金蓮は春梅に命じて門を締めさせ、外から一人も入ることを許さぬ。そうして角門の外で竊に立聽きしてゐた。

西門慶が李瓶兒の部屋に入つた時、彼女は寐台の上に横たわつてゐたが、心中充分の不平があるので身を起さうともしない。西門慶は二人の腰元を先づ空部屋に逐ひ出し、椅子に腰掛け、彼を指さして罵つた。

『淫婦、お前は自分で惡い事をして置き乍ら後悔せず、わざ〳〵俺れの內へ縊れに來たのか。お前は矮忘八にくッついてゐれば可いのに、なぜ此處へ來た。俺れはお前を喚んだ覺えはなし、曾て陷穽に入れた覺えはないが、なぜ小便垂れに此處へ來た。俺れは首吊りといふ藝當は未だ知ら

ないが、一つ此處で見せて貰ふぢやないか』

と一本の繩を李瓶兒の面前に突き付けた。

李瓶兒は此時蔣竹山の言葉を思ひ出した。西門慶は打老婆の班頭で降婦女の領袖だといふが全くそれに違ひない。私しがけふ此處に入つたのは好んで火坑を擇んだやうなもので、何といふ不仕合せな事だらう、と思へばしんから悲しくなり、思はず大聲上げて哭き出した。此體を見た西門慶は大に怒つて李瓶兒を床から引き卸し、上下の衣裳を脫げと言つた。李瓶兒は承知せず益々聲を上げて泣き出したので、今はもう勘忍しかね、懷中から馬鞭子を出してピシリ〳〵と二つ三つ打つた。李瓶兒は恐れ戰き、言はれた通り丸裸になつて地に跪いた。

『俺れは此前、家中に出來事があるから、暫く待てと言つたぢやないか。然るに俺れの言葉を用ゐず、慌てゝ蔣太醫と結婚したのは、どういふわけか。別人ならばいざ知らず、何の怨みがあつてあの矮忘八を聟に取り、俺れの目の前で藥店を開いたか、あてつけるにも程がある』

と西門慶は怨み罵つた。

李瓶兒はこわ〴〵之れに答へて、

『今更後悔しても初まりませんが、私しはあの時貴方のおいでを朝晩待ち焦がれてをりました。恰度その時裏手の喬皇親家の花園に年經る狐が潛んでゐて、深夜三更、貴方の姿に化けて私しの精髓に附き纒ひました。私しは初め少しも氣が付かなかつたが、馮媽媽と二人の了頭が之れを見出し蔣太醫の來診を受けて漸く治りました。ところが結局彼奴に胡痲化されて、糊盆の中に這入つたような始末』

『お前は彼奴に澤山の金をやつて今になつて、俺れの處に來るとはどういふものか』

『いゝ私しは決して那んな事はありません。若しそういふ事があつたら、此身體が爛れても差支はありません』

『金がある時には可愛ゆい男を養つて、金が無くなつてから小便垂れに來られては、幾ら俺れでもやり切れないね。實を話せば蔣太醫を打つた二人の男は俺れが使つたのだ。お前を掛り合ひにしなかつたのは、俺れの情けだ』

『私しはチャンと知つてをりますよ。だがそれをしなかつたのは多少未練があるのですね。貴方があれ以上の事をすれば私しはとうに死んでをります』

西門慶は此一言を聞いて怒氣俄に消散した。

『一體、お前は、俺れと彼奴と比較して、ごつちが强いと思ふ』

『それは言ふまでもありません。お月樣ご鼈です。貴方が三十三天の上にあるなら、彼奴は九十九地の下にあります。花子虛在世の時を好く考へて御覽じろ』

西門慶は遂に鞭を投げ捨て、李瓶兒を扶け起こし衣服を着せた。

譯餘閑談

〔油漆〕油漆は塗料顏料の類である。ワニス、ペイントはそれである。ワニスは桐油製の南京ワニスである。ペイントは此時代用ゐたかごうだか疑問である。

〔板〕長さ一丈を板といふ。牆の長さを量る時丈け川ゆ。

〔臺榭〕台榭は庭園内に於ける風流な家屋である。本文に說明してあるから省畧す。

〔月窓雪洞〕壁を圓形に切り拔き出入口としたのが月窓である。同じく六角形のものが雪洞である。

〔串鈴兒〕鈴を振つて藥を賣り步く男。鈴は扁い環狀をなし第二指第三指を中に差し込み、天を指して振る。蔣太醫を侮辱して串鈴兒といふ。

〔橄欖〕橄欖の實を嚙むと初め澁いが最後に甘味が出て來る。原文には橄欖の灰としてある。灰は疑問だが、も少し深い意味があるかも知れない。

〔幌子〕幌子は原物そのまゝをかたどつて看板としたもの、髮屋の髮の毛、燈芯屋の燈草

〔天青色〕日本の紺色を天青色といふ。

〔衙門〕郡役所と裁判所と監獄を兼ねたような役所、初め營所であつたので兩邊に牙狀の旗を立て、これを牙旗といふ。即ち營門を牙門といふ。もと軍隊の營所であつたが、後ち民務を扱ふ

ようになつた。一說には木を刻して牙狀をなす。獸牙を象るなり。故に牙門こいふ。

〔藥師〕本來藥師は醫者であるが、此處では何か品物のように思はれる。

〔投壺〕三つの穴のある壺に紅色の箸を投げ込み、その形によつて種々の點數がある。日本の倒扇筬に類似す。

〔寳瓶〕今でも滿洲地方では結婚の際、花嫁さんが寳瓶を抱へて轎から下りる習慣がある。恐らく子を獲るこいふ意味があるらしい。

〔梁〕梁は箂台の梁であらうこ思ふ。

〔大紅衣〕唐紅こ譯したが原文は大紅である。これは猩猩緋のように極めて華美な紅い色である。昔の花嫁さんは必ずこれを着る。

〔脚帶〕脚帶は纒足に用ゆる繃帶である。縊死を企てる時、かういふ物を用ゆるのも此時代以後の風俗だ。

〔生姜湯〕支那人の氣つけ藥はこれである。

〔降婦女〕婦人を虐待する男。前の打老婆、坑婦女と同じ。

〔裁判〕實に呆れたのは此頃の裁判である。借川證書の眞僞も確かめない中に、直に三十板を喰らはせ、金を返へせ、然らずば收監するど命じるなど滅茶苦茶である。

〔冰片〕藥材龍腦である。熱帶産の楠樹より製出したものである。又樟腦の不準物を去りてこれを製す。此時代には外國輸入品であつたので其結晶物を見て北海波斯國池前に産する貴重品だなど丶言つてゐる。第一、國の方角も違ふし濱の眞砂のやうに思つてゐたところは中々面白い。

〔冰炭〕こんな藥はあるわけはない。冰炭相容れずといふ言葉から思ひ出して作者が一寸悪戯をしてみたのである。喧嘩を振つ掛けるためわざとこんな事を言つたのである。

〔牛黃〕牛黃は藥材である。病牛の膽より採つたものである。犀牛より生ずるものを上品とす。形ち鶴卵の蛋黃の如し。水に浸せば硬し。陝西甘肅産を西黃と稱し、廣南産を廣黃といふ。

〔狗黃〕これも無いものである。前と同じく喧嘩の種に無い物買ひをしたのである。

〔二娘〕李瓶兒は初め二娘と言はる。花二爹に對する稱也。西門慶に嫁て後は六娘といはる

二〇

その夜金蓮は玉樓と共に立聽きしてゐたが、戸の隙間から幽かに燈光が洩れるのみで内の様子が更にわからない。金蓮は身悶えして、

『あゝ今夜ばかりはつく〴〵春梅が羨ましい』

と嘆息した。ところへ春梅は部屋の内から忍び足で出て來た。金蓮は待ち兼ねたやうに、

『どんな具合だね。内の模樣は』

と呀いた。

『旦那はあの人に對つて、着物を脫げ、と被仰いましたが、中々承知しないので、遂に二つ三つ鞭を呉れました』

『そうして打たれても脫がなかつたかね』

『いゝ慌てゝ着物を脱いで跪きました。そこで旦那は今なにか話をして被在います』

玉樓は急に金蓮の手を取つて、

『五姐、向ふへ行きましようよ。旦那に知れるこ悪いから』

こ西の角門の外へ出た。折しも八月二十日頃で月は今、山の端を離れ、二人の影を朧げに照らした。金蓮は言ふ。

『おいしい菓子は是非欲しいものですよ。あゝやつて嚇かしてはみるものゝ、それが皆狂言だからやりきれない。怒るのも金だし笑ふのも金だ。この前私しが淫婦の口の端にかゝつて酷い目に遭つたが、心を籠めてつかへても少しも解らないのだからね』

間もなく春梅は部屋を出で角門を通つて奥の方へ行かふこする。金蓮は慌てゝ呼び止め、

『こら小肉兒（ショーニョール）、お前は何處へ行く。一寸此處へ來てお話しなさい』

こ言つた。春梅は笑つて側へ近寄り、

『今ね。あの人は泣いて何か言ひわけしました。するこ旦那は急に御機嫌をなほして、着物を着

せ、私しを喚んで酒を持つて來いこ被仰いました』

金蓮は玉樓に對つて、

『それ御覽なさい。耻も外聞も知らない人だよ。大雷が鳴るかこ思ふこ二三粒の雨が降るだけだ此場に臨んでウンこ折檻すれば可いのに、怒るかこ思へば忽ち笑つてデレ〳〵こなり、酒を持つて來いもないもんだ。向ふに女中が無いぢや無し、わざ〳〵春梅を使はなくこも好さそうなものだ。あんまり人を馬鹿にしてゐるよ』

こ春梅に對ひ、

『お前、向ふへ行つてはいけないよ。私しが承知しない』

こいふ。春梅は笑つて、

『旦那樣がそう被仰るのですから、どうも仕方がありません』

こズン〳〵行つて仕舞つた。金蓮は悔しがり、

『本當に憎らしい畜生だ。彼奴は私しが用を言ひつけても、身動きもしないのに、旦那樣が一言

いふと、猫の御川を引受けた鼠のようにあわふた飛び出して行きやがる。二人の女中があるのに餘計なお世話をしないでも好さそうなものだが、丸で大根賣の跡に鹽を担いでゆくようなお勤め振りだ。小肉兒、畜生』

と思はず怒鳴つた。玉樓は調子を合せ、

『內の大丫頭蘭香も矢張りそういふ風がありますよ』

と言つてゐるところへ月娘附の玉簫が奥庭の方から出て來た。

『三娘、未だ此處に被在るの』

『あら喫驚したよ。此餓鬼は。（怪狗肉）お前が此處へ來たのは奥さんのお言ひつけかね』

『いゝ奥さんはモウとうにお息みなさいました。時に向ふの部屋の摸樣はどんな具合で御座いました』

金蓮は横合ひから、

『旦那樣はあの齊頭の故事をやつてゐるのさ』

と手を伸ばして身振りをした。玉簫は玉樓に訊ねた。
『あの方は本當に五つ撻たれたのですか』
『そうです。着物を脱ぐことを承知しなかつたから撻たれたのです』
『着物の上だから好いようなものゝ、若し着物を脱いで色白の肌を見せたら、旦那様はタヂ〳〵として仕舞ひまさあね』
『本當にお前はお茶ッぴいだ(怪小狗肉)人の事で餘計な心配をおしでないよ』
と言つてゐる時、春梅は酒壺を持ち小玉は方盒を捧げて李瓶兒の部屋の方へ行かうとする。金蓮は忽ち呼び止め、
『小肉兒(ショーニョール)、御苦勞さま、雲の中の鼠といふのはお前の事だ。餘計なお世話をしないで、早く私しの處へ來てお休みなさい。向ふには向ふにチヤンと附添の女中があるから』
春梅はヒヽと笑つて此處を立ち去り、小玉と一處にテーブルを整へた後ち、繡春、迎春を喚んで代らせ、自分の部屋に歸つて來た。少し前に金蓮、玉樓、玉簫の三人は井戸端會議を解散した

翌日李瓶兒は午飯頃起きて髪を梳いた。迎春は台所から飯を運んで來たので、ゆうべの殘りの金華酒を暖めさせ、西門慶こ一處に少し飲んでそれから飯を食ひ、顏を作つた。化粧が出來上つてから李瓶兒は一つの箱を開き、一百顆の西洋眞珠を出して西門慶に見せた。これは昔梁中書の家から持ち出して來たものである。又老公公傳來の金張り鴉靑石の帽頂、目方四匁八分の物を出した。

『これは耳環の墜子にしたいのですが、銀匠にやつてなほさせて下さい』

又金の髪止め目方九十匁のものを出して、

『奥さんは恁ういふものをお用ゐになりますか』

こ訊ねた。西門慶は答へて、

『銀の物は澤山あるが、恁んな立派な物は無いよ』

『では之れを打ちなほして金九鳳を作り、鳳の嘴に各一顆の珠を啣め、剩つたものは金鑲玉觀音滿地嬌分心を作つて大娘(ダーニヤン)に差し上げて下さい』

西門慶は頷いて之れを懐中にし、やがて出て行かうこすると、李瓶兒は急に呼び止め、

『あの向ふの家が無人ですからね。天福兒をこつちへよこして、貴方のほうから誰れか人をやつて監視して下さいませんか。老嫣丈けでは安心が出來ませんから』

西門慶は快く承知して出た。出掛けに東の角門口で忽ち金蓮に捉へられた。

『お前さん。何處へ行くの。まあ呆れた。今起きたのですね』

『ウム少し用があつて出掛ける處だ』

『をかしな人だよ。那んなに慌てゝ行かなければならないのですか。一寸話があるから來て下さい』

こ金蓮は西門慶を己が部屋に引きずり込み、椅子に坐して兩手を攫んだ。

『サア一體何處へ行くのか、包まず白狀なさい。鍋の中の物を吃べてから慌てゝ飛び出すなんて舉動不審に思はれますね』

『馬鹿言へ。一寸自分の用達に行くのだ』

と無理に椀ぎ放さふとする時、金蓮は彼の懐中をまさぐつた。
『おや大層重い物がありますね』
『これは俺れの金包だよ』
と言つたが金蓮は信ぜず、手を男の袖内に差し入れ、否應なしに其重い物を引き出した。
『おや、まあ何て立派なものだらう。あの人の髪止めでしよう。貴方は之れをどうする積り』
『餘り重いから打ちなほして二つにして呉れと頼まれた』
『それは大きに御苦勞さま。で、どんな物を作るのです』
『目方九十匁あるから二つに別け、一つは九鳳甸を作つて自分の挿料とし、一つは玉觀音、滿地嬌分心を作つて上房に贈るといふ彼女の考へさ』
『九鳳甸は三十五六匁あれば充分です。又滿地嬌分心は十六匁あれば事足ります。剩つたものは別に一つの九鳳甸を作つて私しが頂戴致します。そういふ事に是非貴方から話して下さい』
『滿地嬌は枝葉が多いから中々費るよ』

『枝葉があつても三十匁あれば充分です。で未だ二三十匁殘るぢやありませんか。それは私しの九鳳甸』

『お前は見たものなら何でも欲しがるが、これはいけない』

『兎に角一遍話すのですよ。いやなら否でも差支はありません』

西門慶は生返詞しながら門を出た。金蓮は彼を呼び止め、

『ゆうべはお樂しみ』

『馬鹿言へ。俺れが何をするものか』

『でも大雷が鳴るかと思ふと僅か二三滴の雨でしたね。首吊を見たいとか何とか、御大層な布れ込みだつたが、今慌てゝ銀匠のお使をするようぢや餘り當てになりませんね』

『此お茶ッぴー、口から出任かせを拔かすない』

と笑つて立去つた。

月娘は玉樓、嬌兒と共に部屋の內に坐してるたが、忽ち外で、

『來旺兒』
と呼ぶ者がある。見ると平安が簾をかゝげて内を覗いた。
『お前は何か彼奴に用があるのかね』
と月娘は訊ねた。
『へい旦那がお喚びになつてをります』
と平安は答へた。
『私しは一寸用があつて彼奴を使に出したよ』
『では向ふへ行つてそう申しましよう』
『馬鹿、餘計な事を一々取次ぎなさるな』
と叱られて平安は首を縮めて立去つた。
來旺兒は此日月娘の命を受けて香油白米の寄進をなすべく王姑子庵に行つたのである。
月娘はじつと平安の後姿を眺め、

『私しが口を利けば要らぬお世話をするように當るし、私しが默つてゐれば餘計な仕事が殖ゐるし、本當に困りますよ。あの人はこちらへ來て見れば家は要らないから賣つて仕舞へば可いのに今更鈴を搖つたり太鼓を打つたりして、舊宅の看守をする必要はないと思ふ。向ふには老嫣もゐるし小斷もゐる。何もわざ〳〵來旺や平安を出すにも及ばないぢやありませんか。來旺の家內は七病八痛でいつも弱つてゐるのに、彼の男が向ふへ行けば誰れが看病しましよう』

ここぼした。玉樓は慰め顔に、

『姐姐、貴方は一家のあるじです。些細な事で旦那と爭つてはいけません。小斷は旦那の命令で動くのだから仕方がありません。いづれ私しどもが取りなしますから、旦那と仲直りなさいましよ』

『孟三姐、それは少し見當脫れですよ。私しは曾て旦那と爭つたことはありません。處が旦那は自分で勝手に氣を惡くし、面と對つて何事も言はず、蔭へ廻つて私しを不賢良だの、淫婦だのと言つてをります。一體私しは何處が不賢良でしよう。澤山の品物を預つた上あの人の家を買ひ、

今日あの人の奥さんを娶れば誰れが目にもをかしく見ゆます。況して喪服が開けない中結婚することは道理に適ひません。だが道理に適つた言葉は昔から人に嫌はれるものと極つてゐますから私しは今更何とも言ひますまい。交際だと言つて內を外にし茶屋酒を飮む振りして、蔭へ廻つていろんな細工をするのだから仕方がありません』

とそう言つてゐる處へ、李瓶兒は燃ゆるような紅地金織の上衣に對襟の羅衫兒を重ね翠藍すり箔摸樣の羅裙を穿いて現はれた。迎春は銀瓶を捧げ、繡春は茶盒を持つて附添ひ上房に入り衆人に茶を薦めた。月娘は小玉に命じて坐席を設け一同席に就いた時、孫雪娥が出て來て又茶を薦めた。潘金蓮は口を開いて、

『李大姐はけふ。奥さんに挨拶に來たのだが、實を言へば旦那と奥さんは此頃口も利かないような間柄です。そこで私しは申上げます。此際酒席を設けて一同會飮し、お二人の間を圓滿に治めたらどうでしよう』

『承知致しました。私しは是非そう取計らひましよう』

と言つて李瓶兒は月娘の前に燭を挿し、四度敬禮した。月娘は笑つて答へ、
『この人は貴方を哄したのです』
と金蓮に對ひ、
『貴方は餘計な取りなしをするものではありませんよ。私しは固く心で誓つてをります。半年の間、一言も口を利かないものが、今更誰れが何と言つても治まるものではありません』
金蓮は此時話頭を轉じ、
『まあ、なんて美しいおぐしだこと』
と李瓶兒の髮を撫で、金玲瓏草蟲の髮飾と、金纍絲松竹梅歳寒三友の挿櫛を見て、
『李大姐、あなたの此草蟲は大姐姐の金觀音滿地嬌と較べると少し淋しいようですね』
と素破抜いた。李瓶兒はそうとは氣がつかず、
『ゐゝ私しは今それを拵へてをる處です』
と眞面目に受け答へた。そこへ小玉と玉簫は茶を運んで來て李瓶兒に薦め、急にホ、と笑ひ出

した。玉簫は先づ口を切り、
『六娘、あなたの老公公は初め皇城内の衙門に被在しつたのですね』
『ゑゝ初め惜薪司掌廠にをりました』
『してみると貴方は薪とお近接きがあるのですね』
といふ側から小玉は、
『昨年許多里の長老が頻りに貴方を尋ねてゐました』
と變な事を言ひ出した。李瓶兒は否な顏して、
『私しを尋ねて、どうするのです』
『水災の寄附金を求めるのだそうです』
といふ。此時玉簫は又妙な事を言ひ出した。
『あなたの御鄕裡の老媽媽は千佛を拜して、きのふ大願成就したそうですね』
といふ側から小玉は又口を出し、

『貴方はきのふお上みから四人の前驅を差し向けられて、關外の張番に行くことを賴まれましたね。本當に死んな事があつたので御座いますか』
李瓶兒はムッとして、
『そういふことは少しも存じません』
小玉はホヽと笑つて、
『でも貴方はイク〳〵と被仰つたぢやありませんか』
側にゐた玉樓と金蓮は流石に笑はずにはゐられなかつた。月娘はわざと怒つて二人の女中を退けた。李瓶兒は赤くなつたり白くなつたり立ち居も安からぬ有樣であつたが、軈て此處を辭し去つた。西門慶は間もなく歸つて來て李瓶兒の部屋に入り、
『二十五日に結婚の披露をしようと思ふが、花大哥を喚ばないわけにもゆくまいね』
『ゐゝあの人のおかみさんが三日間來ると言つてゐましたから喚んでおやんなさいよ。そうして内の方は老媽に留守居させ、天福兒を此處へ寄越し、誰れか一人代りにやつて下さいよ。來旺兒

はおかみさんが病氣だから、やつてはいけないと大姐姐が被仰いました』

『そうだつたか、俺れは少しも知らなかつた。では平安と天福兒を一日交代で向ふへやらう』

そうかうする中に二十五日が來た。西門慶は先づ客を花園の藤棚に招いて茶を薦め、それから大廳に請じ入れた。大廳には酒席を設け花を挿した。第一席は花大舅、吳大舅、第二席は吳二舅沈姨夫、第三席は應伯爵、謝希大、第四席は祝實念、孫天化、第五席は常峙節、吳典恩、第六席は雲理守、白賚光といふ順序で西門慶主席に就き賁第、傅銘、陳敬濟を左右に陪席させた。李桂姐、吳銀兒、董玉仙、韓金釧兒の四歌妓は此日酒間を斡旋し、李銘、吳惠の二俳優は彈唱した。

酒數行にして應伯爵は先づ口を開いた。

『けふはアニキの御祝儀で誠に心から嬉しく思ひます。そこで一つ大膽なお願を致します、といふのは外でも御座いません。今日此席上で是非新夫人にお目通りをしたいものですな。幸ひ席上には花大尊親を初めとしてお二人の老舅、沈姨夫も御臨席になつてゐる折柄、尤も時宜に適してゐる事と思ひます』

西門慶はこれに答へて、
『小妾は洵に醜いもので、お目に掛ける程の物では御座いません、ごうぞお免し下さい』
謝希大は側から、
『それはいけません、嫂上とする價値の無いものならば、私しごもは何で此席に臨みましょう。況して尊親花大哥が御臨席あるからは、先きの友達は後ちの親戚で今更差別がないと思ひます。ごうぞ是非お目通りを願ひます』
西門慶は只笑つてゐるばかりである。應伯爵は躍氣となり、
『アニキ、笑はなくとも可いよ。私しごもは斯う見へても拜見錢位は所持してゐるよ』
『こん畜生、冗談も好い加減にして置け』
と西門慶は中々取合はなかつたが、度々迫られるので仕方なく、遂に玳安を喚んで、奥へ行つてそう申せと言ひつけた。そこで玳安は奥へ行つたが間もなく出て來た。
『甚だ失禮ですが、けふは御免蒙りたい、と被仰いました』

『こいつ、好い加減な出鱈目を拔かすな。キサマは奥へ行かずにスグ出て來たぢやないか』

『いゝ全く六娘がそう被仰つたので御座います。嘘だと思つたら應二爹、向ふへ行つて聞いてみて御覧なさい』

『こん畜生、俺れが中々奥へ行くまいと思つて、亓んな事をいふが、俺れは花園の内も外も皆知つてゐるぞ。好いか。これからお前と一處に行つて大勢の奥さんを皆引張り出して來るから』

玳安はおひやらかし、

『はい〱宜しう御座いますとも。手前どもの高麗犬は中々猛烈で御座いますからね。ウツカリすると應二爹の下半分を咬み裂くかもしれません』

伯爵は急に席を立ち玳安を追つかけて輕く二つほご𨅝た。

『畜生、人を馬鹿にしやがつて。早く奥へ行つてそう申せ。若しおいでがなければ其代りキサマを二十許りぶッ叩くぞ』

と言つたので衆人は皆笑つた。玳安は下席の方へ逃げ出して、じつと主人の顏色を見た。西門

慶に耳打ちした。そこで西門慶は自身立つて奥へ入つた。間もなく二三人の小廝が出て來て廳上に錦毡繡毯を敷き、四人の歌妓は奥の方で樂器を彈じた。絲竹の音やわらかに麝蘭の薫りときめくさなかに、婦人は大紅五彩通袖の羅裙を上に重ね、金枝綠葉の百花裙を下に穿き、腰に碧玉の女帶を纏ひ、腕に金の袖止めを着け、胸に纓落繽紛として垂れ、裙邊には珮環玎璫と鳴り、頭上には珠翠堆く盈ち、鬢邊には寶釵半ば卸し、粉面に翠花鈿を貼るは宜しく、湘裙に紅鴛鞋をほの見せるも嬉し。

婦人は衆女に圍繞され、風を受けた花のように嫋やかに一歩一歩進んで遂に大廳に入り、上席に向つて愼しく敬禮した。諸客は慌てゝ立上り答禮するまもあらせず、歌妓はこゝぞと出勤振りを見せ、

『一對は鸞の如く鳳に似たり。眞に世世の夫妻、永く永く圓かなるべし』

と「天の配合」といふ曲を唱つた。

その時月娘は玉樓、金蓮、嬌兒にとりまかれて大廳の後に立つてゐたが、金蓮は忽ち口を開き

『大姐姐、今の歌はあんまりですね。正妻といふ貴方を差し置いて一對魚水團圓、世世夫妻とは何事でしよう。身分不相應にも程がありますよ』

と焚きつける。月娘は少し氣持ちを惡くした。そうとは知らず應伯爵、謝希大その他の者は口を極めて李瓶兒の容色を稱贊した。

『實際多く獲難き美人だ。優しい中にも何處やら重みがある』

『姿と言ひ容ちといひ一あつて二なきものだ』

『アニキが恁んな美人を獲たのは、一生の大幸だ』

『恁ういふ美人を見た俺れ達はあした死んでも憾みはない』

そこで彼等は玳安を喚び寄せ、

『奥さんにそう申上げて呉れ。どうぞお部屋にお引取り下さい。嘸ぞお勞れなすつたでしよう。

おみ足を痛めるこいけない』

といつた。月娘等は蔭で此話を聽き、

『何て筋違ひの人達だらう。人を譽めるにも譽めようがある』

と憤慨した。やゝ暫くして李瓶兒は席を退いた。四人の歌妓は急に彈唱を歇め、彼女の跡を趁ふて部屋に入り、衣裳の着換へやら髮道具の取却しやらチヤホヤお世辭をつゝつて立働いた。歌妓等は豫ねて彼女の裕福な事を知つてゐるので、けふこそ勤め時と勢限り腕に振りを掛けた。

月娘は此有樣を見てスツカリ欝いて仕舞つた。生憎其時玳安平安の二人は、客から出た澤山の御祝儀(拜見錢)やかづけ物(反物衣類)を盒の上に盛り上げて運んで來た。月娘はまともにそれを見ようとはせず、

『馬鹿、お前達は本當に馬鹿だね。私しの部屋にそんなものを運んで來て、ごうするのです。サツサと前の部屋に持つてゆくが可いや』

『でも旦那がこちらへ運べと被仰いました』

月娘はしようことなしに玉簫に命じて寐台の上に投げ込ませた。恰度其時第二席の料理が出終つたので吳大舅は席を脫し、そつと奧へ來た。月娘は浮かぬ顏して兄と對面した。

『俺れはきのふ家內から話を聞いたが、お前は此頃壻殿と口も利かぬ仲だといふぢやないか』

月娘は默つてうつむいた。吳大舅は語を繼いで、

『そこで一度、お前に逢つて篤と話をしようと思つてゐたが、けふ圖らずも此席に喚ばれたのは幸ひ、一寸申し聞かせて置く。古から痴人は婦を畏れ、賢女は夫を畏るといふ。三從四德は婦人の常である。だから今後壻殿が何をしようともお前は決して止めてはいかん。男は男の考がある惡い事は惡い、好い事は好い。とあとで屹度悟る時が來る。その時こそお前の賢德が顯はれるのだ』

『兄さん、もう私しの賢德は顯はれ過ぎてをりますよ。貧乏官吏の娘がごうして金持の未亡人と競爭することが出來ましよう。內の人は屹度私しが死ねば可いと思つてゐるのです。いつから恁んな心變りがしたか私しには解りません』

とよゝとばかりに哭き沈んだ。呉大舅は益々落着いて、

『お前は开んな片意地な事を言つてはいかん。對ふは對ふだ。いつか解る時が來る。お前達二人仲好くして呉れなければ、私しは此處へ來ても甚だ氣持ちが悪い』

此時小玉は茶を運んで來たので呉大舅は一口啜つてゐると前邊から小廝が迎へに來た。そこで再び大廳に行つて席に就き、灯ともし頃漸く解散したので呉大舅も辭し去つた。その日四人の歌妓は李瓶兒から各一枚の金織ハンケチと銀五匁の祝儀が出たので皆喜んで歸つた。それから西門慶は夜な夜な李瓶兒の部屋に入つたので、金蓮は腹が立つて堪らず、陰に廻つて盛んに月娘を焚きつけ、そうして李瓶兒に對して表面極めて親密な態度を示した。李瓶兒は眞逆か开んな魂膽があらうとは知らず、心から姐々（チー〳〵）と稱して金蓮を敬つた。

西門慶は李瓶兒を娶つてから財産は增し商賣は益々繁昌した。李瓶兒の連れて來た天福兒は名を琴童と改めさせ、新に二人の小廝來安、棋童を買入れた。又一個月五兩の報酬を以て李嬌兒の兄弟に當る樂人李銘を聘し、金蓮附の春梅に琵琶、上房附の玉簫に箏、李瓶兒附の迎春に絃子、

玉樓附の蘭香に胡琴を習はせ前廳の西廂を稽古場とした。四人の女中は皆美裝して毎日遊藝の稽古をした。又新に二千兩の資本を卸して二間まぐちの質店を開き、鑰番及び出納係は陳敬濟、物品受入記帳係は賁第、藥店質店雙方の監督、銀質の鑑定、賣買總取締役は傅夥計といふ役割を定め藥材は金蓮部屋の二階に納め、質物は李瓶兒部屋の二階に堆積した。陳敬濟は朝から晩まで鑰を腰に着け、番頭と一處に金錢の出入を精細に調べ、洩れなく記帳した。西門慶は彼の精勤振りに心から感服した、或日の會食に西門慶はそう言つた。

『敬濟、お前も此處へ來てから商賣の方法を覺え、影日向無く好く働いて吳れるが、東京のお父さんが之れをお聞になつたら、定めしお喜びになるだらう。諺にもいふ通り、子あれば子に靠る子無き者は壻に靠るといふが、俺れは此質店の方をお前達夫婦に讓る積りだ』

敬濟は思はず頭を下げ、

『思はぬ災難に遭ひ、遠く親に離れてこちらの御厄介になつてをりますが、現在貴方のお引立を受け、有難い仕合せで御座います。何分若年で行き屆きませんが、便りにするのは貴方ばかり。今

後末永くお目を掛けて下さいまし。此大恩に對しては私しは死んでも忘れません』
西門慶は此言葉に益々感服し、それ以來家中大小の事務、手紙禮帖の讀み書き等一切の秘書役を彼に命じた。そうして客ある每に必ず彼を陪席させ茶飯を共にした。
十一月下旬、常峙節家に茶の會があつた。西門慶は午後から其處へ行つて會談し、同席の應伯爵、謝希大、祝實念と共に灯ともし頃辭し去つた。此日は朝から密雲閉ぢ、温度は著しく低下してゐたが、今三人が馬を並べて門を出た時、雪はチラ〳〵降つてゐた。應伯爵は先づ口を開き、
『今からお歸りになつても仕樣がありますまい。ごうです。これから一つ桂姐の處へ押し掛けようぢやありませんか。孟浩然が雪を蹈んで梅を尋ぬる風雅な趣きがありますぜ』
祝實念は調子を合せ、
『そうだ。恁ういふ時に行かなくては眞實が見へない。況してアニキは每月二十兩も出して圍つて置くのに、只あすこを開けて置くのは勿體ないわけだ』
と盛んに水を向けた。そこで遂に行くことに極めた。東街に入つて李家の前で馬を下りた時に

は日はとつぷりと暮れ、客間の燈はアカ〳〵と光り、女中は敷石の上を掃いてゐた。老婆と李桂卿は先づ出迎へて挨拶し、上席に四脚の椅子を並べて着坐を請ひ、西門慶に對つて、

『此間は娘が出まして、いろ〳〵御厄介になりました。又六娘からハンケチやら簪やら澤山の頂戴物をして大喜びで御座いました』

と禮を述べた。西門慶は鷹揚に頷いて、

『あの日は遲くなりやせぬかと心配したよ。俺れは宴席が濟むとスグ桂姐を歸へしたが、それでも可成り暇取れた』

と言つて茶を飲んでゐる中に酒席の仕度が出來た。だが桂姐は出て來なかつた。

『どうした彼奴は。けふは顏を見せないが、何處へか行つたか』

『はい、けふは五姉媽の誕日で轎を雇つて朝から出掛けました。あの兒は毎日貴方を待つてゐましたが、此頃些つともおいでがないので淋しがつて仕樣がありません』

と老婆は答へた。西門慶は少しも疑はず、

『そうか、彼奴がゐなくとも構やせん。酒を持つて來い』

といひつけた。老婆は極力もてなし、種々の珍味を桌上に滿載し、姉の李桂卿を席に出し、箏を彈かせた。四人は歌を聽き拳を打ち機嫌好く飮んだ。此日挂姐が五姨家の誕辰に臨んだとは眞赤な噓で實は杭州の呉服屋丁相公の伜、丁二官雙橋といふ男が父に代つて一千兩の紬絹を當地に持ち來り販賣する中、花柳界の味を覺に、銀十兩を持つて李家に入り、杭州絹の衣服二襲を作つて桂姐に贈りけふで二夜居續けしてゐたのである。桂姐は近頃西門慶が出て來ぬのを幸ひに慇うい ふ内職をしてゐたのである。そうとは知らず西門慶はやがて立つて奥に入り、衣服を着換へてゐると東の耳房に女の笑聲がする。不審に思つて窓外から覗くとここはいかに李桂姐は方巾を冠つた田舍大盡と膝突き合はせ酒飮んでゐる。これを見た西門慶は烈火の如く憤り、急に酒席に舞ひ戻つて、物をも言はずイキナリ卓子を押し倒した。皿小鉢はガラ〱と散亂して粉微塵に碎けた其物音に平安、玳安、畫童、琴童の四人の小廝は馳け付けて見ると主人は顏色を變へ、そこらを皆打ち壞はせと命じた。そこで門窓、寐台、戸帳等手當り次第に打ち碎いた。應伯爵、謝希大、

祝實念は頻りに西門慶を撫めたが、彼は兇神の如く荒れ狂つて、
『あの田舎者を此處へ出せ。腐され女郎こ一處に縛つて仕舞へ』
こ怒鳴つた。丁二官はこれを聞いて仰天し、急ぎ寐台の下に這ひ込み桂姐に救ひを求めた。桂姐は落着き拂つて、
『お母さんがゐるから大丈夫です。恁んな事は花柳界に常住あることで、怒つても騒いでも勝手にさせて置けば自然治つて仕舞ひます。只貴方が顔を出してはいけません』
こ言つて鳴をしづめてゐる。一方老婆は席へ驅けつけ、弗箱を逃がしては大變こ愛憎好く辯疏けした。西門慶は益々怒つて、
『序に此婆も毆つて仕舞へ』
こ小廝に命じた。應伯爵、謝希大、祝實念は必死となつて彼を引止めたので、西門慶も已む無く怒の胸を抑へ、
『恁んな處へ二度と再び來るものか。覺えてゐやがれ』

と捨臺詞を殘して大雪の中を馬に乘つて出た。

譯餘閒談

〔惡口〕主人が召使に對して實に穢い言葉を使ふ。本回では金蓮は春梅に對して小肉兒（ショーニョール）といふ。玉樓は玉簫に對して怪狗肉（カイキューニョ）といふ。應伯爵は玳安に對して小狗骨（ショーキューコ）、禿兒的鬼（トールテクイ）といふ。月娘は又蔭で夫を罵り賊強人（ツエヂヤンレン）なといふ。男子は偖て置き婦人の言葉が如何にも穢いので美人の感じを滅殺すること甚だしい。

〔齊頭〕齊頭は共白髮、共禿げである。

〔雲端裡老鼠〕雲の中に鼠があるわけはない。奇特なことをいふ。

〔金九鳳〕金九鳳、玉觀音、滿地嬌分心はいづれも婦人の頭飾である。

〔惜薪司〕明時宮庭內所用の薪炭を調べる役人である。宦官その任に當る。此處では月娘が女

中に旨を含めて李瓶兒を嘲弄させたので、薪、水災などに猥褻の意味が含まれてゐる。

〔千佛〕千佛を拜せば大願成就するこいふ。此處では李瓶兒が本望遂げて西門慶こ結婚したここをいふ。

〔拜見錢〕元末の悪習で、下役が上役に初めて面會する時、必ず金を贈る。これを拜見錢こいふ。此處では花嫁に贈る祝儀をいふ。

〔大舅〕舅は妻の兄である。大は長兄である。吳大舅は月娘の兄で吳家の長男である。

〔關外の張番〕原文昨日朝廷差四箇夜不收、請俑往口外和番こある。朝廷から四人の先驅を差し向けられ、長城外の見張番を勤めた云々は、西門慶が四人の小厮を出して李瓶兒を迎入れたが、偖て西門家に來てみるこ花嫁こしての扱ひを受けず、三日夫の來訪を得ず空部屋を守つたこいふ意

二一

西門慶はむか腹立てゝ家に歸つて來た。一更頃雪を蹈んでそつと奥へ行つてみると、儀門は半ば開き半ば掩はれ、中庭はしんとして人の影さへない。

『斯ういふ時に兎角何か仕出かすものだ』

と少し疑念を抱いて壁際に添うて窺つてゐると、やがて小玉が現はれ、廊下の外に桌子を置き香燭を供へた。間もなく月娘は衣裳を整へてそこに立ち出で、雪の降るのを物ともせず爐内に香を焚き天に向つて深く深く禮拜した。

『私しは吳氏といふ者です。西門家に嫁ぎましてから夫は内を外にして歩き、中年に至つて子がありません。又五人の妾が此處にをりますが皆子がありません。恐らく祖先の墓に關係があることゝ思つて、私しはその墓場の掃除を怠りなくやつてをりますが、何の驗しもありません。そこで毎

日星月の下に三星を祝ひ、早く夫が本心に立ちかへり、我等六人の内、何人か子を設け、後絶の憂なきようにお祈り致します』

と熱心おもてに現はれて祈禱した。西門慶は此一事にスッカリ月娘の本心を知つた。そこで今まで疎遠にした罪をつく〴〵後悔し、壁際に添ふてそつと後ろから近寄り月娘を抱き締めた。不意打ち喰らつた月娘は肚膽を抜かし、

『あれー』

と一聲、藻掻き叫んだ。

『俺れだよ。何も幵んなに喫驚りするには當らない』

と西門慶は固く彼女を抱き締め、

『俺れは全く惡かつた。どうぞ今までの事を水に流して吳れ』

といひつゝつく〴〵見ると、いつも着てゐる大紅縐紬對襟（テーチン）の襖子（ヤーツ）に軟黃の裙子（チユンツー）を穿き、頭上には絡鼠臥兎兒と金滿地嬌分心を挿してゐるのも可愛らしい。月娘は冷やかに、

『大雪が降つたので、貴方は戸惑ひして此處に被入しつたのでしよう。私しは不賢良の淫婦です貴方に對して今、何の感情も持つてをりません。私しはもうこふから諦めてをります。一生貴方にお目に掛らうこは思つてゐません』

『まあ、好いやね。开んなに怒らなくこも、いろ〳〵話があるから部屋に行かう』

こ西門慶はぐつこ手を引くこ口ほごでもなく月娘はおこなしく曳かれて來た。

部屋に入つた時、西門慶は再び、

『俺れは全く惡かつた』

こ言つて月娘を上坐に据ゐ、

『今までお前の言葉を用ゐず、御好意を無にしたここは重々お詫びをする。眼があつても見ゐないのは頑石同様の愚か者だ。ごうぞゆるして吳れ』

こ頭を下げた。月娘は益々冷やかに、

『私しは貴方の心の內の人ではありません。ですから何を申上げてもお氣に入るわけはありませ

ん。況して善事をお勸めした覺へは今まで更に御坐いません。どうぞ私しの氣儘に此部屋に置いて下さいまし、若し此處に置くのが否やでしたら、何處へでも勝手に逐ひやつて下さいまし。私しは奴隷のやうな眞似は出來ません』

西門慶は少し苛らたち、

『實はけふ少し不愉快の事があつて、それを是非お前に話さうと思つて大雪の中を歸つて來た』

『貴方の愉快や不愉快は私しには少しも關係がありません』

これは中々面倒だわいと見て取つた西門慶は遂に月娘の前に兩膝突き、宛ら鷄が殺されるような狀態となつて、

『どうぞ奥さん、殺すも活かすも御隨意になすつて下さい』

と思はず大聲を出した。月娘は少し面を軟らげ、

『其態は何んです。丸で涎れくりのやうな體裁ぢやありませんか。今、女中が此處へ這入つて來ますよ』

とイキナリ小玉を喚びつけた。西門慶はハツとして立上つた。ところへ小玉は這入つて來た。

そこで月娘は、

『雪が降つてゐるから早く香桌を内へお入れなさい』

といひつけた。小玉は答へて、

『はい〳〵もうスツカリ取込んで仕舞ひましたから御安心なさいまし』

とニヤリと笑つた。

『此餓鬼は人を馬鹿にしてゐるよ』

と月娘は思はず笑つた。小玉が立去つた跡で西門慶は又跪いた。月娘は漸く機嫌をなほし、

『世間の人と較べて見ればこそ漸くお解りになつたのでしよう。でなければ百年經つてもどうだか知れやしない』

と言つた。西門慶はホツとして立上り、初めて月娘と肩を並べて坐した。その時玉簫が茶を捧げて這入つて來たので、それを飲み乍ら桂姐の一件を話し、

『今後決して俺れは花柳界に足蹈みしないよ』

と誓つた。月娘は眞面目になり、

『それ御覽なさい。あゝいふ處の者は全く薄情ですよ。いくら金を出してもスグ外に男を拵へます。金で身體を縛ることは出來ません』

『本當にそうだ』

と此時ばかりは西門慶、しんから月娘の說を入れた。そこで漸く仲直りが出來、西門慶は着物を脫いで床の上にあがつた。月娘は微笑を含んで、

『貴方は何處へ行つても此調子でしよう。外の事はどうでも好くつて只此事ばかり』

と言つたか、自分も聽て同じ床にすべり上つた。

それは偖て措き、孟玉樓は翌朝早く起きて潘金蓮を音訪れた。先づ門口に立つて、

『六丫頭（ロヤートウ）、起きたかね』

と春梅に訊くと、

『ゑゝ今起きて髮を梳いてをるところです。サアどうぞ、こちらへ被入しやいまし』

と春梅は愛憎好く答へた。

玉樓は内に入り、折柄鏡臺に對つて髮を梳いてゐた金蓮の側に坐し、

『一寸珍らしい事件があつて、貴方に是非知らせようと思つて來ましたが、貴方は知つてゐますか』

金蓮は笑つて、

『蛤のように内に閉ぢ籠つてゐる私しは、何事も知るわけはありません。一體それはどんな事です。大分面白さうですね』

玉樓は身を前に乘り出して、

『きのふ旦那は何處へ行つて休んだと思し召す』

『知りません』

『二更頃、上房に行つて吳家と仲直りしたのですよ』

『私しごもが百年二百年勸めても中々承知する人ぢやないのに、自分の氣に向いた時が來れば自然そうなるのでしようね。それごも誰れか外に勸めた人があるのですか』

玉樓は答へて、

『私しもね、つい今の先き聞いたばかりですよ。けさ内の蘭香を臺所へやるご小厮は怎んな事を喋舌つてゐました。きのふ旦那は李家に行つて酒を飲んでゐる中、桂姐のふしだらを見出し、いやもう怒るまいことか。戸障子を蹴破り大雪の中を歸つて來てズツご儀門に入らうごすると、其時上房は降る雪も厭はず、庭へ出て燒香してゐました。これを見た旦那はそつご後ろから近寄り二言三言辭を交はした後ち、馬鹿々々しい、上房の前に兩膝突き、お母さんだの、姉さんだの、色んな事を言つて詫び入れたそうです。そこで二人は朝日を受けた淡雪のように解け合つて、ゆうべは彼處で寐たそうです』

『へーい、まあ』

ご金蓮はさげすむように笑つた。

『まあ馬鹿々々しい。雪の中で祈禱するのが孖んなに好い事でしようかね。あまり頑固な事を言つて誰れも相手にする者がないから、一寸狂言をして見せたのですね』

『狂言と言へば狂言でしようね。だが上房は此間から毎夜祈禱をしてゐました。實は早くから雙方で仲直りしたかつたのでしようが、人の蔭口を恐れて近寄らなかつたばかりさ。兎に角お芽出度い事だから此機を逸せず、我れ〳〵一同でお祝ひしてやらうぢやありませんか。貴方は早く髮を結つて李瓶兒を勸誘して下さい。あの人は金持だから銀一兩出すのが當前です。私しどもは貧乏人だから五匁づゝ出して、幸ひ雪も降つてゐる事だし雪見酒を兼帶に、旦那さんと奥さんを招待しましよう』

金蓮は少し不平らしい顏で、

『旦那は用があるかもしれませんね、いつものよう早く出て行つて仕舞つたら何んにもならない』

『此大雪に誰れが何處へ行くものですか。私しは來掛けに一寸上房の前を覗いてみたところ、今漸く門を開けたばかりで、小玉が水取りにゆきました。二人は屹度未だ寢てゐますよ』

そこで金蓮は急いて髪を結ひ終り、玉樓と共に新花園に來た。折柄李瓶兒は床の中でもぢ〳〵してゐたが、迎春がけたゝましく這入つて來たので、ハッと目を覺ますまもあらせず、玉樓と金蓮はづか〳〵と部屋に入つた。

『六娘、一寸川があつて來ましたよ。そのまゝで可いの。恁ういふ時に足腰伸ばして寐なければ寐る時はありません』

と金蓮は急に手を伸ばして夜着の中を探つた。其時銀の香毬が馥郁と薫つた。

『六娘、あなたは玉を產みましたね』

とイキナリ夜着を引剝がした。色白の肌がむッちりと現はれた。李瓶兒は慌てゝ褌子を穿いた

玉樓は笑つて金蓮を制し、

『五娘、そんな惡さをしてはいけませんよ。李大姐、好いお話があるから早く起きて下さいな。あのね旦那と奧さんが。ゆうべ仲直りしましたよ。私しごもは銀五匁づゝ出してお祝して上げようと思ひますが、貴方は少し餘計出して下さい。これに就いて萬更關係がないとは言へませんか

ら。實はそういふもの〻、此大雪で寒さは寒むし、仲直りをダシに、皆で一杯雪見酒を引掛けようといふ惡だくみさ』

李瓶兒は笑つて、

『ほ〻宜しう御座いますとも、姉さん方のお考へに何の異存が御座いましよう。どうぞ御遠慮無く被仰つて下さい。いくらでも出しましよう』

『ではね、一兩出して下さいな。私しは奥へ行つて向ふの二人を勸誘しますから』

と金蓮は言つた。此時李瓶兒は韈を穿き衣服を襲ねてゐたが、迎春に箱を開けさせ、一塊の銀を出して彼等に渡した。金蓮はこれを秤に掛けると重さ十二匁五分あつた。玉樓は立ち上つて金蓮を見やり、

『貴方は六娘の髮を梳いておあげなさいな。私しはこれから奥へ行つて向ふの二人を說いて來ますから』

と言つて出て行つた。李瓶兒の化粧が漸く出來上つた頃、玉樓は歸つて來た。

『いやもう骨が折れましたよ。旦那は些つとも私しの部屋に來ないのに、幵んな割前を出すいはれはないといふのです。そこですツたもんだの揚句、漸うの事でこれを出しましたよ』

金蓮は手に取つてみると雪娥がふだん揷してゐる銀製の簪だ。目方を量ると三匁七分。

『李嬌兒はどうしました』

『あの人も金が無いと言つて出し澁りました。此處にあるのは皆預り物で一々勘定しなければならない。剩つた金があるわけはないといふのです。私しは少し腹を立て、そうですか。無いのは御同樣さまですよ。多分六月のお口樣が貴方の頭の上を通らなかつたのでしよう。出すのが否なら出さなくとも好う御座います。皆が贊成するのに貴方獨り反對するのだから、と言つて出て來ると、女中が追つ掛けて來て私しを引戻し、別に反對するわけぢやないが、全く今困つてゐるからね、とトウ〳〵これを出しました』

玉樓は一碗の銀を懷中から出した。金蓮はそれを秤に掛けて見ると四匁八分しかない。

『まあ何んて猾い餓鬼だらう。皆いくらかづゝ不足してゐるよ』

『そうでしよう。あの人達は始終秤を使つてゐるからね。そういふ事にかけては中々拔け目があ
りませんよ』
　甚んな事を喋舌りながら、すッかり集めてみると銀三兩一匁となつた。そこで繡春を出して玳
安を喚びつけた。玳安が來た時、金蓮は肝腎の用をそッちのけにして、
『きのふ旦那は大層立腹して歸つて來たそうだが、一體どういふわけなの。李家の取りなしでも
惡かつたのかい』
　と訊いた。玳安はありし次第を包まず語り、
『旦那はいづれ返報がへしをすると言つてゐました』
　金蓮は潮笑つて、
『向ふは多寡の知れた賣物だ、开んな事は初じめから解り切つてゐることさ。今更騷いでも追つ
付きやしない。だが旦那は本當に怒つてゐたのかい』
『なんで貴方に嘘を申上げましよう』―

『だが本來お前が奔走したからこそ旦那が李家に行くようになつたのだ。今旦那が如何に怒つても、お前は向ふの惡口は言へないよ。いづれ又捩りを戻しに奔走するのだらう』

『五娘、お揶揄ひ遊ばすつちやいけません。若しそんな事があつたら、お天道様は西から出て參ります。こういふ事なら、初めから何も言ふのぢや無かつたつけ』

玉樓は側から、

『そうです。お前さんは外に惡い事はないが只一つ其お喋舌が惡いのさ。もう何も言はなくて可い。此處に三兩一匁あるから此金を以て來興兒と一處に酒肴を買つて來て下さい。けふは私しごも一同で旦那と奥さんに雪見酒を奢るのだから、棒先きを切る事丈けは成る可く控へて下さい。そうすれば五娘はお前のお喋舌りの罪をゆるして上げるとさ』

玳安は目を丸くして笑ひ、

『はいはい承知致しました。忌々しいからウンと棒先きを切つてやる』

と耗らず口を叩いて立去つた。

一方西門慶は起床して顔を洗ひ髪を梳いてゐると、大雪の中を來興は雞、鵝鳥の類を提げて台所の方へ行く。間もなく玳安は一罎の金華酒を提げて來た。西門慶は不審に思つて侍女に糺すと玉簫は答へた。

『けふは奥さん方が一同で旦那樣と大奥さんに雪見酒を差上げると言つてゐました』

そこで玳安を喚んで、

『此酒は誰れが寄越した』

と訊いてみる。

『何の事だか存じませんが、三娘が銀を出して私しにおいひつけになりました』

『おゝそうだつたか。わざ〳〵買はなくとも好かつたのに、内に酒は澤山ある』

と玳安に鑰を渡し、

『前の廂房を開けて茉莉酒を二罎出して來い』

と命じた。

そこで後廳の明闇を開けて錦帳を張り屛風を圍ひ梅花暖簾を垂れ、爐内に獸炭をいこした。間もなくテーブルの仕度が出來たので、李嬌兒、孟玉樓、潘金蓮、李瓶兒の四人は上房に現はれ主人夫妻を請じ入れ、先づ李嬌兒は盞を把り、孟玉樓は酒壺を執り、潘金蓮は菜を捧げ、李瓶兒は陪跪して一杯の酒を西門慶に勸めた。西門慶は笑つて、

『なんだつてけふに限つて皆が恁んなに御馳走して呉れるのだらう』

潘金蓮は口早に、

『尋常一樣のことなら、私しどもは決して御馳走致しません。けふは羊角葱が南牆に靠れて益々辣くなつたからで御座います』

と言つて別に一杯の酒を注ぎ月娘に獻じた。月娘はこれを受けず、

『出し拔けに御馳走されては私しも一寸面喰らひます』

玉樓は笑つて答へ、

『いゝ別段意味があるわけでは御座いません。大雪で御退屈でしようと思つて一獻差上げたわけ

です。姐姐、ごうぞ席に就いて私しごもの禮拜を受けて下さい』
月娘は承知せず却つて鄭重な禮儀をしようとする。玉樓はいふ、
『貴方が坐つて下さらなければ、私しごもは膝突いたまゝ立上がることが出來ません』
しばらく相讓つて月娘は半禮を受けた。金蓮は冗談半分に、
『今日姐姐は私しごもの顏に對してゆるして下すつたのです。三娘再びこんな無禮な事をすると第一私しごもがゆるしませんぞ』
と云ひながら一方西門慶に對ひ、
『貴方は何を盆槍してるるの。早く杯を開けて奧さんにお廻しなさい』
と極めつけた。西門慶は苦笑ひして杯を月娘に渡した。月娘は聽て下席に下り玉簫は傍より酒を酌んで衆姉妹に返杯した。衆姉妹は同等の禮を以て受け、孫雪娥獨り拜跪してこれを受けた。そこで主人夫婦を上席として一同着席した。席には西門大姐も加はつた。金蓮はいふ、
『李大姐、貴方は奧さんに杯を上げなくてはいけませんよ。元を糺せば貴方の內證事から起つた

のです。貴方は發頭人です。今更知らん振りしてゐてはいけません』

とそう言はれて李瓶兒は面喰らひ、急に立つて下席に至り酒を捧げた。

『おい此奴はお前を哄したのだ』

と西門慶は押し止めたが、李瓶兒は其まゝ下席に立つて動かない。その時春梅、迎春、玉簫、蘭香の四人は琵琶、箏、弦子、月琴を合奏して「南石榴花」といふ歌を唱つた。歌の意は佳期重會といふわけである。西門慶は聽耳立て、

『誰れが之れを唱へと言つたね』

玉簫は答へて、

『五娘のおいひつけで御座います』

西門慶は苦笑して

『此奴、碌な事は仕出かさない』

と罵つた。金蓮は澄したもので、

『一體誰れが女中に歌なご教へたのです』
側では吳月娘知らん振りしてこれを聞き流し、
『けふは陳姐夫をなぜ招待しなかつたのです』
といひ乍ら、陳敬濟を喚ばせた。間もなく敬濟が來て西門大姐の次に坐した時は雪は益々降りしきつた。吳月娘は小玉に命じて茶釜を運ばせ太湖石上の雪を採つて自ら煮、江南鳳圖雀舌茶を衆人に供した。正に是れ、尼玉壺中に碧浪翻り、紫金杯内に淸香を噴くといふ有樣で一同喜んで茶を啜つてゐる時、玳安が來て、
『李銘が參りましたが如何致しましよう』
『構はない。此處へ通せ』
と西門慶は言つた。間もなく李銘は席に現はれ衆人に叩頭して後ち、遠慮して隅の方に立つてゐた。西門慶は聲を掛け、
『お前は今何處から來た』

『はい手前は何處と言つて別にゆく處も御座いませんが、只今北の酒醋門の劉家に參り、二三人の子供に唱の手ほどきをして參りました。こちらの姐さん方のお稽古も未だ少し殘つてをりますので、お淩らひ方々伺ひました』

西門慶は頷いてこれを聞き、折柄手にしてゐた一杯の木犀茶を李銘に渡し、

『お前これを飲んで吳れ。けふは一つお前の美音を聞かせて貰ふと思ふ』

『はい承知致しました』

と李銘は茶碗を頂いて退き、喉を潤ほしてから箏の調子を合はせ、席に進んで「冬景絳都春」といふ一曲を唱つた。唱ひ畢ると西門慶は銀法郎桃兒鍾を出して小玉に滿酌させ、これを李銘に與へた。彼は地下に拜跪して、立て續けに三杯飲んだ。西門慶は又卓上の菜四皿を取つて彼に與へた。李銘は平身低頭して受取り、下方の別席に坐してこれを食べ終り、絹ハンケチを出して口を拭ひ、そつと上席の方に進んで、格子に靠れ、庭の雪景色を眺める風情で立つてゐる。西門慶はそれとなく彼を近寄せ、小聲できのふの一件を話した。李銘はわざと喫驚したような顏して、

『そうでしたか、手前は一向存じませんでした。近頃あまりあの家に足蹈みしませんから』

と少し考へ、

『それは李桂姐の腹から出たことでないと思はれます。屹度あの三媽のさしがねですよ、旦那怒つてはいけません。私しは向ふへ行つて内々樣子を探つてみます』

と呷いた。その日は一更頃まで皆酒を飮み續けた。やがて李銘が辭し去らふとする時、西門慶は再び彼に酒を與へ、

『お前が樣子を探つて吳れるのは可いが、けふ此處へ來たことを言つてはならないぞ』

『承知致しました』

と李銘は再三頭を下げて立ち去つた。彼が出て行く時、門口まで小斷が送つて來た。その夜西門慶は上房に臥した。

翌日は雪晴れて心地よく、月娘は朝早く起きた。彼女が機嫌よく髮を梳き終つた頃、西門慶も床を離れて部屋の內で餅を食べてゐた。そこへ玳安が來て、

『應二爹と謝爹がおいでになりました』

と告げた。西門慶は食ひ掛けの餅を置いたまゝ出て行かふとする。月娘は急に面を曇らせた。

『又二人が來ましたね。何の用だか知れないが、貴方は餅を食べてからゆッくり會へばいゝぢやありませんか。あの人達は閑人だからいつまでも待ちますよ。丸でお上の御用でも聞いたように慌てゝ出掛けてゆく』

西門慶は頷いて、

『ウム、そうかも知れないが、折角訪ねて來たものだから早く逢つてやる方が可い。この餅は前廳に運ばせて呉れ、彼奴等と一處に食はふ』

『けふは孟三姐の誕生日ですからね、あの人達が勸めても成丈け遊びに行かぬようにして下さい』

『おゝ承知した』

と西門慶は前廳に來た。

偖て李家では西門慶の仕返へしを恐れ、次の日應伯爵、謝希大に酒燒鵝の類を贈つて、切にと

りなしを乞ふたので、二人は早朝から此處に來て西門慶を引き出し、和解をさせようこいふ魂膽

應伯爵は西門慶を見るこ元氣好く、

『アニキお早う。今起きたのですか。時におここひは癪に障つたね。餘り馬鹿にした仕打ちだから アニキが歸つたあこでウンこコキ卸してやりました。西門旦那はあゝいふ太氣の人だから一時は怒つてもお前達の事なごスグ忘れて仕舞ふかもしれないが、友達の俺れ達は此まゝではすまされない、と言つてやりました。すると今朝早く使をよこして謝哥と一處に是非來て與れといふのです。仕方がないから行つてみると、よく〳〵後悔したものと見え、親子は手をついて泣くやらわめくやら、如何ようにもお詫びをするから、是非旦那に逢はせて與れといふのです』

西門慶はふいと横を向いて唾を吐き、

『俺れはいやだ。誰れがゆくものか』

伯爵は慌てゝ言葉を續け、

『ところがね。だん〳〵話を聞いてみると、丁二官は桂卿の客であの日に限つて桂姐を喚んだの

は故郷から荷物が着いたので、船主の陳監生を招待するため、わざと馴染を避けたのです。あの男も可愛さうに銀十兩持つて來て、部屋に腰を卸したばかりの處を貴方に見付けられ大騷動が持上つたので喫驚りし、後ろの方に躱れて小さくなつてゐましたよ。そういふわけで桂姐と丁二官の間には少しも怪しい關係がないのです。だが罪は何處までも罪だ。是非旦那に一杯献じ重々お詫びをしたいといふのです。そこで私しも今度丈けは引受けてやるが、向後再び斯ういふことがあると、お前達を珠數繋ぎにし、部屋を皆ぶち壞して仕舞ふからそう思へ、と充分戒めて置きました』

西門慶は苦笑して、

『俺れは別に怒つてゐやしないよ。だが今度家内と約束したこともあるから、あの家には絕對に足蹈みが出來ない。君達は向ふへ行つてそう言つて異れ給へ。あの事に就いて決して心配するな

西門慶はけふ少し差支へがあつて殘念ながら御馳走になるわけにはゆかない』

二人は一齊に跪き、

『兄上、开んなことを言はないで、一寸でも可いから顔を出してやつて下さい。そうして戴かないと、口幅たく引受けた私しごもの顔が全く潰れて仕舞ひます』

『ごうも困るな。君達にそう言はれると無下に斷るわけにもゆかない』

といふ。二人は此處ぞと頻りに喋舌つてとう〳〵西門慶を納得させた。

月娘はまさか食ひかけの餠を出すわけにもゆかないと、別に台所に注文し燒き立てのホヤ〳〵を前廳に持たせてやる。入りちがひに玳安が來て、

『旦那が着物を持つて來いと被仰いました』

といふ。この時孟玉樓は側に來てゐた。月娘は玳安を見て、

『旦那は何處へ行くの』

『何處へ被入しやるか存じませんが、只着物を取つて來いと被仰いました』

『お前はなんでも隱し立てをするね。けふは三娘の誕生日だから、旦那の歸りが若し遲くなつたら私しはお前を打つよ』

『手前は別に悪い事をした覺えは御座いませんが、何かお氣に障つたことでも御座いますか』

『あるともあるとも大ありだ。お前はあの人達が來ると、食ひ掛けの飯を吐き出しても奔走するが第一それか好くないよ。一體あの人達を何だと思つてゐる。幽靈の手引きぢやないか』

偖て西門慶は應謝に引つ張り出されて澁々乍ら李家に來て見ると、客堂には既に一席の料理が陳設され、席上には他家の藝妓二人を加へ、桂姐と桂卿は常よりも一層化粧を凝らして出迎へた間もなく老婆は下席に現はれ、先づ一杯の酒を注いで拜跪して西門慶に献じた。應謝は兩側に坐して盛んに輕口を叩いた。

『桂姐、お前はあんまり薄情だぜ。きのふは涙を流して俺れ達に頼んだが、偖て旦那が此處へ來てみると俺れ達に用がないものと見え、一杯の酒さへ振舞はない。若しけふ旦那が此處に來なければ、お前は屹度目を泣き潰ぶして往來に立つて歌を唱ふのだが、その時は誰れも相手にする者はないぜ。俺れ達のお蔭でお前は瞽世の坊にもならずに濟んだ。有難く思へ』

桂姐は躍氣となり、

『へい〳〵歌でも何んでも唱ひますから、餘計なお喋舌りをして下さいますな』
『歌よりも經を讀んで直接和尚にぶつかる方が早道だぜ。その時は昔の誼しみで錢は只れないがキッスの一つ位は只れてやらう』
とイキナリ桂姐を引き寄せて無理にキスした。
『あら酒が飜れて仕舞ひましたよ。旦那の着物にハネかしてさ』
と桂姐は頓狂な聲を出して伯爵を押しのけた。
『へん、けふに限つて旦那、旦那もねいもんだ。一寸此處に來なさい。面白い話を聞かせてやる
或るところに蟹と蛙があつたとさ。二人は義兄弟の約束をし、溝を早く跳び越いた者を兄と尊めることに極めた。蛙はひよこ〳〵と溝を過ぎた。蟹も負けずに走つた、偶まそこへ水汲みに來た二人の女が蟹を捉らへて繩で括つた。女ごもは歸る時蟹を忘れて行つた。一方蛙は向ふ岸で待つてゐたが、いつまで經つても蟹が來ないので、歸つてみると此始末だ。お前はなぜ溝を渡らなかつた、と訊く。蟹は答へて、私しは溝を渡る途中、二人の女に縛られて此通り身動きもなりませ

んと語つた』

話が終ると桂姐と桂卿は急に立つて應伯爵を打つた。これを見た西門慶は笑はずにはゐられなかつた。

その日吳月娘は家中で酒宴の仕度をした。一つはあの日の返禮、又一つは玉樓の誕生賀ひである。吳大妗子、楊姑娘及び二人の尼が來て上房に伺候した。だが日暮れになつても西門慶が歸つて來ないので宴席を開くわけにはゆかなかつた。月娘はヤキモキした。金蓮は笑つて李瓶兒の袖を曳き、

『一寸門口に出て見て參りましよう』

月娘は甚だ不機嫌で、

『門口に出て、どうするの』

と詰つたが、金蓮は一向平氣で更に孟玉樓の袖を引き、

『三人で一處に行きましよう』

といふ。玉樓は答へて、
『私しは今尼さんの話を聞きたいのです。それが濟んでから行きましよう』
金蓮は已むなく立ちとまり、
『サア早く話をして下さい』
と尼達にせがんだ。王尼は炕上に坐つてゐたが、先づ一つの笑話を語つた。
『それは駄目です。もつと面白い話を聞かせて下さい』
と金蓮はいふ。そこで王尼は又一つの話をした。
或る家で老公公の誕生日に三人の娘が集つて長壽の祝ひをしました。一番年上の娘は先づ盃を舅父に献し、
『貴方は立派な官吏です』
といつた。舅父は髯をしごいてそのわけを聞くと、家中で貴方を恐れぬ者はありません、と答へた。次に二番目の娘は酒を薦めて、

『私しは舅父を虎のような足輕だと思つてをります。それは舅父が一度び口を開くと皆鳴りをしづめます』

と言つた。此時三番目の娘は立つて又酒を薦め、

『私しは貴方を官吏とも思はなければ足輕とも思ひません』

『では俺しを何と思ふ』

と舅父はにこやかに笑つた。

『貴方は外郎です。外郎でなければ六房に通じるわけにはゆきません』

といつた。

尼が斯う語り終ると一同大笑ひした。此時金蓮は立つて、

『此尼さんは中々隅には置けませんね。けふは皆があてられて仕舞つた』

と玉樓、瓶兒を促して部屋を出た。大門口に來た時、玉樓は金蓮に對ひ、

『此雪解けに何處へ行つたのでしようね』

『解りきつてゐますよ。李桂兒の處さ』
『あんなに誓つて置き乍ら、明くる日はケロリと忘れて仕舞ふのだから酷う御座いますね』
『それはあの人の性分ですよ。此間の李大姐の一件を見ても解る』
と金蓮は一寸李瓶兒をぬすみ見た。
『おとゝひは大喧嘩をして歸つて來た。それでつく〴〵後悔したかと思ふと、きのふは李銘の探報があり、けふは應謝のお使があり、それでスグ氣が折れて仕舞ふのですよ。馬鹿馬鹿しい』
そういつてゐるところへ西瓜子賣が來たので二人はそれを買つて嚙ぢつてると、間もなく西門慶の姿が街の一方に見ゑた。玉樓と瓶兒は先づ上房に馳けつけて月娘に此由を報らせる。獨り金蓮は壁の影に隱れて西門慶をやり過ごし、突然後ろからワッと肩を押して嚇かした。
『おゝ喫驚りした。お前は此處に何してゐたのだ』
『あんまりお歸りが遲いので奥さんが心配してゐましたよ。私しどもは門口に立つて待つてゐたのです』

西門慶は頷いて上房に入つた。月娘は酒席を整へ玉簫は酒壺を執り、先づ一杯の酒を西門慶に薦めて後ち、衆姉妹にそれ〴〵杯を渡した。春梅と迎春は下方に在つて彈唱した。一席終つて皿を片附け、更に玉樓の誕辰宴を開いた。今度は細工を凝らした寄せ物、包み物、果實の類を肴として出した。酒量の少い吳大妗子は先づ中坐したので、あとに殘つたのは家内の者ばかりであつた。そこで骰子を振つて酒を飲んだ、月娘の番になつて牌譜に照し、西廂の一句に合せて酒を飲むことを提議した。月娘は先づ六娘子を說き、

『醉ふる楊貴妃は八珠環を落し、糸遊は荼蘼架に抓住す』

と言つて六個の骰子を振つたが當らなかつた。西門慶は虞美人を說き、

『楚漢の爭鋒を見る。正馬軍を傷け、耳邊に金鼓を聽き天に連つて震ふ』

と言つて骰子を振ると果して正馬軍を振り當てたので一杯飲んだ。李嬌兒は水仙子を說き、

『二士桃源に入れば、驚き散じて花開き蝶枝に滿つ。只落紅滿地、胭脂冷やかなり』

と言つたが脫れた。金蓮は鮈老二を說いた。

『老ゐて花叢に入り三綱五常を壞る。彼は奸をなすに非ず、賊を捕らへんとするのみ』
果して三綱五常を振り當てたので一杯飮む。李瓶兒は端正好を說く。
『梯に乘つて月を望めば、等しく到る春分晝夜の停。その時節や隔牆險化して望夫山をなす』
と言つたが脫れた。孫雪娥は麻郞兒を說く。
『羣鴉の鳳を打つを見る。絆住す折足の雁。好く我をして二つながら下し、人難をなす』
次に愈々玉樓の番となつた。彼女は奴嬌醉を念じ、
『扶定す四紅沉。錦裙を拖き、遮り得たり多少春風。夜月は金帳に鎖す』
と言つたが果して四紅沉が出た。そこで月娘は酒令を終り、小玉のお酌で三杯の酒を玉樓に薦め、
『貴方はこの酒を皆飮まなくてはいけません。けふは花聟さんが貴方の部屋に泊ります』
金蓮は先棒になつて、
『サア姐姐の嚴命です。お立ちなさい。皆で送つて上げましよう』

玉樓は羞ぢて立たない。金蓮は益々冷やかし口調で、

『この兒はハニかんでゐるのですよ。お母さんがあした、迎へに行つて上げますから、心配しなくとも好う御座います』

と月娘の方に對ひ、

『內の子供は年はもゆかないから餘り急き立てない方が好う御座いますよ』

玉樓は笑つて金蓮を眺め、

『お前さんは少し燒け氣味ですね。私しはあした敵討をしてやるから』

『いゝ私しは媒人の役を執る積りです、幵んなに懼わがらなくとも好う御座んす』

そこで一同は西門慶と玉樓を其部屋の門まで送つて解散した。金蓮と李瓶兒は前方の部屋に歸るべく儀門の口まで來た時、李瓶兒は雪に滑つて倒れた。

『お前さんは丸で瞽者も同樣だ。お蔭で私しは片方の鞋を泥だらけにして仕舞つた』

月娘は此聲を聞きつけ、

『私しは度々言ひつけて置いたが、小廝は、なぜ雪拂ひをしないのだらう』

と小玉に燈籠を持たせて二人を送らせた。

西門慶は玉樓の部屋で此聲を聞きつけ、

『鞋を片方汚した位のことで、彼奴は何んだつてあんな饒山な騷ぎをするのだらう　おこゝひは

又「佳期重會」を女中に唱はせるし、要らぬお世話をする奴だ』

『佳期重會とはなんのことですか』

と玉樓は訊ねた。西門慶は答へて、

『つまり俺れが吳家と仲直りしたことを彼奴が當てこすつたのさ』

『へいそうでしたか。私しは些つとも知りませんでした　あの人は中々利巧者ですからね』

『女の利巧者は困るよ。方々に差し障りが出來て』

西門慶はこんな話をし乍ら玉樓の部屋に寐た

一方金蓮は醉つた振りして李瓶兒の肩に手を掛け、

『私しは足が重くて歩るけないから、部屋まで送つて下さい』

と却つて李瓶兒を引きずつて行つた。部屋の入口まで來た時、小玉は燈籠提げて歸つた。

金蓮は李瓶兒に茶を勸め、

『私しどもは一つ板子を蹈んでゐる姊妹だから互に仲好くしたら好さそうなものだと思はれます

私しは蔭に廻つてどの位貴方を庇つてゐるか知れません。人は知るまいが天は知つてをります』

李瓶兒は答へて、

『いろ〳〵御心配下すつて有難う御座います。いづれ御恩に報ゐることが御座いましよう』

『貴方がそう思つて下されば嬉しい』

間もなく瓶兒は自が部屋に歸つた。金蓮はひとり淋しく寐た。

譯餘閒談

〔掃墓〕墓場の掃除を怠ると惡鬼が崇りをなし子孫を絶つ虞れがあるといふ。昔は寒食、霜降節に此祭奠を行つたが、今は淸明節に行はる。但し寒食は淸明の二日前である。

〔三星〕詩に曰く三星在天、その說二あり、傳に曰く三星は參なり　天に在つて始めて東方に見るものを謂ふ。箋に曰く三星は心星なり　心は尊卑、夫婦、父子を象るなり　又二月の合宿となす者あり　故に嫁娶するものは此侯を佳しとす。

〔綹紬〕綹紬は絹織の紬である。

〔六丫頭〕嬲に玉樓は金蓮に對つて五丫頭と稱したことがある　此處では六丫頭といふ。六は金蓮が母の胎から六番目出たからで即ち第六女の意である。丫頭は本來女中であるが此處では打ち解けて斯くいふ。此說明は前にあり。兎に角同一の人間を時と場合で五娘と言つたり六姐と言

つたりする。甚だ煩はしい。

〔吳家〕 月娘を指す。

〔李家〕 李嬌兒が出た藝妓屋である。當時桂姐桂卿が働いてゐる。桂姐は西門慶が梳籠して月極めの契約をしてゐたのである。

〔香毬〕 香毬は金屬製の球の中に地球儀の輪のよりなものイレコになつてゐてその中心下に香爐が吊り下げてある。だから如何に廻轉しても火は外に滾れない。一種贅澤な火燵である。

〔六月日頭〕 ウンと熱い六月の太陽が頭の上を通つても解からない位だから、何も解るわけはないといふ意、罵言。

〔羊角葱〕 葱の一種、支那人は植物の名に羊角といふ字を好く冠する。形ちから來たのである此處では月娘をあてつけたのである。

〔法郎桃兒鍾〕 法郎桃兒は譯音のように思はれる。外國產の銀コップである

〔外郎〕 外郎は官名である。漢時代中郎の職を三つに別け三署を分掌せしめた。即ち議郎、中

郞、郞中である。其閑職にあるものを外郞といふ。支那の空位空官は漢時代からの弊害である。

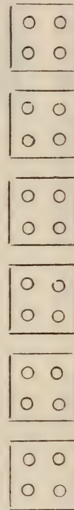
〔六房〕六房は六部の意であらう。六部は明淸の官制で、行政を吏、戶、禮、兵、刑、工の六部にわけた。此處では外郞は閑職である代りに六部のいづれにも通じてゐる。こいふ處から、此舅父がいづれの媳をも犯してゐることを諷したのである。つまり、六房は月娘以下五人の妾を指し、舅父は西門慶を指したのである。

〔西廂〕西廂は王實甫の西廂記歟。それとも外のものか。譯者は好く知らぬ。此句は可成り難解のものである。

〔酒令〕酒令は或る規則の下に酒を飮むので種々の方法がある。此處では骰子を用ゆるもので先づ西廂の句を任意に一句朗詠して骰子を振り、牌譜に照し合はせ、出目が句と一致すれば酒を飮む。脫れたら酒を飮まぬ。これには種々の等級がある。四紅が尤も上級で玉樓はこれを言ひ當て、立てつけ三杯飮まされた。

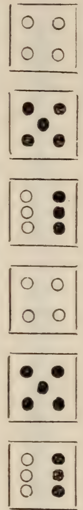
〔牌譜〕牌譜は骰子の目の出方に就いていろ〳〵の名稱を附したのである。例令ば、

▼四紅沉は



これは四紅沉(スーホンセン)といふ。

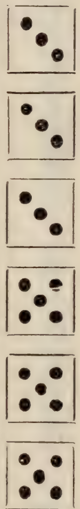
▼正馬軍は



これを馬軍(マーチユン)といふ。

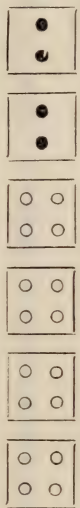
三綱五常以下は好く解からぬが察するに左のようなものだらうと思はれる。

▼三綱五常



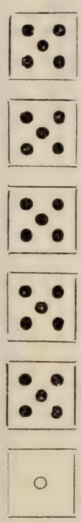
これを分相(フンセン)といふ。

▼二士入桃源



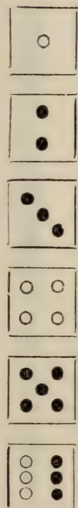
これを合巧(ホーチヨー)といふ。

▼羣鴉打鳳



これを五子(ウー)といふ。

▼搭梯望月



これを不同(プトン)といふ。

▼醉楊妃は全く見當が着かないが、么二三(ヨーニセン)或は二三靠(ニサンコ)、或は正快の内にあるように思はれる。詳細は拙著支那風俗中卷參照。

〔吳大妗〕　吳大妗子は吳月娘の實兄吳大舅の夫人である。本書上卷三三二頁に妗を月娘の母こ説明したのは誤り。

二二

次の日は孟玉樓の生誕日で月娘は後廳に在り。折柄祝ひに來た吳大妗子、楊姑娘、潘姥姥を上客とし、家内の者を加へて再び宴席を開いた。

此日西門慶は出席せず、上房に別席を設け玉簫を相手に飲食した。そこへ紅綢の對襟襖に紫絹裙(チュン)を穿いた女が現はれ菜を運んだ。西門慶はわざと玉簫に訊いてみた。

『あの女は屹度來旺の新妻だと思ふが、紅の上着に紫の裙(はかま)とは妙な對照だね。そう言つちや惡いが丸でお化けだ。あした奥さんにそう言つて別の裙を着せることにしたら好からう』

玉簫は笑つて

『那んなにをかしう御座いますかね。あの裙は私しが貸してやつたのですよ』

と答へた。

此紫裙の女は棺桶屋宋仁の娘で本名金蓮といひ、初め賣られて蔡通判家の腰元となつたが、何か不都合な事があつてお暇が出でコックの蔣聰といふ男に嫁せられた。蔣聰は西門家にも出入りしてゐたので、來旺兒は度々彼の家に行き、金蓮と懇意になり遂に怪しき關係を結んだ。或日蔣聰は金錢分配の事から仲間の者の怒を買ひ自宅に於て殺された。金蓮は驚いて此由を來旺に告げ西門慶に依賴して縣署に訴へ出で犯人の處分をした。折柄來旺は妻を失ひ獨り淋しく暮してゐたが、これ幸ひと月娘を欺き、貧家の寡婦で困つてゐる者があるから、それを後妻に迎へたいと述べた。そうとは知らぬ月娘は銀五兩と衣服二襲と青紅布四疋と簪環の類を送つて彼の女を迎へ、潘金蓮と抵觸するので其名を蕙蓮と改め來旺兒に妻合せた。蕙蓮は今年二十四歲の色白の美人で脊長けも程好く整ひ化粧術も心得、起ち居、振舞ひも淑やかに萬事調子の好い洵に男垂しの資格を備へた立派な者である。殊に彼女の一雙の脚は潘金蓮のそれよりも小さく美しかつた。彼女が此處に來た當座は下人の妻と一處になつて台所に出で、身裝りも構はず立働いたが、一月餘り過ごす中、玉樓金蓮の姿を見ならひ、漸く籠のような高髷を結び兩鬢を長く垂れ、上房に出て茶を

運ぶようになつた。西門慶はチラと彼女の顏を見て、これは物になると思つた。そこで蔡太師誕辰祝賀の錦繡蟒袍と家人用の四季の着物を調進すべく、十一月中旬來旺を杭州に遣はした。これは恐らく半年ほども暇が費るので、西門慶は來旺の出發後安心して蕙蓮と戯れた。或日西門慶は酒に醉つて外から歸つて來たが、儀門の內まで來ると蕙蓮にハタと行き逢つた。そこで無闇にかわゆくなり

『お前は俺れのいふことさへ聞けば、どんな着物でも拵へてやるよ』

とイキナリ彼女を抱きすくめてキスした。蕙蓮は慌てゝ押しのけ奥の方へ逃げ出した。

西門慶は上房に入つて玉簫に命じ、一疋の藍緞子を出させ

『此間のあの裙子は上の着物と釣合ひが悪く、あれを着るとお前は丸でお化けのようだ、とそう言つて、これを蕙蓮に渡して呉れ』

玉簫は旨を含んで出て行つた。

蕙蓮は突然主人から意外の頂戴物をしたので不思議に思つてひろげてみると四季團花、喜の字

抱き合はせ模樣の藍色緞子である。蕙蓮は少し到惑した顏で

『頂戴するのは嬉しう御座いますが、若し奧さんに見られたら、どうしましよう』

『旦那があした奧さんにそう被仰るそうですから、心配しなくとも好う御座います。若し外に入用な物があれば何んでも買つてやると被仰いました。幸ひけふは奧さんが奧の座敷に被在いますから、一度旦那にお目に掛つて色々お話なさつては如何で御座いましよう』

蕙蓮は微笑するのみで返辭をしなかつた。暫くして漸く口を開き

『旦那は私しの處へ被入しやるのですか。それとも又私しが向ふのお部屋に伺ふのですか』

『小廝の目に掛ると蒼蠅う御座いますから、あの　下の洞の中に忍んで來て下さい。あすこは誰れも來ないから都合が好う御座います』

『でも五娘こ六娘にスグ知れそうですね。何んだか羞しくつていやです』

『いゝけふは大丈夫ですよ。三娘こ五娘は六娘の部屋で象棋を差してゐますから、外へ出る氣づかひはありません』

そこで蕙蓮は漸く承知した。

偖て金蓮と玉樓は李瓶兒の部屋で象棋をさしてゐると、忽ち小鸞が馳け付けて玉摟に對ひ

『あの旦那樣は內に被在しやるのですよ』

と告げた。玉樓は急に立上つて奧へ行つた。金蓮も續いて此處を立出で已れの部屋に歸り、顏をつくりなほした上、奧へ行かうとして儀門に入つた時、小玉は上房の前に立つてゐた。

『旦那は內かね』

と金蓮は何げなく聞いてみた。小玉は手を搖つて花園に入つたことを知らせたので、金蓮は急に道を轉じ山下の角門の前に來た。すると玉簫はそこに立つてゐた。偖ては玉簫め、主人と忍び會つてるな、と金蓮は氣を廻しカッと急き込んで進んで來た。玉簫は慌てゝ

『五娘、此處へ這入つて來てはいけません、旦那が內で仕事をして被在います』

『お前は女中の癖に何を云ふのだね。失禮な。何處へ行かふと私しの勝手ぢやないか』

と急に花園に入つてあちこち搜した。藏春塢の山子洞の側に來た時、何か內でうごめく者を見

た。

一方蕙蓮は洞內で西門慶と話をしてゐたが、突然人の足音に喫驚りし、急ぎ裙子を穿いて表へ跳び出した。みると、金蓮は血相變へて立てゐた。

『お前はそこで何をしてゐたの』

蕙蓮はサッと顏を赧らめ、蚊の鳴くような聲で

『畫童を捜してをりました』

といひもあへず匆々立去つた。金蓮は時を移さず洞內に入つて見ると、西門慶は褲子の紐など結んでマゴ〳〵してゐる。

『まあ呆れた。晝日中此處でその態はなに事です。畫童を捜してゐるも無いもんだ。今迄再三こんな事があつたのでしよう。サア殘らず白狀すれば可し。包み隱しをすれば私しは奧さんにスッカリぶちまけますよ。そうして彼奴のしやつ面を腫れ上がるほど叩きのめして、豚の面のようにして仕舞ふから』

『靜かにしろ、騷ぐこみつこもないよ。今初めて逢つたばかりだ』
こ西門慶は流石に間が惡さうな顏をした。
『いゝえ〳〵一度や二度ではありません。二人は蔭へ廻つて始終こんな事をしてゐたに違ひありません』
『馬鹿いへ』
こ西門慶は苦笑して立ち去つた。金蓮は仕方なく口を噤んで奧へ來るこ女中等は集つて
『旦那はけふ珍しく內にゐたのですね。玉簫が藍緞子を持つて表へ行つたが、誰れにやつたのでしようね』
こ噂し合つた。
この事あつて以來蕙蓮の態度は一變した。彼女は毎日西門慶のために飯を爨きソップを作り、或は仕事に精出して鞋なご作り、暇な時には李瓶兒こ象棋を差し殊に金蓮に附和して如才なく立ち廻つた。そうして人無き折には西門慶こ忍び合つたこことだらう。それかあらぬか、彼女の身裝

りは日日に革り、懐中はいつもドッシリして門前の物賣りから胭脂、白粉、簪の類を手當り次第に買ひ求め、化粧に浮き身を窶し、束の間に見違へるような美人となつた。或日西門慶は月娘に對ひ

『蕙蓮は器用な質だから、飯爨には惜しいものだ。玉簫と一處に此部屋の係りにしてお茶の給仕や針仕事なごさせた方が好からう』

と言つた。月娘も異存がなかつた。そこで蕙蓮は忽ち上房附きのお針さんに出世した。

十二月八日大街坊の尙推官家に弔事があるので應伯爵と一處にゆく約束した西門慶は朝早く起きて大廳に待つてゐた。こころが待つてゐた應伯爵は來ずして李銘が來た。そこで春梅、玉簫、蘭香、迎春を喚んで歌の稽古をさせた。女壻陳敬濟は側に控ゐてゐた。三弄梅花を唱つたころ、漸く應伯爵は應保を先き立てゝ門に入つた。春梅外三人の者は慌てゝ奥へ行かうとする。西門慶は

『こらお前達は何處へ行く。お客樣が來たのに何故こりなしをしないのか』

と一喝した。

そこで四人は引返へし下席に下つて應伯爵に拜禮した。伯爵は慌てゝ答禮し

『これは〳〵揃ひも揃つた美人。例令ば葱の白身のような艶の好さ。大哥（ダーコー）の幸福をつく〴〵感じますな。こころがけふは生憎素手で來た譯けで、姐さん方に胭脂代を差上げることさへ出來ないが、いづれ後日改めてお禮を致します』

四人はころ〳〵笑つて立去つた。此時陳敬濟は進んで挨拶し一同席に就いた。西門慶は伯爵に對ひ

『けふはどうしたのです。大層手間取れましたね』

『實は餘り面白くもない話だから今まで差し控へてをりましたが、長女の奴が永らく病氣で困つてをります。幸ひ此頃少し好くなつたので家内に言ひつけ、けふは氣散じのため外へ出してやりました。それで轎をいひつけたり、買物をしたり之れでも中々急がしかつたのです』

『おゝそうでしたか、些つとも知らなかつた。時に何か食べて行かふぢやないか、腹が耗つた』

と小廝に命令けた時、李銘が出て來て應伯爵に對つて半跪した。伯爵は鷹揚に受け答へ

『おゝ李日新か、近頃一向見えないが、どうした』

『へい手前は此頃北の徐公館に參つてをります。つい御無沙汰して相濟みません』

そこへ小廝は十色ばかりの小菜と四皿の總菜と銀甌に盛つた白飯と榛松の實を交ぜた砂糖粥を持つて來た。二人は陳敬濟の陪席で、小さな銀カップに金華酒を酌み交し早々食事をした後ち、書童にいひつけ殘りの酒菜を廂房に運ばせ、李銘に與へ、やがて仕度もそこ〳〵に立ち出でた。

李銘は西廂房で剩り物をしたゝか御馳走になり微醉ひ機嫌になつた。玉簫と蘭香と迎春は主人が、出したので好い　になり、歌の稽古はどうでも好いとばかりで惡さをしてゐたが、やがて向側の厨に行き、それから西門大姐の部屋に入つて遊び戯れた。獨り春梅は殘つて琵琶の稽古をしてゐたが、李銘は酒の醉ひで、ふと妙な氣を起し、

『そこは少しいけません。惩うするのです』

と琵琶の手を少し強く持ち添へてニヤリと笑つた。すると春梅は忽ち大聲上げ

『馬鹿野郎、なんで私しの手を握つた。毎日御馳走酒を喰らやがつて身の程を忘れたか、私しは斯う見ゝても只の女中ではありませんよ。旦那に言ひつけてやるからそう思へ』

と怒鳴つた。李銘は仰天して外套を抱へて逃げ出した。春梅は烈火の如くなつてそのまゝ奥へ走つた。折しも金蓮は李瓶兒、孟玉樓、宋蕙蓮等を對手に象棋を差してゐたが、忽ち春梅がワーワー

〳〵と叫んで這入つて來たので

『何んだねゝ。騒々しい。靜におしなさい』

とたしなめた。

『だつて奥さん。あんまりですもの。あの李銘の馬鹿野郎が御馳走酒を喰らやがつて、私しの手を握つたのですよ。外の人達はみんな其場を脱したから屹度誰れかに頼まれたかも知れません』

と春梅はムキになつて辯解した。金蓮は落ち着き拂つて

『何も开んなに騒がなくとも可いよ。旦那にありのまゝを話せばそれまでさ。あの人許りが唱の先生ぢやあるまいし』

『でもあの人は二娘(アルニヤン)の兄弟でしよう。ここによると敵討ちをされますからね』
蕙蓮は側から口を出し
『唱のお師匠さんが、幷んな事をしては困りますね。たとひ月謝は安くても』
といふ。金蓮はスグ答へて
『安いごころか、一個月五兩も出してゐるのですよ』
と春梅に對ひ
『だがお前は旦那が外へ出た時、なぜ奥へ引込まなかつたの。獨りあの部屋に殘つてゐるのが惡い』
『でもみんなは騷ぎ廻つて外へ出たから、いづれ歸つて來るこごだらうと私しは氣をゆるしてゐたのです』
玉樓は側から
『ほかの人達は何處へ行つたのです』

その晩金蓮は西門慶に洗ひ浚ひ此話をしたので、李銘は早速お出入り差し留めを食つた。

こ玉樓は急に立ち上つた。そこで李瓶兒も部屋に歸り、急に繡春を遣はして迎春を喚びよせた

『そうですか。ごれ私しは見て來ましよう』

『姐(ダーチー)の部屋に行きました』

譯餘閑談

〔團花〕團花は何の花に限らず丸い花模樣である。

〔喜相逢〕これは喜の字を二つ並べた模樣である。囍の形である。

〔豚の面〕顏を打つて豚の面のように腫れさせるこは支那らしい言ひ草だ。

〔胭脂錢〕白粉代こ言はず胭脂錢こいふ。

二三

偖て其年も無事に過ぎ、明くれば西門慶は新年の回禮に出掛け、月娘は吳大妗子を音訪れた。鬼の留守に洗濯と玉樓金蓮は李瓶兒の部屋に行き何やら打ち興じてゐたが、軈て棋盤を持ち出した。玉樓

『けふは何か賭けてみようぢやありませんか』

金蓮

『ゑゝ幵うしましよう。負けた者は銀五匁出すこと、內三匁で金華酒、二匁で豕の頭を買ひ、そうして豕の頭は來旺の家內に煮て貰ひましよう。あの人は奇妙ですよ。一本の薪で肉も皮も溶けるように煮て仕舞ひます』

『それはそうと奧さんの留守に幵んな事をさせて好う御座ますかね』

『なに構ふもんですか。少し別けて上房に上げて置けば文句はありませんよ』
そう言つて三人は棋を下した。三度目に李瓶兒は負けたので彼女は銀五匁出し、金蓮は來興兒を喚んで買物を言ひつけた。
折しも蕙蓮は奥庭の石台に腰掛けて玉簫を相手に種物の皮を剝いてゐたが、忽ち來興兒が來て
『蕙蓮さん。台所に豚の頭と蹄子が置いてありますから、あれをスグ煮て六娘の部屋に持つて來て下さい。五娘と三娘のおいひつけです』
蕙蓮は少し癪に障つて
『私しは今手がふさがつてゐますよ。此通り奥さんの仕事をしてゐるぢやありませんか。何だつて私しに豚を煮ろといふのだらう』
來興は蒼蠅さうに
『煮るも煮ないも貴方の御隨意だ。だが品物は慥かに渡して置きますよ。私しは川があるからグズ〳〵してゐられない』

とサッサと出て行つた。玉簫は心配さうな顔し
『貴方煮ておやんなさいよ。五娘は口が好くない人だから、あとで屹度面倒が起りますよ』
と注意する。蕙蓮は笑つて
『五娘は誰れに聞いたのでしよう。私しの豚料理の手並みを好く知つてゐますね』
と早速立つて台所に入り、猪頭と蹄子をキレイに洗ひ、鍋の中に水、竈の下に一本の薪を焚きつけ、これに醬油と茴香と大料を加へると、瞬く間にうまさうな匂がぷんぷん噴き出し、皮と肉が溶けるやうに軟くなつた。そこで酒罎の蓋を開け、先づ一壺の酒と肉の大碗を上房に送り、それから大冰盤に煮物の大部分を盛つて姜蒜の皿盛と一處に方盒に載せ李瓶兒の部屋に運ばせた。
三人は喜んで箸を下し酒を飲んだ。暫くして蕙蓮は飄るゝやうな笑顏で此處に現はれ
『如何で御座います。けふの料理はお口に合ひましたか』
『三娘が今譽めてゐたところです。どうも實に奇妙だつて』
と金蓮がいふ側から玉樓は

『本當に一本の薪で、恁んなに好く煮ゐるものですかねゐ』

『ゑゝ實は一本つかはないで濟むのです。殘らず使ふと骨が拔けて仕舞ひます』

そこで玉樓は繡春にいひつけて大盞を出し

『おかみさん本統に御苦勞樣でした。一杯おあがんなさいな』

といふ李瓶兒は慌てゝ繡春に酌を命じ、皿を出して頭肉の好さそうな處を盛り別け、蕙蓮に渡した。

『お手製物を差上げるのは失禮ですが、まあ一つおやんなさいな』

『はい有難う。私しは好く承知してをります。皆さんは鹽の鹹いものはお嫌いでしやう。これは醬油が少し利き過ぎてをります。此次ぎ拵へる時には好く注意致しましやう』

と蕙蓮は三度頭を下げて後ち、漸く席に就いて酒のお對手をした。

夕方月娘は歸つて來たので衆女は上房に集つた。小玉は早速けふの頭肉を差し出した。

『何處から來たの。此馳走は』

と月娘は不審さうな顔して訊ねた。玉樓は笑つて答へ

『けふ私しどもは賭け象棋をして李大姐を負かし、肉と酒を買つて奢りました』

『賭事をすると誰れか一人損する事になりますから、いつそ輪番に奢つたら好いでしやう。正月だからその位の事をしても差し支はありません』

といふ。衆女は一も二もなく贊成した。月娘は少し考へ

『あしたは五日ですから先づ私しが奢り、六日は李嬌兒、七日は玉樓、八日は金蓮と、悉ういふ事に極めましやう』

金蓮は忽ち口を出し

『すると私しは儲かりましたよ。恰度誕生日とカチ合つたから一度で二つの義理が濟むわけ。して孫雪娥の日はいつになります』

雪娥は默つて側に聞いてゐると月娘は答へ

『この人は餘り攻めない方が可い。李大姐の附屬として置きましやう』

玉樓は注意し

『九日は六姐(金蓮)の正誕ですから潘姥姥や何か來て具合が惡う御座いますね』

『では九日を拔きにして十日を李大姐の日と定めましやう』

と月娘は皆に言ひ渡した。翌日西門慶は隣家に喚ばれて行つたので、月娘は約束通り上房に席を設け、郁大姐に彈唱させ衆姉妹と會飮した。それから毎日各部屋で會飮が行はれ十日になつたそこで李瓶兒は已が部屋に酒席を設け、繡春を遣はして孫雪娥を喚び出すと

『はい只今伺ひます』

といふのみで出て來なかつた。再三喚び出したが遂に出て來なかつた。玉樓は言ふ。

『私しは今あの人が來ないわけを好く知つてゐます。金ある者は十輪酒でも何んでも出來ますが貧乏人が一々幵んなおつきあひしてゐたら、人間の足に驢馬の蹄を絆ぐようなものだつて。オホホ、大姐姐と驢馬の蹄と一處にするのはあんまりですね』

月娘は流石にムッとして

『なんてわけのわからない人だらう。开んな者は相手にしないでサッサと初じめましやう』
と早速席を開かせた。席には吳大妗子と潘姥姥と西門大姐とが加はつて八名となつた。例の通り郁六姐が側に來て彈唱した。
西門慶は日暮れ前に歸つて來て上房に入ると、玉簫が出て着換への世話をした。
「奥さんは何處へ行つたね』
『只今六娘の部屋で大妗子と潘姥姥をお相手に御酒を召し上つてをります』
「酒はどんなものを飮んでゐる』
『金華酒で御座います』
『應二哥に貰つた茉莉酒があるから、あれを開けて吳れ』
そこで玉簫は酒罈の蓋を開けた。西門慶は一寸飮んでみて
『これは中々口當りが好いな。向ふで皆に飮んで貰ふことにしやう』
玉簫と小玉は重さうにそれを運び出した。

蕙蓮は先程から月娘の傍に侍してゐたが、今玉簫が一つの罎を運び入れたのを見て、急ぎ入口に行つてそれを受取ると、玉簫は一寸目交ぜをして蕙蓮の手を一ひねりした。月娘は玉簫を見て

『此酒は誰れが送つて寄越したの』

『旦那さんが持つて行けと被仰いました』

『おや旦那はもうお歸りになつたのかね』

『ねゝ今しがたお歸りになりました。皆さんが此處で御酒を召上つてゐると申しますと、ではこれを持つて行けと被仰いました』

『おゝそうだつたか。旦那が若し御酒を上ると被仰つたら菜を別に拵へさせて上房で差上げてお呉れ』

『はい〳〵』

と玉簫は退いた。

間もなく蕙蓮は月娘に囁いた。

『私しはお茶を拵へて參りましやう』
『おゝそうだつたね。皆さんは嘸ぞ喉が渇いたらう。あの上房の化粧棚の中に六安茶があるから急須に入れて持つて來てお吳れ。玉簫にいふとスグ解るよ』
蕙蓮は占めたとばかり立ち出でた。上房の前まで來ると、入口に立つてゐた玉簫はにツこり笑つて口笛を吹いた。蕙蓮はそれと察し、簾の端を掲げて構はず中に入ると、西門慶は椅子に坐して酒を飮んでゐた。そこでイキナリ膝の上に腰掛けてキスした。西門慶は何やら食べてゐたがそれを皆蕙蓮の口の中にホキ出した。そうして酒を一杯飮ませた。蕙蓮はグツタリ身體を凭せかけて
『旦那、此間のお茶は大層結構でしたよ。もう少し頂戴な。それに薛嫂から無心を言はれて小遣錢も皆つかひ盡して仕舞ひました』
西門慶は頷いて
『そこの巾着の中に一二兩殘つてゐる筈だ。あれを皆持つて行け』

と言ひながら彼女の裲子を引張つた。

『あれ、誰れか來るといけませんよ』

『お前はけふ、何處へも行かないのだらう。晩にゆツくり話さう』

蕙蓮は首を搖り動かし

『台所の薪駄棒は詰りませんよ。五色の色絲の方がキレイですからね』

と尙ほもグツタリと靠たれてゐる。外には玉簫が見張りをしてゐるので二人は心ゆくばかり打ち解けた。その時雪娥は上房で何やら笑ひ聲がするので、的切り玉簫が主人とふざけてゐるものと察し、拔き足さし足來て見ると、意外にも玉簫は入口に立つてゐる。

『おやお前さんは此處にゐたの』

と言はれて玉簫はハツとし、內に入れては大變と思はず大聲で

『あなたはなぜ向ふの部屋に喚ばれてゆかないの』

といふ。雪娥は鼻の先で笑ひ

『私しのような運の悪い者は迚も早馬に騎りきれませんよ。十輪酒のおつきあひを一々あいよと引受けてゐたら、褌子の尻襠がスリ切れて、差し詰め掛け替へに困ります』

此時西門慶は部屋の内で一つ高い咳嗽拂ひをした。雪娥は萎々こ台所に引き返へした。玉簫はそつこ簾をかゝげて外に人の居らぬことを見せたので蕙蓮は匆々此處を立ち出でゝ台所に來た。そこへ小玉が馳けつけ

『まだお茶が出來ないのですか。奥さんがお待ち兼ねですよ』

『ゐゝお茶は出來ましたが、今お菓子の仕度をしてゐる所です』

といひながら手早く整へ、茶道具を持つて小玉と一處に六房に來た。月娘は蕙蓮の顏をじつと眺め

『大層手間取れたね。何をしてゐたの』

『ゐゝ旦那がお部屋の中で御酒を召上つて被在しやいましたから、そこへ這入るも無躾けと思ひまして、自分の部屋へ行つてお茶を出し、果子の皮を剝いたりなんかして少し暇取れました』

と答へつゝ茶を汲んで出した。一同は之れを飲み終つて骰を振り初めた。蕙蓮は月娘の傍に立つてみてゐたが

『奥さん、これは長(チャン)么(ヨー)が揃つて六に對してゐますから天地分(テンデーフェン)でなくとも勝つてゐますよ』

と助言をした。對手の金蓮は否な顔をした。次に李瓶兒と孟玉樓が骰を振つた。蕙蓮は又差出口をして

『六娘の骰は錦罷鳳對兒(キンパーフンテール)です。三娘の骰は么三(ヨーサン)が純五に配してゐるから十四點だけでこれは負けです』

と言つた。玉樓は腹を立て

『私しどもが骰を振つてゐるのに、お前さん、餘計な差出口をしなくとも可いよ。下人の癖に何んです』

と一本極めつけた。蕙蓮はサッと顔を赧らめ其場にゐたゝまれず立ち去つた。

灯ともし頃一同は又飲みなほした。西門慶は簾をかゝげて内に入り

『皆さん中々御精が出ますね』
こ笑つてあたりを見廻した。吳妗子は慌てゝ立上り西門慶に席を讓らうこする。月娘はいふ
『貴方は女の中に這入つて來てはいけませんよ。御酒があがりたければ、奥でおあがんなさい』
『そうか。では向ふへ行かう』
こ金蓮の後ろへ廻り一寸肘を突いた。金蓮はそつこ立上り西門慶の跡へ跟いて出た。少し歩いてから、微醉機嫌の西門慶は金蓮の肩に手を掛けた。
『お前は好い兒だから俺れのいふことを背いて吳れ。今夜蕙蓮に少し用事があるのだが、お前の部屋を貸して吳れないか』
『私しは構ひませんが、春梅が承知するかごうだか。若しあいつが可いこ言つたら、私しは一向差し支ゐありません』
『そうは言ふものゝ内々お前も不賛成なんだらう。宜しい山洞の中で一夜を明かさう。女中にいひつけて寐道具を寄越し吳れ。それに火鉢が無くては迚もやりきれないね。此寒さでは』

金蓮は思はず噴き出し
『丸で二十四孝のような孝行振りですね。王祥の氷の衾。冬月石上に眠るとは此事でしよう』
『餘計なお喋舌をやめて俺れのいふ通りにしろ』
その夜蕙蓮は花園に近寄り、角門をそつと押すと戸は音無く開いた。藏春塢の洞内には西門慶が燈を秉つて書を觀てゐる。
『お丶寒い』
と彼女は顫へ乍ら這入つて來た。あたりを見ると榻は塵だらけになつてゐて炭火はあつても防寒の役はしない。彼女は懐中から棒形線香二本を取り出して火を點じ地上に挿した。そうして床上に束ねてあつた蒲團を引き延ばし、一枚の貂鼠蟬衣を上に掛けた。扉を鎖した。
金蓮は一旦床の　に入つたが中々寐つかれない。そこで拔き足差し足。藏春塢に近づき、丸窓の下でそつと立聽してゐた。燈光は尙ほあか〳〵と窓内に滿ちて蕙蓮の笑聲が洩れた。
『お丶寒い。蒲團の中は丸で氷地獄のようね。死んだら口に繩をつけて往來に抛り出して下さい

みな貴方のせいよ』
又言ふ。
『もう寐ませう。いつまで私しの足を見てゐるの』
『俺れはあした。お前の鞋ギレを買つてやらうと思つてゐるのだ。五娘と比べると少し小さいようだ』
『ゑゝあの人よりもズッと小さう御座います。きのふ私しはあの人の鞋を穿いてみましたが、鞋穿きのまゝで樂に嵌りました』
こいふ。外にゐた金蓮はむか腹を立てたが、じつと胸を撫で卸して尙ほ聽いてゐると
『あの人を迎へる前には桑園會のような芝居があつたそうですね』
『まあ开んなものだ』
と西門慶は好加減に返事してゐる樣子
『それになぜ今あんなに偉張つてゐるのでしよう。多寡が露水夫妻ぢやありませんか』

金蓮は思はず齒ギシリした。

『己れ覺ゑてゐろ、いつか一度は復讎してやるから』

と一時兩腕がグタリとなり、雙脚が顫ゑて身動きさへ出來なくなつたが、漸く心を取り鎭めて此處を立ち去り角門を出る時、頭上の銀簪を拔いて扉を固く鎖した。

蕙蓮は翌朝蓬々髮のまゝ角門に來てみると、戶は閉ざされ押せども引けども中々開かない。西門慶は已むなく迎春を喚んで戶を開けさせ、見ると其處に金蓮の銀簪が挿してあつた。蕙蓮はハツとして不安の念に驅られ乍ら房門の前まで來ると、恰度東の厠から立ち出でた平安は彼女の顏を見てニヤリと笑つた。

『お前さんは何がをかしいの』

と蕙蓮は平安に食つてかゝつた。

『へ、、、笑つて怒られては、かないませんね』

と平安は益々笑つた。

『でも朝ッぱらからゲラ〳〵笑つて本當に氣味の悪い人だよ』
『貴方を見て笑へば眼の前に花が咲き、三日御飯を食べないでも濟むこさ。時におかみさん、ゆうべごちらへ被入しやいました』
　蕙蓮は思はず顔を赧めて
『私しは何處へも行きません。部屋にをりました』
『はて不思議だ。今しがたおかみんの部屋の前を通つてみたが戸が固く閉つてゐた』
『私しはけさ早く起きて五娘の部屋に行つたから閉めて置いたのさ』
『して見るこ五娘は鹽漬の蟹を注文したのだね』
『いゝえ』
『でもおかみさんは腿を劈く事が巧いぢやないか。簸箕賣のように舌を咂るのも上手ぢや』
『馬鹿におしでないよ』
　こ蕙蓮は門の閂を引ッ脱して平安を逐つた。

『畜生、今に見ろ。お前には仕着せ　枚、拵へてやらないぞ』

平安は院内を右に左に逃げ廻つて

『では愈々本當ですね。貴方は高い枝に這ひ上つたのだ』

そこへ玳安が出て來て蕙蓮の手にせる門を抑へ

『おかみさん、みつともないからおよしなさいよ。一體どうしたわけなんです』

『あいつが色んな事を言つて私しを揶揄ふので、もう口惜しくて口惜しくて胸がわく／＼して來た』

と蕙蓮は泣聲立てゝ訴へた。其間に平安は表の方に逃げ延びた。

『おかみさん、馬鹿を相手に喧嘩をしても初まらない。部屋へ行つて髪でもお結ひなさい』

と言はれて蕙蓮は急に機嫌をなほし、腰の間から三四分の銀を取り出し

『あの誠に濟みませんが、之で何か汁物を買つて來て下さい。私しは汁が飲みたいの。お前さんに身を上げるよ。二碗一處に銚子に入れて持つて來て下さい』

『ゑゝ好う御座います』

と玳安はそれを受取つて表へ出た。

其朝蕙蓮は一寸上房に顔を出した丈けでスグ金蓮の處へ來た。折柄金蓮は髪を梳いてゐたので

『おや、おくし上げですか』

と鏡を取つてやつたり、手水盥を運んだり、色々御機嫌をとつたが、金蓮は見向きもせず澄してゐる。蕙蓮は一層へりくだり

『奥さんの睡鞋、裹脚は私しが始末しますよ』

と言つて纒足の綳帶を卷き收めた。

『そんな事は皆女中がしますよ。おや秋菊の奴は何處へ行つたらう』

『秋菊は今、庭掃除をしてをります。春梅姐さんはあちらの部屋で髪を結つてをります』

『構はず措いて下さい。今あいつ等が來て片附けますから。それよりもお前さんは旦那の世話をして上げた方が可いでしよう。露水夫妻や再婚の代物に手を掛けると大事の身體が穢れますよ。

本統にお前さんこそ轎に乘つて來た立派な正妻で、いはば桑園會だからね』

偖てはゆうべの事を聽かれたかと、蕙蓮は慌てゝ兩膝突き

『奥さん、どうぞゆるして下さい。私しは貴方のお引立がなければ一刻も斯うやつてをられません。旦那や上房が上にあつても萬事貴方のお指圖に從はなければ身が立ちません。初じめ貴方が大目に見て下すつた御恩は今も決して忘れてゐません。若し私しに惡い心がありましたら、身體中の毛穴といふ毛穴に疔瘡が吹き出ます』

『丌んな辯疏けを誰れが眞に受けるものかね。眼の中の砂とはお前さんの事だよ。旦那が御執心とあれば私しとも別に爭ふわけもないが、蔭へ廻つて餘計な事を言つて胡麻を擦り、私しの前に來ては諸膝突いてあやまるなんてあんまり人を馬鹿にしてゐるよ。大姐姐はそういふ事をお前さんに命令けたのかね』

『私しは決して惡い事を申した覺ねは御座いませんが、若しや奥さんのお聞き違ひでは御座いませんか』

『フンお聞き違ひも好く出來た。旦那は内には大勢の女房、外には大勢の色女があつて、詰り男一人に娘八人だから、盆槍してゐればいつも馬鹿の見通しさ。幸ひ私しには何事も包まず打ち開けて下さるので、お前さんが此處に來た當時の事情も能く知つてゐるよ』

蕙蓮は返へす言葉もなく暫くそこにうづくまつてゐたが、軈てスーと立上つて外へ出た。儀門に通ずる庇あはひまで來るこ、西門慶にハタこ行き逢つた。

『貴方は本統にお喋舌りよ。ゆうべの話が殘らず人に知れて仕舞つた。私しはもう何んにも言ひますまい』

こ怨めしげに見た。西門慶は變な顏して何か言はふこした時、蕙蓮はヂロリこ一つ横目を使つて立ち去つた。

それから蕙蓮は益々增長して常に店先きに出ては門前の物賣から何やかやこ買物した。そうして傅夥計を傅大郎こ呼び、陳敬濟を姑夫こ呼び、賁四を老四こ呼んで下らぬ事をベチヤクチヤ喋つた。

『一寸傳大郎さん。貴方と私しは仲好しだから賴めば否やと言はないでしよう。あの向ふに通る白粉屋を喚んで下さいな』

傳夥計は眞面目な男だから言はれた通り立上つて白粉屋を喚んだ。玳安は側から口を出し

『どうもお生憎樣、白粉屋は午前中に通り過ぎました。おかみさん、も少し早く此處に來て、秤を持つて、待つてゐれば好かつたのに』

『この猿め、お前はなにを言ふのだね。私しは五娘と六娘の御用を言ひつかつて來たのだよ。まさかお女郎ぢやあるまいし、臙脂や白粉を二斤も三斤も秤にかけて買ふ奴があるものかね。奥へ行つて那んな事が言へますか』

『やれ〳〵五娘を山車につかつてスッカリ嚇かされて仕舞つた』

蕙蓮は知らん振りして今度は方角を變へ

『賁老四、あの簪屋が來たら一寸呼んで下さいな。梅の花と菊の花と一對づゝ欲しいから』

賁四は喜んで引き受け自分の用もそこ〳〵に簪屋の來るのを待ち兼ねて呼びつけ、わざ〳〵蕙

蓮に注進してやる。蕙蓮は二對の鬢花大翠こ二枚の綾織紫の銷金ハンケチを撰んで腰の間から半塊の銀錠を取出し
『スツカリで七匁五分。憚りですが秤にかけてこれを渡してやつて下さいな』
こいふ。賁四はつけかけてゐた帳面を置いて立上がらうこした時、玳安は横合から
『私しが切りましよう』
こ銀を受取つて其まゝ切りもせず眺めてゐる。
『お前さん。何を愚圖々々してゐるの。これに不審がありますか。夜中に犬の遠吠ゑでも聞いたのかね。盗んだものこ思つてるのかね』
『サア盗んだかごうだか知りませんが、これは慥かに見覺ゑのある銀だ。此間燈籠市で旦那が買物をして剩つた半分は慥かにこれだ』
『馬鹿お言ひでないよ。金は天下の廻り持ちだ。旦那がいつまで同じ銀を握つてゐるものかね。廻り廻つて私しの手許に來ないこも限らないよ』

琉安は顔を歪めて
『へ、い、そうで御座いましようとも。手前はチヤンと帳面につけて置きましたから』
蕙蓮は琉安に打つてかゝり漸く切つた七匁五分を簪屋に渡し、残りの銀を受け取らうとすると
琉安はそれを渡さない。
『お前がそれを持つて行つたら偉いよ』と蕙蓮はいふ。
『へ、い、どうせ餘り物で御座いますから、お菓子でも買つてみんなに奢つたら如何で御座いましよう』
『冗談言つちやいけないよ。こつちへお出しなさい』
と引ッ手繰る。琉安は三四分の一塊を彼女に戻し、残りは素早く腰套に入れて逃げ出す。斯ういふ風に蕙蓮は毎日店先きに出て買物をする。時として四五舛ほどの西瓜子を買つて各房の女中に振舞ふこともある。そうして頭には珠の鉢巻、金の墜子が明星のように煌めき、身には黄色の衣裳、紅繿綢の褌子が燃ゑるように輝き、袖の中には三四個の香茶香嚢を帯領してゐるのでいつ

も彼女の身邊から噴ぶような薫りがした。恁うして毎日二三匁の銀を濫費してゐたが、西門慶があこからあこから注ぎ足すので彼女の懐中から金は水のように流れた。だが金蓮には弱身があるので、毎日上房から五房へ來て、お茶よ水よこ立働き或は鞋を作つたり或は針仕事をしたりあらゆるお世辭をつかつた。金蓮も西門慶の意のある處を察し、李瓶兒こカルタを取る時にはいつも彼女を相手にし、西門慶が來た時には側で酌をさせ、わざこ二人を近寄らせて西門慶の機嫌を攬つた。

譯餘閑談

〔蹄子〕蹄子は豚の下膊以下爪を除いた全部で皮こ肉こ筋こ骨をぶつ切りにして其まゝ煮るのである。支那人はロースよりも恁ういふアラものを好む。豚の頭こ蹄子が當時銀二匁であつた。現在豚頭一個一弗内外、蹄子一本四十仙位である。昔の方が高い。

〔一本の薪〕　蕙蓮は元コックの妻であるから一本の薪を全部つかはないで、斯ういふ大物を軟かく煮る方法を心得てゐたのだらう。茴香大料は香料である。現在五香こいふ名を冠せた料理に此種の調味を加へる

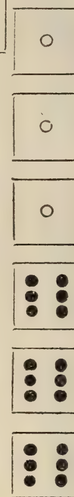
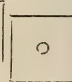
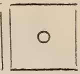
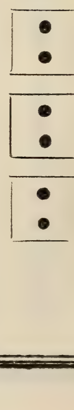
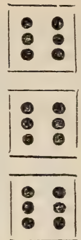
〔大冰盤〕　美しい大皿である。恐らく白瓷であらう。

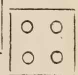
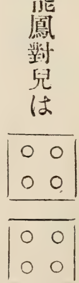
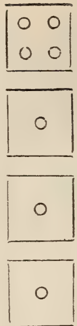
〔お正月〕　正月は三日間、凡べての商人は休業する。金蓮が豚こ酒を買ひにやつたのは四日である。但し大店向きは暮から春にかけて一週間も二週間も休む

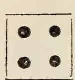
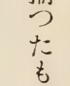
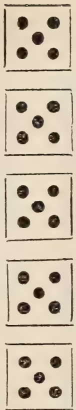
〔十輪酒〕　順番に酒肴を奢るここ。

〔茉莉酒〕　茉莉花を浸潤した燒酒臺の酒。

〔六安茶〕　安徽霍山産の茶である。第一品を蕊尖こいふ。汁無し。第二品を貢尖こいふ。一旗一槍即ち一梗一葉である。第三を客尖こいふ。一梗兩葉である。第四を細連枝こいふ。一梗三葉である。第五白茶こいふ。毛あり、粗といへごも白茶こなす。毛無きものを明茶こいふ。明茶はまた耳環、封頭の種類あり。皆老葉なり。

〔天地分〕天地分はである。長么はである。故にとなる。爰で長么が六に對すといふはといふ形を言つたものだらう。これを分相といふ。

〔錦罷鳳對兒〕錦はである。鳳はである。故に錦罷鳳對兒はだらうと察せられる。之れも分相である

〔么三〕好くわからないが、么三は本來であるから此處ではを指して么三といつたものだらう。又純五はが五つ揃つたものだらうと察せられる。即ちといふ形でこれを五子といふ。五子は分相よりも一級上であるから、孟玉樓が怒つたのも無理はない。

〔女の中に男〕　吳大妗子は月娘の兄の妻である。支那では男女の區別が表面非常に嚴格であるから、人の前で嫂に會見することさへ憚らる。そこで月娘は此時西門慶に對し、女の中に男が這入つて來てはいけませんよ、と言つたのである。その口の下から西門慶は下人の妻と關係してる。表向きが嚴重丈け裏は斯くの如しである。

〔小さな足〕　小さな足は支那女の自慢の一つである。現在纏足の風が廢つたから此事がない。

〔桑園會〕　昔秋胡といふ男が他所へ出て出世し故卿に歸り、我家に眞近き桑畑で美人に逢ひ、黃金を出して口說いてみたが撥ねつけられた。歸つて妻を見ると桑畑の美人は我が妻であつた。妻は怒つて自縊を企てたが、早くも之れを察して救ひ出し、種々詫びを入れて漸く命を取りとめたといふ。此故事を芝居に仕組んだものである。此處では出來合ひ夫婦といふ意味に取つてゐるので、少しをかしい。又首を吊つたのは金蓮でなくして李瓶兒であるが、蕙蓮はそれを穿き違へてゐるようにも思はれる。

〔露水夫妻〕　正當の手續きを經ずして一處になつた男女である。戸外で轉び寐したといふ意で

ある。前の桑畑と同じ意味である。

〔鬢花大翠〕鬢邊にさす作り花。材料は翡翠などであらう。

〔籤箕賣〕當時籤箕賣が舌を咂つて箕を賣り歩いたものと思はれる。

〔銚子〕釜形にして柄あり、口あり。

〔睡鞋〕纒足婦人が寐る時に穿く鞋。

〔裹脚〕裹脚は纒足婦人が足に卷く細長い布。

〔疔瘡〕疔瘡は皮肉の間に生ずる豌豆狀の小泡で日本では水むしと稱してゐる。支那人は常に足をくるんでゐるので、此病氣に罹つてゐない者はない。從つて言葉の端しにスグこれが出て來る

〔胭脂白粉〕三斤の胭脂と三斤の白粉を秤に掛けて買ふのは買春婦の業である。故に蕙蓮は玳安の言葉をとがめたのである。

二一四

天上の元宵は人間の燈節である。正月十六日西門慶は夕方から廳上に妻妾を集めて飲酒した。吳月娘、李嬌兒、孟玉樓、潘金蓮、孫雪娥、西門大姐は主人と同席し、陳敬濟はひ　り別卓をあてがはれた。席間春梅、玉簫、迎春、蘭香は燈詞を彈唱し小玉、元宵、小鸞、繡春は斟酌した。來旺兒の女房宋蕙蓮は廊下の中程に一卓を設けて坐し、西瓜子（シーカツ）をかぢつてゐたが、酒が無くなると小廝を喚んだ。

『來安兒、畫童兒。酒がキレたよ。お前達は一體なにをしてゐるのだね。一人もゐないぢやないか』

と怒鳴つた。やがて畫童が酒を持つて西門慶の側へ來た時、豪か小言を食つたので彼は怨めしく思ひ、出掛けに蕙蓮に對ひ、

『おかみさん、お蔭で私しは叱られたよ。チト靜にして下さい。何處へも行きやしないから』
『叱られたのは自業自得さ』
と蕙蓮は瓜子の皮を吐き出した。
『おかみさん。そんなに散らかしてはいけませんよ。けさキレイに掃いて置いたのに、旦那が見ると又お小言だ』
『掃くのはお前の役目だよ。氣がついたら掃除でもなさい』
一方席上では陳敬濟が片隅で獨り洒を飲んでゐる。西門慶は金蓮に命じ
『お前、お聟さんに一杯上げて呉れ。淋しさうだから』
金蓮は嬉しさうに立上り、敬濟の側に來て
『敬さん、お父さんのお許しが出た。サアけふはウンと飲まないと承知しませんよ』
と滿酌の杯を渡す時一寸敬濟の手を抓つて意味ありげに笑つた。
『私はゆツくり飲みたいのだから少し待つて下さい』

と敬濟は卓の下から足を延はして金蓮の足を輕く蹴た。
『あらお父さんの目の前でなんですねえ』
と金蓮は小聲で叱つた。金蓮は燈を背にしてゐたから、誰れも氣がつくまいと思つてゐたが、何ぞ知らん、窓外の廊下で蕙蓮はこれを見てゐた。
間もなく西門慶は應伯爵に誘はれ賞燈に出掛けたが、月娘は席に在つて尙ほも衆姊妹と飮み續けてゐた。やがて星の瞬きの中に月は登つて院内の屋背を輝した頃、各自思ひ〳〵の振舞をゆるされ月娘は席を立つたので李嬌兒、孫雪娥、西門大姐は其跡に跟いて奥に入つた。そこで部屋に入つて着換へをする者、月下に化粧する者、燈前に花を戴く者あり。金蓮は玉樓、李瓶兒と廳前に立つて敬濟の爆竹を見てゐたが、やがて二人に對つて
『旦那がお留守だから大姐姐に話して外へ出て遊ばふぢやありませんか』
蕙蓮は小耳に挾んで
『私しも一處に連れて行つて下さいな』

『お前さんが行きたければ奥へ行つて訊いてみて下さい。私しごもは之れから揃つて散歩に出掛けますが、大娘こ二娘はお出掛けになりませんかごそう言つて御覽なさい。』

蕙蓮はいそ〳〵立去つた。玉樓はいふ。

『あの人のお使では旨くゆくかごうだらう、怪しいものですよ。一寸行つて見て來ましよう』

李瓶兒はいふ。

『外へ出るには之れぢやごうですかね。私しは屹度寒からうこ思ふ。着物を重ねて來ますよ』

『では序に貴方の披襖子を一枚持つて來て下さいな。そうすれば私は部屋に行かなくごも濟む』

二人が立去つた跡で金蓮は敬濟の側に來て一寸肩を摘んだ。

『憑んなに薄着で好く寒かないのね。小鐵棍こはお前さんの事よ。眼の前の遊事で風を曳くのも忘れてゐるのよ』

こイキナリ敬濟の手にしてゐた爆竹を引ッ手繰らふこする。

『危ぶないからお止しなさい』

と敬濟は渡さない。二人はわざと爭つて抱きついたり引ッついたりしてゐる時、蕙蓮と玉樓は戻つて來た。

『大姐姐は身體の具合が悪いと被仰います。李嬌兒は腰が痛むそうです。孫雪娥は奥の二人が出ないのに自分ばかり出て、旦那に叱られるといやだと言つてをります』

『そうすると一寸困りましたね。私しども三人丈けで出掛けると旦那が歸つて來てから屹度何とか言はれますよ。あゝ斯うしましよう。內の春梅と、上房の玉簫と、貴方の處の蘭香と、李大姐の迎春と皆連れてゆくことにしましよう』

小玉は奥から玉樓に跟いて來たが

『私しも連れて行つて下さいな』

と金蓮に頼む

『連れて行つてやるから奥さんに聞いて見な』

『奥さんは行つても差支はないと被仰いました』

そこで三人は大勢の女中に取りまかれ、來安と畫童は一對の紗灯燈を提げて先導し、陳敬濟の同行を請ひ、門を出る時馬臺に立つて足蹈みし爆竹を見た。蕙蓮はいふ。

『姑夫、少し待つて頂戴な。私し着物を着換へて來ますから』

『俺れはもう出掛けるのだ。待つてゐられない』

『貴方が待つて下さらなければ、私しは一生怨みに思ひますよ』

と言ひ捨てゝ大急ぎで部屋に飛んで行つた。蕙蓮が再び出て來た時は綠閃の紅緞子の對襟(チーチン)の衫兒(サンル)を上に着、白桃線の裙子(チユンツ)を下に穿き、一枚の紅銷金汗巾を額の角に覆ひ、飛金と面花兒でそれを留め、金燈籠の墜子を垂れ下げて衆人の跡に跟いた。折しも市街は雜踏し月光晝の如く簫鼓の聲、爆竹の音、轟々と響く唯中に紗燈を先きに立てた一隊の美人が現はれたので道行く人は如何なる王侯の家族かと、左右に別れて見守ると白綾の裙、遍地金の比甲(ピチヤ)、珠翠の頭飾がキラ〱と光つた。蕙蓮は好い氣になつて敬濟にしなだれかゝり

『姑夫、桶子花(花火の名)に火をつけて下さいな。私しはそれを見たいから』

暫くして又
『姑夫、元宵炮焯(花火の名)を放して下さいな。私はそれを聞きたいから』
暫くして又
『あら簪を落して仕舞つた。拾つて頂戴な。あら鞋が脫げそうだ。吊り上げて下さいな』
と事每に姑夫姑夫と叫んで右へ行き左へ來て敬濟とふざけた。玉樓は見兼ねて
『鞋を吊るとは一體どういふわけなんです。私しは未だ聞いたことはない』
玉簫は答へて
『あの人は五娘の鞋をカバーにしてゐるのですよ。自分の鞋が泥に汚れるといけないからね』
『おやまあ呆れた。私しは見てやらう。本當に五娘の鞋を穿いてゐるか、どうだか』
金蓮はいふ。
『きのふあの人が來 私しに鞋を吳れと言つたが、こんな事につかつたのか。本統に馬鹿にしてゐるよ』

そこで玉樓は蕙蓮を呼んで裙子をまくり上げて見ると果して褲腿から紐を下げて紅鞋を吊つてゐた。玉樓は呆れて言葉がなかつた。間もなく大街を通り過ぎ燈市に入つた。金蓮は玉樓に對つて

『此處まで來たものだから。いつそ李大姐の舊宅に行つて遊ばふぢやありませんか』

こ書童、來安を一足先きに獅子街に遣はした。

馮媽媽は此頃買つた二人の女中を炕上に休ませ、自分も床に入つてグッスリ寐込んだところへ突然衆女の來訪があつたので喫驚りして起き上り茶だの酒だのと大騷ぎをやつた。孟玉樓はいふ

『酒はもう要りませんよ。お茶丈け下さい。みんな内で飲んで來たから喉が渴いてゐます』

金蓮は遠慮なしに

『馮媽媽、御馳走する積りなら、酒の肴を先きに出すものだよ』

李瓶兒は注意して

『小買ひをするこ交ぜ物があつていけないから一兩の大罈を買つておいでなさい』

玉樓は側から打ち消し

『あら冗談ですよ。私しごもはお茶丈け飲めば可いのよ』

こ言つたので、馮媽媽は好い氣になり、中々立ち上りそうにもしない。李瓶兒は少し機嫌を惡くし

『媽媽、お前は何故買物に行かないの』

『奥さん、誠に濟みませんが此二人の女中に目を放すことが出來ないので』

玉樓はいふ。

『二人の女中は何處から買つて來たの』

『一人は北の或家の小婢で今年十三歲、五兩欲しいこ言つてゐます。も一人は汪序班家の召使の妻ですが、召使が逃亡したので、十兩で賣つて呉れこ私しの處へ寄越したのです』

『それは恰度好い。今二房（アルフアン）では元宵が年がゆかないので困つてゐます。早速賣つて呉れないか。年はいくつだね』

『大きい方は十七になります』

春梅と玉簫は先程から前樓に登つて往來を見物してゐたが、此時戻つて來て皆と一處に茶を飲んだ。敬濟は側から

『もう可成り夜が更けてゐますよ』

と歸りを促す。金蓮は立上つて

『何も那んなに慌てなくとも可いよ。夜が開けて叱られたらお前さんのセイだ』

そう言ひ乍ら、春梅を連れて先きへ出たので、一同はその跡へ跟いて出た。馮媽媽は門口まで送つて來たので李瓶兒は振り返り

『平安は何處へ行つたの』

『どうもあの男は夜遊びして仕樣のない奴ですよ。けふは旦那のお供で應二爺の家にゆくと言つて出掛けました』

『あの人達は當てにならないから早く戸締りしてお休みなさい。あしたは二娘の方へ是非女中を

寄越してお呉れ。お前さんは隨分無愛憎だね。丸で石佛寺の和尚を迎へたやうだ』
と李瓶兒は笑ひ乍ら別れた。家の前まで來た時、部屋借りしてゐる韓回子（カンホエツ）の女房韓嫂兒が何やら大聲でわめいてゐた。金蓮は來安にそのわけを訊かせると韓嫂兒は衆女の前に進んで再拜し
『おやお三方お揃ひで御座いますね。實はね、けふ走百病（ソオーパビン）に出掛けましたところ、歸つて見ると狗を盗まれるやら品物を盗まれるやら、いやはや飛んだ災難に遭ひました。そこへ內の野郎が醉拂つて來たもんだから往來へ飛び出して大騷ぎをやりました』
三人は懷中から菓子だの錢だの出して彼女に與へ敬濟に賴んで部屋まで送らせようとした。敬濟は蕙蓮とふざけてゐたいので跡に殘つて愚圖〳〵してゐる。金蓮は韓嫂兒に對つて
『私しはあした奧さんにそう言つて灌ぎ洗濯や何やかやと御用を言ひつけて上げるよ。又旦那にもそう言つてお前さんの腹癒せをして上げるよ』
韓嫂兒は山々お禮を述べて立ち去つた。衆女は大門の前まで來た時、賁四の細君が追從笑ひして皆を迎へた。

『これはお珍らしい。お三方お揃ひでごうぞ手前ごもにお越しを願ひます』
玉樓はいふ。
『今ね、韓嫂兒に散々泣言を聞かされたよ。お前さんの處に行きたいが、今夜は遲いからいづれその中改めて出掛けよう』
『あらまあ大層お嫌ひなさいますね。むさい處ですがお茶を一杯是非召しあがつて下さいな』
ご無理槍に三人を引張つて行つた。玄關には觀音入難ご關聖賢を祀り、一盞の雪花燈を供へてある。布簾を掲げて側門の中に入るご部屋の中に春臺を設けてあり。三人は其前に腰を卸した時十四歳の長女が出て來て恭々しく禮儀をして茶を薦めた。玉樓ご金蓮は各一つの花簪を出して彼女に與へた。李瓶兒は袖内から一枚のハンケチご銀十匁を出し、これで瓜子でもお買ひなさい、ご言つて渡した。娘ご細君は喜んでお辭儀をした。やがて三人は此處を立出で大門の前に來た。來興は門口に迎接し、金蓮の問ひに對し主人は未だ歸らぬ由を答へた。陳敬濟は門口に立つてゐたが、殘りの花火を持つてゐた。一つは一丈菊、一つは大烟蘭、一つは金盞銀臺兒こいふもので

あつた。それを皆打ち揚げてから衆女は漸く門内に入つた。西門慶は四更頃家に歸つて來た。
走百病の後ち陳敬濟は衆婦人と親密になつたので、次の日朝早く起きて店にも出ぬ中、先づ上房に入つて見ると、月娘は持佛堂に行つたあとで、李嬌兒と金蓮は吳大妗子の相手をして炕に坐し茶を飮んでゐた。敬濟は皆に挨拶して坐に就いた時金蓮は口を開いた。
『陳姐夫、あなたは本統に人の好い人ですよ。きのふ韓嫂兒を送つて下さいと言つたのに送らずあの人達とふざけてゐましたね。仕方がないから私しは小玉にいひつけて送らせましたよ。今太娘が此處へ來たらスツカリぶちまけてやるから』
敬濟は空々しい辯疏けして
『私しはきのふ腰に腫物があるので歩くのは否やだつたが、貴方が是非行けと被仰つたから仕方なくお供をしたわけです。それに韓回子の女房の送り役まで勤めたら、けふは迚も起きられません』
そこへ月娘が這入つて來たので敬濟は一揖した。月娘はヂロリと彼の顔を見て

『きのふ韓嫂兒が醉拂つて何か騷いでゐたようですが、あれは一體どうしたわけです』
『走百病(ツオーパピン)に出た留守に狗をぬすまれたそうで、往來へ出て哭いたり叫めいたりしてゐましたが、亭主が歸つて來て一毆りしたら急に治まりました』
金蓮は側から口を出し
『そうではありませんよ。私しどもが行つていろ〳〵慰めてやつたから漸く治まつたのです。貴方はあの時ほかの事で夢中になつてゐたから知らないのでしようが若し旦那にあの態を見付けられたら面白いものですね』
と金蓮は敬濟を見て意味ありげに笑つた。敬濟は茶を飲んで此處を辭し去り、やがて已が部屋に來て見ると、妻の西門大姐は甚だ不穩な顏して
『ゆうべのあのざまは何んといふ事です。若しお父さんに見付けられたら女の方は構はないが貴方はさつそく首になつて仕舞ひます』
と罵つた。

其日新任の兵馬都監荊千戸が訪ねて來た。西門慶は前廳で對面し平安に茶を命じた。折しも院內で蕙蓮、玉簫、小玉の三人が打瓜子して遊んでゐる。小玉は馬騎りになつて玉簫を組み敷きながら

『お前さんが負けたのに、なぜ私しに打たせないの。おかみさん、私に加勢して此奴の足を引張つて下さいよ』

と笑罵した。そこへ平安が來て

『玉簫さんお客樣ですからお茶を入れて下さい』

玉簫は彼の言葉を耳にも入れず尙ほも小玉とふざけてゐる。平安は待ち兼ねて催促すると、側にゐた蕙蓮は蒼蠅さうに

『何んだつてお前さんは私しどもに附き纒ふの。お茶が要るなら台所に行つて下さい。私しどもはお部屋の係りですから表の方の世話まで出來ません』

と撥ねつけた。平安は仕方なしに台所にゆくと、そこには來保の妻蕙祥が竈の下に火を焚きつけ

てゐた。

『お客様が來たからお茶を入れて下さい』

蕙祥はムッとして

『私しは今御飯を焚いてゐるよ。向ふに手の空いた人が澤山あるぢやないか』

『ところがね、蕙蓮ねえさんがお茶は奥では出來ないから台所へ行つて頼むが可いといふのさ』

蕙祥は益々脹ッ面をして

『私しは生れつきのお爨ごんですかね。皆さんの御飯を爨いたり、大妗子の精進料理を拵へたりこれでも中々急がしいよ。辿もお茶なご入れてゐる暇はないよ』

『そんな事を言はないで一寸拵へて下さいな。荊老爹に出すのだから愚圖々々してゐると且那に叱られて仕舞ふ』

こんな押問答をして茶が出來るまで可成り暇取れた。

一方西門慶は荊都監が再三立たふとするのを引止め

『まあお茶を一杯あがつてから』

などゝ言つてゐるところへ漸く平安は茶を運んで來た。荊都監は一口飲むとそれが水のように冷たてゐたので其まゝ下に置き匆々辭し去つた。客が歸つたあとで西門慶は平安に

『今の茶は何處から持つて來たか』

こ訊いた。平安は只

『台所から持つて參りました』

こ答へた。間もなく西門慶は上房に入つて月娘に此事を話し

『誰れだか知らないが不都合な奴だ。早速此處へ連れて來てウンこ懲らしめてやるが可い』

小玉は側から

『けふ台所に出てゐたのは慥か蕙祥だと思ひます』

そこで月娘は蕙祥を喚び寄せた。蕙祥は院子に跪いて答へた。

『恰度あの時御飯を爨いたり、大妗子の素菜を作つたり、私しは全く手を放すことが出來なかつ

たのです。それで少しはお茶が冷めてゐたかもしれません』

月娘は二つ三つ小言をいつて蕙祥をゆるし、今後前廳に客が來た時、玉簫蕙蓮が茶を作る事、又家内の茶は台所で作る事を命じた。

蕙祥は無念の齒咬みをなし一旦台所に退いたが、やがて西門慶が外出したのを見澄まし、イキナリ奥庭に跳び出して蕙蓮に食つてかゝつた。

『やい淫婦、お前は奥附になつて、ときよ時節と納つてゐるが、元を糺せば私しと同じ飯釜ぢやないか。それを俄にお部屋樣氣取りでわざ〳〵私しの名指しで茶を持つて來いの何んのとぬかすが、好く考へて御覽なさい。私しもお前も一つ鍬の上の土から出た人間だ。機織蟲は疣蛙の肉を食はないとさ。よしんばお前がお部屋樣に出世したからとて私しはビクともする人間ぢやないよ』

蕙蓮は澄して

『叱られたのはお前の麁相だ。それを私しに食つてかゝるとはをかしいね』

蕙祥はセキ込み

『フン私しの麁相も無いもんだ。お前が餘計な指圖をするから飛んだトバチリがこッちへ來たのだよ。あの蔡家でサンザふしだらな眞似をしやがつて、追ん出されて來て、此處でも矢張り惡さをするのかい』

『惡さをするとは誰れの事だい。そういふお前さんこそ餘り清淨潔白でもなさそうだね』

『はいそうで御座いましようとも。御亭主が外へ出て小米の粒を拾つてゐるのに、蔭へ廻つて好い事をしてゐやがる。』

『私しが蔭で何をしました。奥さんを初め誰れ一人お前さんに氣をゆるす人はないよ』

『どういふわけで氣がゆるせないの。自分の穢い根性で人を測量したつて、こちらはビクともしませんよ』

『そのビクともしないのが第一の證據ですよ。蔭にレッキとした尻押しがあるからさ』

二人は口角沫を飛ばして惡口のはたし合ひをした。小玉の報らせに依つて月娘が出て來た時にはもう互に惡口の種が盡きて今や攫みかゝらふとしてゐた。

此事あつて以來蕙蓮は益々西門慶に媚び、家中の大小に對して横着な振舞をなし、常に玉樓金

蓮、李瓶兒、西門大姐と一處になつて遊んでゐた。

其日馮媽媽は約束通り女中を連れて來た。年は僅に十二歲で、物の役にも立つべくとも見ゑなかつたが、李嬌兒は別に苦情も言はず、五兩で買つて侍女とした。

譯餘閑談

〔走百病〕北京では元宵の夜に婦女外出して遊び、正陽門の釘を模すと病氣に罹らぬといふ迷信がある。荊楚歲時記に燕城正月十六日婦女羣遊し內一人香を持つて先導し人を避く。橋に至る每に一同手を引いて渡る。

〔韓回子〕回子は回々敎徒である。

〔院子〕院子は邸內の空地である。支那家屋の構造は一區劃の壁內に家屋を桁のやうに奥へ奥へと並べ建てゝある。故に一家屋ある每に一院子がある。即ち院子の前後は母屋若しくは門で左

右は東廂西廂或は單に壁、廊下を以て圍んである。從つて院子は方形で地上に石瓦を敷いてある之れをまた天井ともいふ。

〔酒の小買〕この時代でも酒に交ぜ物をしてゐたのである。水酒(スイチユ)(蒸溜せぬ酒)は罈の蓋を開けると酸敗し易いから少量の石炭を加へて攪拌し味を中和し汚物を沈澱する。其他毒草など加へて酒の味を好くする方法があるさうだ。

〔馬台〕好く解らぬが、馬を乘り出す便に作つた床板だらうと思はるゝ。

〔緣閃〕閃は光澤ある物を言ふ。

〔披襖子〕外部に川ゆる冬の着物。當時は對襟である。又別にマントのようなものを披といふ

〔入難〕入難は佛弟子阿難のことか。或は觀音入難といふ像があるものか、詳かならず

〔雪花燈〕燈明皿である。ガラス六角蓋でもかぶせたものならんか。

〔春臺〕テーブルに赤い布を敷き、緣喜を取つた飾物を置く。例令ば柏の技に乾柹を挿し大蜜柑を台にする。これを百事大吉(パースーダーチー)といふ。即ち柏柹大橘也(パースーダーチー)。又處に依つては笊に米を盛り、松の

技を挿す。

〔關聖賢〕關帝像

〔都監〕官名、宋、兵馬都監を置く。本路、禁旅、屯戍、邊防、訓練の政令を分掌し所部を肅清す云々

〔打瓜子〕西瓜子を攫んで數を當てるのである、

二一五

偖て元宵節はきのふと過ぎ去り早くも淸明の頃となつた。或日西門慶が外出した折。月娘は花園内に新設した鞦韆架の下に姊妹を集めて嬉遊した。

月娘は先づ玉樓と共に試乘し、次に李嬌兒に勸めたが、彼女は身體が重いと言つて辭退した。そこで金蓮、李瓶兒、玉樓が代る〴〵二人組で乘り、蕙蓮と春梅が其後押をして彈みをつけた。

金蓮が頻りに笑つたので月娘は注意し、

『お前さん、笑つてはいけません。笑ふと落ちますよ』

と言つた時、金蓮は忽ち足を滑らして身を宙に浮かした。同乘してゐた玉樓はスグ振りを止めたので危く落ちずに濟んだ。李嬌兒はいふ。

『鞦韆に乘る時には決して笑つてはいけません。笑ふと腿が軟くなり足を取られます。先年隣の

周臺宮の小姐（ショーチー）が、三月の佳節に花園内で三四人の子供を相手に鞦韆に乘つて遊んでゐました。その時小姐は笑つて滑り落ち畫板の上に馬騎りとなりました。後日嫁入りした時、此兒は處女でない、と言ふ事で逐ひ返へされました』

金蓮は平氣の平座で益々笑ひこけ

『今のは全く孟三兒の振り方が惡かつたのです。今度は大丈夫、六娘と一處に乘りましよう』

と負惜しみを言つてゐる處へ陳敬濟が來た。

『お前さん、好い處へ來た。二人が乘るから押してやつて下さいよ』

と月娘は言ふ。敬濟は笑つて

『老和尚は旨く鐘が突けるかしら』

と裾を撩げて進み寄つた。

『五娘しつかり綱を握つてゐないと危ぶないよ。今に中空に飛ばせるから』

李瓶兒　鞦韆の上から叫んだ

『駄目ですよ。开んな力では。もつとウンと押して頂戴よ』
『なんてセッカチな人達だらう。今にウンと彈みをつけて困らせてやるから』
その中鞦韆はだん／＼高く揚つた。李瓶兒は裙のパッと開いて大紅の褲子は花蕊のように現れた。李瓶兒はハヽと喘いで
『私しは足に力が無くなつた。少しゆるめて頂戴』
と叫んだ。
『それ御覽なさい。貴方がたは酒は好きだが澤山飲めないようなものだ』
二人が下りて來たので春梅と西門大姐が一組となつて乘り、次に玉簫と蕙蓮が一組となつて乘つた。蕙蓮は人の後押を待たず自分で空中に振上げ、忽ち地上を掠めるかと思ふと忽ち高く空に揚がり一同を感嘆させた。
それは偖て置き來旺兒は漸く注文の品物が出來上つたので、これを大小の箱籠に詰めて船に載せ、自分は一足先きに歸つて來た。先づ門内で手荷物を卸し堂屋の前まで來ると、そこで雪娥と

行き逢つた。雪娥は滿面に笑みを浮べ
『おやお歸りでしたか。大分日に燒けて眞黑におなりだが慥かに前より肥りましたよ』
『旦那や奧さんは』
『旦那はけさ早く應二爹に誘はれて郊外へ出て行きました。奧さんは只今皆さんと御一處に花園内でブランコして遊んで被在います』
『こいつは又珍しい話を聞くものだね』
雪娥は一碗の茶を作つて出し
『あの御飯は未だでしよう』
『ゑゝ未だですが、部屋に入つて顏を洗つてからゆつくり食べる積りです。それはそうと媳の奴は台所にゐないが何處へ行きました』
雪娥は冷やかに笑つて
『そう言つちや惡いかもしれないが、おかみさんは近頃俄にハイカラになりましてね。毎日奧さ

ん方のお側で棋を打つたりナンコをしたり骨牌を取つたり、あれでも中々急がしう御座いますよごうして台所などへ顔出しする暇があるものですか』

月娘は小玉の報らせにより上房に戻つて來た。來旺は先づ叩頭して傍に立つた。月娘は旅の勞苦を犒らひ乍ら二瓶の酒をつけさせた。そこへ蕙蓮が來たので

『お前さん方は部屋に行つてゆつくりお休みなさい。且那が歸つたら報らせてやるから』

と申渡した。やがて二人は此處を辭し去り蕙蓮は鑰を出して部屋の戸を開け、先づ洗面湯を汲んで中に香水をチョと灌いだ。

『お前さんは僅かの間に見違へるように肥つたよ、そうして隨分黑くおなりだね』

と蕙蓮はにこやかに笑つて來旺の搭連を取り、着物を着換へさせ飯を出して食はせ、そうして暫く休んだ。日暮れ頃西門慶は歸宅したので、來旺は急いで起き上り彼の前に出て、杭州で製織中の蔡太師誕生服の材料、及び家中衣服の材料等首尾好く出來上つた事、これを梱包して四つの箱に入れ、官船に載せて既に城外まで送り込んだ事、只稅金と傭夫の賃銀が未拂であることなど

語つた。西門慶は喜んで入費を出し別に慰勞金として銀五兩を彼に與へた。

來旺は歸途多少の土産物を用意して來た。先づ二枚の綾織汗巾と二雙の裝花膝褲（ツアンホワシークー）と、四箱の杭州白粉と胭脂二十個とを出してそつと孫雪娥に渡した。雪娥は嬉しそうに之れを受取り、四個月間の出來事を洗ひ浚ひ喋舌り立てた。例令ば蕙蓮は玉簫の手引で西門慶に通じ、初じめ山洞で密會したが後には金蓮の庇護で毎日大ビラにふざけてゐる事、着物や首飾や簪の外、澤山の小遣錢を貰ひ毎日門前に出て種々の買物をなし、少くも二三匁の銀を日々に浪費してゐる事を語つた

來旺はいふ。

『道理で彼奴の身裝りが俄に立派になつた。だが私しが聞いた時には奥さんから頂戴したと言つてゐましたぜ』

雪娥は冷やかに笑つて

『そう言ふのは無理もありません。奥さんから貰ふも旦那さんから貰ふも同じわけですからね』

來旺は此話をじつと胸に收めてゐたが、夕方酒を飲んで醉が廻ると共に腹が立つて堪らなくな

り、遂に立つて衣箱の蓋を開け
『おや大したものが内にあるね。俺れは今迄氣付かなかつたが此藍緞子は誰から貰つた』
蕙蓮はホヽと笑つて
『お前さん、又そんな事を聞くの。私しの着物がないのを見て奥で下すつたのですよ。だが縫つてる暇もないので放つて置いたのさ。誰れが私しにタヾ呉れる人がありますか』
『フムなるほどタヾは呉れなからう。そうして此簪は誰れに貰つた』
『石の隙間から水が飛び出しやしまいし、何も那んなに不思議がるにも當りますまい。誰れでも親戚といふものがありますよ。これは叔母さんから借りて來ました』
來旺はカツとしていきなり一つ蕙蓮を打つた。
『おのれ淫婦、胡麻化そうと思つてもこちらはチヤンと知つてるぞ。キサマは俺れの留守中よくも狗や豚の眞似をしやがつたな。あの玉簫の畜生が手引で緞子を貰ひ、花園内で或る男と密會したのは誰れだ。あの潘淫婦の袖の下に匿れて毎日乳繰合つてるのは誰れだ。さあ有體に白狀し

ろ。包み隱しをするこ縊め殺して仕舞ふぞ』

蕙蓮は大聲上げて哭いた。

『この野郎、歸り早々なぜ私しを打つた。私しがいつ、ごんな惡い事をしたの。出鱈目も好い加減にしてお呉れ。投げた瓦にや行方があるよ。屹度何處かのお喋舌りが嘘八百並べ立てお前をつツついたんだらうが、憚り乍ら此奥樣は开んな女こ女が違ひますよ。私しは死んでも浮かばれない。何んの因果で恁んな目に遭ふのだらう。ゑゝ悔しい。此馬鹿野郎、好く考へて見ろ。宋家のおやぢが足を上げたからこて宋字を名乘る者が皆倒れるかね。風は二方には吹かないよ。何事も眞實を突留めるのが肝腎さ。お前さんは人殺しをしろこ言はれたら人殺しをするかね』

この一言で來旺は全く沈默して仕舞つた。蕙蓮はこゝぞこ喋り續けた。

『お前さん、藍緞子の事が开んなに氣に懸るなら私しが能く言つて聞かせて上げよう。忘れもしない去年の十一月三娘の誕生日に、私しは上に紫の襖子を着て下に玉簫の裙子を借りて穿いたのさ。するこ媳婦、お前は丸で化物のようだ。見つこもないから一つ作つてやらうこ、言つて下

すつたのが此藍緞子さ。それを疑つて彼れ此れ言つて、若しあちらの耳に這入つて御覧なさい。お前さん、スグ首になつて仕舞ふよ』

來旺はスツカリ征服された態ちで

『お前が悪い事をしなければそれで好いのさ。俺れは怒りやしない。あゝ睡くなつた。蒲團を敷いて呉れ』

蕙蓮は蒲團を敷き乍ら呟いた。

『本統に馬鹿にしてるよ。一杯機嫌で言ひたいことを言つて、人に腹を立たさせてさ。黄湯(ワンタン)を飲むとこれだから否やだ。これからチト氣を付けて下さい』

來旺は默つて床に入り、横になるとスグ雷のような鼾を立てた。

大凡そ色男を拵へるような細君は、用心堅固で口先きが上手で斯う言へばあゝ言ひ、結局なるほどゝ思はせるように辻褄を合はせる。即ち便所の磚(しきかわら)臭くて硬いとは此事だ。

蕙蓮は早くも此事を來旺が知つてゐたので不審を起し、誰れが洩したらう、と翌日玉簫に訊い

てみたがわからなかつた。

或日月娘は何か雪娥に用があつた。そこで小玉は後邊を喚び廻した後ち、前邊に來てみると雪娥はひよつこり來旺の部屋から出で來た。小玉は彼女が蕙蓮と話をしてゐたものと思つて別に氣にも止めず、其まゝ台所に來てみるとそこに蕙蓮は肉を切つてゐた。折しも前廳に客があつて來旺は主人に喚ばれて、已が部屋を出た。それを又小玉がチラと見たので雪娥が來旺に内通してゐることがわかつた。

來旺はその日又醉拂つて西門慶と潘金蓮を怨み罵つた。彼は今度の事を一々並べ立てた上、金蓮の舊惡を數へいづれ此まゝにしては置けぬ。白刀を以て進み紅刀を以て出づる時があるぞと獨り怒鳴つた。通りかゝつた來興兒は近頃少し來旺に恨みがあるので、好い事を聞いたとばかり直に金蓮に密告した。金蓮はサッと顏を赤め齒咬みをなして噴つた。

『馬鹿々々しい。まあ呆れた奴だ。彼奴の主人が彼奴の嬶を用ゐたからとて、私に何の怨があるのだらう。开んな事で一々殺すの何んのと言はれたらやりきれない。畜生覺ねてゐるやがれ。手前

の主人の耳に這入つたら命が無いぞ』

と言ひ乍ら來興に對ひ

『お前さんからヂカに此事を旦那に話すが可い』

『へゝゝゝ五娘の前ですが、それはチトどうも出來兼ねます。旦那が若し恁ういふ噂があるが本當かとお訊きになつたら、私しはありのまゝ申上げます』

と答へて來興はやがて立去つた。玉樓は眞靑な顏して側に聞いてゐたが此時漸く口を開いて

『旦那が蕙蓮に手を着けたといふのは本統ですか』

と訊いた。金蓮はありし次第を殘らず語り

『全く靴に右左がないとは此事ですよ。主人は彼奴の嬶を奪り、彼奴は主人の妾を盜み丸で着物を交換したようなわけさ。でなければこんなに早く彼奴の耳に入るわけはありません。外に誰れも喋る者はないからね』

と暗に雪娥と來旺の關係を語つた。玉樓は呆れ返り

『これは旦那に是非報らせなければいけません。奥さんでは納まりがつかない。萬一ひよつこした間違ひが出來て御覽なさい。取返へしがつきやしません』

『そうですとも、今彼奴を僥せば此方がやられて仕舞ひます』

と金蓮は言つた。その晩金蓮は西門慶が部屋に入るのを待ち兼ねて此事を語つた。西門慶は驚いて

『一體彼奴は誰れと首尾を通じてゐるのだ』

『それは小玉に聞くと能くわかります。そうして又憖んな事も言つてゐたそうです。私しが先夫を殺して此處に來た事を武二郎が訴に出たので危く曝れそうになつたが、それを彼奴が東京へ行つて運動したからこそ私しの命が助つたのだ。言はゞ命の親だなどゝ世間に言ひ布らしてゐるそうです。私しに子供が無いから好いようなものゝ若し子供でもあつて御覽なさい。彼奴に幵んな事を言はれたら第一貴方の恥ぢやありませんか。』

これを聞いた西門慶はスグサマ前邊に行つて先づ來興に糺し、次に後邊に來て小玉に糺してみ

ると金蓮の言葉に寸分相違がないので、イキナリ台所に飛び込み雪娥を毆つたが、月娘に引留められ、充分腹癒せすることが出來ず、悔し紛れにその頭飾と衣服を引剝がした上、家人の媳婦に監視させて一切他人と會談することを禁じた。

やがて西門慶は玉簫をやつて蕙蓮を喚び寄せ、この事に就いて尙ほ詳しく問ひ糺した。蕙蓮は喫驚したような顔して

『あらまあ呆れた。开んな事は夢にも無い事ですよ。私しは請合ひます。彼奴はふだん酒癖が惡く、酒を飮むと大膽になつて上下の見境がなく、時によると隨分且那の惡口も言ひますがね。惡氣は更に無いのですよ。紂王の水を飮んでゐる人が紂王の無道を說けば早速御扶持の召上げですもの、一體誰れがそんな事を言つたのです。包まず話して下さい。少し思ひ當る事もありますから』

西門慶は暫く默つてゐたが、再三問はれるので已むなく來興の口から出たことを語つた。蕙蓮はホヽと笑つて

『あゝそれでわかりました。近頃旦那が買辦の仕事を來興の手から來旺に移したので、來興は金儲の蔓を失ひ、口から血を吹き出すほど怨めしく思つてをります。那んな話を一々取上げたら大變な間違が出來ます。旦那どうぞ内の人を信じて下さい。内の人が若し惡い心を起したら第一私しが饒しません。何しろ家中で恁ういふゴタ〳〵が起るのは好くない事ですから、此際いつそ内の人を遠方へ出して商賣させ、なるたけ旅で暮させるようにして置く方が好う御座います。そうすれば旦那も私しもごのぐらゐ氣が樂だかしれません』

西門慶は一寸考へた。けふ晝頃來た客は揚州鹽商王四峯の身内の者で、主人が按撫使に告發され監獄に送られたので銀二千兩を以て蔡太師を買收し釋放されん事を賴みに來た。又蔡太師には誕辰の贈物もあるので何れにしても東京に用がある。早速來旺を遣はさふと思案を定め

『それは好い思付だ幸ひ今二千兩の銀と蟒袍を是非東京に送らねばならぬ用事がある。實は來保を出さうと思つてゐたが、お前がそういふのなら來旺をやらう。そうして歸つて來たら又銀一千兩を携帶させ杭州に遣はし、紬絹絲綿の類を仕入れて商賣をさせよう。お前はどう思ふ』

蕙蓮は嬉しく人無き折こて西門慶に抱きつき

『旦那、本統にそうして頂戴よ』

こ甘垂れてキスした。

『こないだ貴方は鬏髻に結つても可いこ被仰つたが、其後何の音沙汰もなし。今髪を飾らないこ飾る時がありません。默つて待つてゐたらいつの事やら、其うち頭が禿げて仕舞ひます』

『ウムよし〳〵俺れはあした銀匠へ行つて銀八兩の頭の物を買つてやらう。だが大娘に見られるこチト困るね』

『構ひませんよ。私しは叔母から借りて來たこ言ひますから』

次の日西門慶は廳上に坐して來旺を喚び、明三月二十八日東京へ向け出發すべく命じ、尙ほ歸宅後は杭州へ行つて品物を仕入れ、商賣させるこことなご語つた。來旺は喜んで承諾し部屋に戻つて旅の仕度を初めた。

金蓮は來興から此話を聞いて早速花園に出て來た。捲棚の內では陳敬濟が銀を封じてゐた。

『お父さんは何處へ行つたの』
『おやぢは今、大娘の處へ王四峯の銀を取りにゆきました』
『それは何』
『これは蔡太師の禮物です』
『誰れが向ふへ持つてゆくの』
『きのふ來旺にいひつけてゐました』
金蓮は默つてその邊をぶら〳〵歩き出した。そうして西門慶の來るのを待つてゐた。やがて花園の細道に入ると、銀錠を重たげイ提げた西門慶に行き逢つた。
『一寸話があるから來て下さい』
と金蓮は西門慶を已が部屋に引入れ、彼の口から來旺の東京行を確かめた後ち
『それはいけません。彼奴の變心は今に初まつたわけではありません。彼奴は嫖ぐるになつて貴方を哄してゐるのです、今それを持たせてやつたら何處へ行つて仕舞ふかわかりません。二千

兩といふ大金を辨償するのは大變ぢやありませんか。彼奴は家へ置いても駄目、外へ出して仕入物をさせても駄目、家へ置けば隙を狙つて屹度何か惡さをします。外へ出せば本錢を使ひ込んで仕舞ひます、貴方に弱味があるからどんな事をされても何とも言ふことが出來ません。若し蕙蓮を是非とも側へ置きたければ彼奴を追拂つて仕舞ふのです。そうすれば貴方は澄してゐても蕙蓮は心を籠めて盡します』

そう言はれて西門慶は大に目が覺めた。丸で酒の醉が醒めたように。

譯餘閒談

〔鞦韆〕古今藝術圖に云、鞦韆は本、山戎の戲なり、齊桓公北伐して此戲始めて中國に傳はる(山戎は亦北戎といふ。春秋時代今の直隷遷安縣に居る)漢唐以來宮中の遊戲となり、初じめ千秋と稱す、乃ち漢宮祝壽の詞を以て名とした。後ち顚倒して秋千となり、又轉じて鞦韆といふ。唐

玄宗これを半仙戲と呼びなす云々と。運動不足の宮女にこれを配てがつたのは妙案である。又蹴鞠は黄帝作る。戲を以て武を練ると好一對である。支那でも昔は運動に注意した。周台官小姐云々といふ李嬌兒の話は小姐が書板の上に滑り落ち處女膜を破つたのである。

〔小姐〕　小姐大姐當時いづれもお孃さんといふ意であるが年齢の相違で區別したものと見ゐる後ち小を尊び大を卑しみ、小姐を令孃とし大姐を女中とした。

〔老和尚〕　老和尚が鐘を突き兼ねる云々は猥褻の意味ある洒落である。

〔搭連〕　搭連は日本でいふドーランである。

〔汗巾〕　ハンケチ

〔裝花〕　花は模樣といふ意味である。膝袴は上卷に說明せり

〔下落〕　下落といふ言葉は日下行方不明、手繋りなしなどゝいふ場合に用ゐてゐる。投げた瓦は必ず下に落ちるものである。故に必ず形跡があるのである。

〔乾淨地方〕　極樂淨土の意ならん、

〔黄湯〕　梁鉅曰く『今人酒を嗜む者これを稱して天祿となす。飲を憎む者これを呼んで黄湯といふ』云々と

〔白刀紅刀〕　白刀を以て進み紅刀を以て出づは刀の錆にしてやるぞと同じ意味である。一寸奇麗な言葉である。

〔靴の右左〕　靴には必ず右左があるものである。然るに右左無しとはケシからん譯けだ。二人の男が一人の女に關係することと靴兄弟といふ。同じ意味である。

〔揭條〕　揭條は揭示であるが此處では言ひ布らすといふ意

着物の交換　即ち細君の交換である。

〔買辦〕　此買辦は一家の日々の菜及び食料品を買ひ入れる役である。主人は之れが役徳の多い仕事と公然見做してゐる。下人が主人の買物で私腹を肥やすことは當前の事になつてゐるらしい。

〔做買賣〕　遠方の品物の仕入を委任されることは下人として大に慢りであらうが、實際は間に這入つて口錢を取る物質上の喜びがある。これも主人が知つてゐてわざと儲けさせる。一つは交

通不便であり、盗難があり種々の困難があるから主人もその勞苦を稿らふ積りであらう。

〔髻〕昔は階級が八釜しかつたので主人と女中こ各別の髻を結つた。蕙蓮は下人の妻であるから西門慶の妾こは自ら別種の髻を結つてゐたのである。假に主人側を大束ね髻とする女中側は小束ね髻である。

〔窩主〕窩主は法律用語で盗賊及び贓物を匿まふ意である。此處では金蓮の庇護の下に蕙蓮は主人こ密會したので金蓮が即ち窩主である

二一六

來旺は翌朝早く起きて旅仕度をして待つてゐたが、一向沙汰がない。晝頃になつて漸く主人に喚ばれて行つて見るこ

『ゆうべ能く考へてみたが、お前は旅の勞れもあるから暫く靜養するが可い。東京へは來保をやるここにした。いづれ新店を出すからお前にその監督をさせる積りだ』

と言はれて來旺は全く當てが脫れたが仰せ御尤もこ引下つた。西門慶は直に來保を喚んで銀兩と書狀を渡し三月二十八日吳主官同道で東京へ向け出發させた。これを見た來旺は不平で堪らず其夜又大に飮んで、西門慶を殺してやるぞこ力んだ。蕙蓮は慌てゝ口を抑へ

『お前さん本當に馬鹿だよ。人を咬む狗は齒を露さずこいふぢやないか。牆に隙あり壁に耳あり醉に乘じて滅多な事をお言ひでないよ』

次の口蕙蓮は玉簫に賴んで西門慶を炊事場の後ろに喚び出した。玉簫は裏門の前に見張つてゐる。蕙蓮は怨めしげに西門慶の顏を見て

『內の人を東京へやる、とあれほど確い約束をしたのになぜ的を變へてほかの人をやつたのです貴方は恰度毬のやうな人だよ。上へ飛んだり下へ落ちたりいつも心が定まらない。あした早速燈芯の棋杆を廟に立て神樣を胡麻化しなさい。私しはもう決して信じません。今度の事でスッカリ貴方の心が讀めた』

西門慶は笑つて

『お前、それは勘ちがひだ。俺れは何もあの男を嫌つて使をさせないのではない。來旺は蔡太師の府中の事に闇いから、いつそ熟れてゐる來保の方が好からうと思つて代らせたわけさ。まあ旅の勞れもある。四五日ゆつくり休むが可い。いづれそのうち商賣させるよ』

『何の商賣です』

『新規に酒店を開いてあの男に支配させようと思ふ』

蕙蓮は喜んで立去つた。

或日來旺は喚ばれて前廳に來てみると廳内の桌上に六封の銀を置き西門慶はその前に坐してゐる。

『こないだ杭州から歸つて來たばかりのお前を、又遠方へ使に出すのも氣の毒だと思つて今度の東京行は來保に代らせたわけだ。决して惡く取つて呉れるなよ。偖て爰に六封三百兩の銀があるけふこれをお前に渡すから門前で酒屋を開き商賣を勵んで呉れ。俺れは月々いくらかの利息を貰ひさへすればそれで可い。萬事お前に任せる』

來旺は慌てゝ地に突く這ひ、頭を叩いてお禮を申上げ、いそ〳〵部屋に戻つて來た。

『旦那が俺れに酒屋を出せと言つて三百兩呉れたよ』

と來旺は嬉しさうに蕙蓮に語つた。

『そら御覧なさい。今更私しに文句が言へますか。一の鍬で井戸を掘るには氣永にやらなくては駄目です。これから眞面目に勉强して醉拂つて管らぬ事を言はぬようにして下さい』

來旺は一言も無く銀を出して妻に渡し箱の中に藏めた。やがて彼は番頭を雇ふべく外出し、或る男と相談してみたが話が折り合はないので夕方大醉して歸つて來た。蕙蓮はボロを出されては大變と好加減にあしらつて寐床に入れ、兎や角うしてゐる中に玉簫が來たので後方に出て行つた一寐入りして目を醒ました來旺は未だ全く酒が醒めないのでウト〳〵してゐると忽ち窓外で人の聲がした。

『もし〳〵來旺さん。早く起きて庭の裏へ行つて御覽なさい。おかみさんはお前の寐てゐるのを幸に氣をゆるして惡さをしてゐます』

といはれて來旺はあたりを見廻すと、雪娥がコッソリ報らせに來たらしく部屋には蕙蓮の影さへ見はない。來旺はムッとして飛び起き、前後の思慮もなく花園内に駈けつけ、角門の前まで來ると忽ち一脚の腰掛が倉闇から飛んで來て一本の刀がガチャリと足許に落ちた。同時に四五人の小廝がバラ〳〵と現はれ

『泥棒』

と叫びつゝ來旺を引据ゑた。
『私しは來旺です。泥棒ではありません。媳の行方を捜しに來たのです』
と言つたが彼等は耳にも入れず一歩々々打擲して大廳の前に引いて來た。そこには燈燭がアカ〱と灯され正面に西門慶が事ありげに坐つてゐる。來旺は地に跪いて
『私しは只今寐てをりましたが媳の姿が見ゑないので何處へ行つたものかと捜してゐたので御座います。泥棒などゝ言はれる覺ゑは更に御座いません』
こ辯解した時、側にゐた來興兒は主人の前にづか〱と進んで、默つて刀を渡した。西門慶はこれを見て烈火のように怒り
『獸は度し易く人間は度し難い、とはキサマの事だ。三百兩の本錢を吳れて商賣することを不滿に思ふか。何故深夜刃物を持つて庭內へ忍び入り此方の寐首を搔かふこしたか』
こ言ひ乍ら一方小廝に對つて
『彼奴に預けて置いた三百兩の金を即刻此處へ持つて來い』

と命じた。蕙蓮は玉簫と話をしてゐたが、斯くと聞いて喫驚りし、急ぎ己れの部屋に來て
『まあお前さん、本統に馬鹿な事をしてお呉れだ。醉拂つた時は大人しく寐てゐれば可いのに私しを探ねて何の用があるのだらう。人の計略に乘せられてさ』
と聲を上げて哭いたが、偖て愚圖々々してゐるわけにもゆかないので、早速箱を開けて六封の銀を出し、使と共に前廳へ來た。西門慶は銀を受取り燈火の下で一々封を切つてみると一封丈けは慥かに銀だがあとは皆錫や鉛だ。そこで益々憤り
『己れ、銀をスリ換へて何處へ持つて行つた。サア包まず白狀しろ』
と怒鳴つた。來旺は泣いて訴へた。
『私しは旦那樣のお引立を受け、今度商賣することを心から嬉しく思つてをりますのに。銀をスリかへるなんて开んな道理は御座いません』
『フン刀を買つて主人を殺さふとする奴が本統の事を申すわけはない。來興、此處へ出て其方の見聞を申せ』

来興兒は主人の前に跪き

『此奴は毎日部屋の内に引込んで二口目には旦那を殺すと言つてをりました。商賣をさせないのを酷く怨んでをりました』

『ウムそれでスツカリ解つた。証據物件としては刀がある。証人として來興がある。明日訴狀を書いて提刑所に引渡すから、逃げないように此奴を部屋の内に閉ぢ籠めて置け』

來旺は餘りの事に開いた口が塞がらない。此時蕙蓮は廳に上つて西門慶の前に跪き

『旦那、それは本氣の沙汰で御座いますか。彼奴は私しを捜す積りで花園内に這入つたので、泥棒などゝは思ひも依らぬ事で御座います。又此六封の銀は私しがチャンと預つて置いたので原封のまゝ少しも手を着けません。それをスリかへるなどゝは滅相な事で御座います。人を活埋めにするには天理に據らなければなりません。旦那はごういふわけで彼奴を提刑所に送るので御座います』

蕙蓮の顏を見た西門慶は急にニコ〳〵して

『お前さんの知つたことでないから、其處を立ちなさい。彼奴の大膽無禮は今に初まつたことではない。始終刀を身につけて俺れを覘つてゐるのだ。お前は決して心配せんでも可い。お前の身の上に就いては俺れが好いように取斗らつてやる。おい來安、蕙蓮を部屋まで送つてやつて吳れ』

と言葉靜かに慰めたが、蕙蓮はいつかな背かず、尙ほ跪いて

『旦那、それはあんまりで御座います。坊主の面を見ないで佛の顏を見て下さい。旦那、これほどまで申上げてもお取上げがないので御座いますか。彼奴は酒こそ飲みますが、人殺しの泥棒のこ开んな事を言はれるわけはありません』

と執念く附き纏はれて、西門慶は遂に氣色を惡くした。そこで來安は蕙蓮を引立て、否應なしに彼女を部屋に押し籠めた。

夜が明けてから西門慶は訴狀を認ため、來旺を提刑所に突出すばかりとなつた時、月娘は前廳に馳け付け

『家僕の罪は內輪で處分おしなさいよ。表沙汰にすると主人が笑はれるぢやありませんか』

と諫めたが

『默れ、女の知つたことぢやないぞ。事人命に關する重大問題だ。それこもお前は俺れが殺されても彼奴を饒す氣か』

こ言ひ乍ら西門慶は、目を瞋らせて家僕を叱し、何の容赦もなく來旺を提刑所に送らせた。月娘は顔を赤めて引下りすごく〳〵奥の部屋に來た。そこには玉樓その他の人が詰めてゐた。

『家の內は丸で亂世です。屹度何處かに九尾の狐が潛んでゐて業をしてゐるのでしよう。罪の無い小厮に罪を作つて提刑所に送るなんて誰れのサシガネでしよう。丸切り理窟のわからない殿樣ですからね。紙の棺桶に糊張の人形を入れて葬式を出すようなものです』

こ月娘は頗る不平らしい樣子である。蕙蓮はその前に跪いてよゝこばかりに泣き沈んだ。月娘は慰めて

『お前さん。そうやつて泣いてゐても仕樣がないよ。旦那は迷魂湯を食べたのだから、人のいふ事は中々耳に這入りません。お前の亭主は死刑にはなるまいが、屹度軍隊に入れられて遠方に逐

ひやられるよ』

玉樓も亦側から慰め

『旦那は今怒つてゐるから何を言つても受附けないが、いづれ折を見て好く話して上げよう。お前さんは心配しないで部屋に引込んでおいでなさい』

其日來旺は提刑所で取調べを受けた。夏提刑賀千戸は旣に西門慶から白米一百石の禮物を受けてゐたので、訴狀に依つて型の如く訊問し、西門慶、宋蕙蓮姦通云々に關する來旺の申立てを無下に退け、却つて二十大棍を喰らはせて收監した。斯くと聞いた西門慶は家人を戒めて一切の差入物を禁じ、又蕙蓮には來旺の消息を程好く傳へさせ、彼は衙門內に在つて拷問を受けず數日後には放免さるべしなど好加減な氣休めを言つて聞かせた。だが蕙蓮はこれを信ぜず、以來部屋に閉ぢ籠つて顏も洗はず飯も食はず哭いて幾日を過ごした。西門慶は流石に心配して玉簫と賁四の妻を遣はし

『あの人は醉拂つて亂暴な事を言ふから、懲しめのため向ふへやられたのです。そのうち屹度放

免されます』

と慰めたが、蕙蓮は容易に信ぜず、竊に來安に賴んで差入物をなし樣子を探らせた。來安は主命があるので差入物を途中で捨てゝさあらぬ顏して歸つて來た。

『おかみさん、心配しなさんな。アニキは未だ一度も打たれません。一兩日中には歸宅を許されます』

と言はれて漸く安心し、化粧などしてそろ〳〵部屋の外に出るようになつた。或時西門慶は外から歸つて來ると蕙蓮は簷下に立つて手招いた。

『旦那、一寸來て下さい。部屋には誰れもをりませんから』

西門慶は部屋に入つて坐し

『あの事に就いてお前も大分心配してゐるようだが、俺れは手紙を出して置いたから何れ赦されるよ。まあも少しの辛棒だ。歸つて來たら早速商賣させよう』

蕙蓮は西門慶のうなぢを抱き

『どうぞ是非そうして下さいな。彼奴が今度歸つて來たら誓つて酒を斷ち商賣を勵まし、遠方にやらうと內へ置かふと貴方の御考へ一つです。若しおいやでなかつたら彼奴に一人の嬶を配てがつて、私しは貴方のお側に置いて下さいな』

『あゝ好いとも。俺れはあした喬家の持家を買つて、お前達夫婦を住ませ、時々行つてゆつくり遊びましよう。幸ひ其家は店の前で部屋は三間あるし何かにつけて便利だ』

『そうなつたら嬉しいわ。私しや今本統に肩身が狹う御座います。』

と蕙蓮は笑みを含んで立上り門扉を閉めた。折しも立夏を過ぎて天氣は俄に蒸し熱くなり、蕙蓮は裙子の下に褲子を穿いてゐなかつたのを、西門慶はチラと見付け、忽ち傘のお化けを擴げたので、恰も甄妃の玉を露はし漢署の香を點ずるも斯くやといふ有様となつた。

蕙蓮はその日奧へ來て俄にハシヤギ出したので玉樓は怪しと睨み、內々女中に探らせてみると前記の次第が判明したので早速金蓮に此事を告げ、金蓮は其晩西門慶が敬濟に示談書を書かせてゐるところへ躍り込み、毒辯を振つて全く蕙蓮の希望を覆へした。それがため來旺は謀殺未遂竊

盗犯で原籍徐州へ送還の嚴命が下つた。行くに臨んで衣服破れ、一文の旅費さへないので二人の公送人に哀訴し、主家に立寄り若干の旅費を妻に求めようとしたが取上げられず、已むなく應伯爵を訪ねたが留守をつかはれ、更に隣家賈仁淸、伊勉慈に依つて西門慶に申込まふとしたが小厮の妨害を受けて目的を果さず、遂に蕙蓮の父なる棺桶屋宋仁に泣きついて銀一兩米一斗及び二人の公送人に贈るべき銅錢一吊文を貰ひ受け、四月初旬泣く〳〵淸河縣を離れ徐州大道に向つた。

そうとは知らぬ蕙蓮は毎日夫の放還を待ち詫びてゐたが、或日ふと門前拂ひの一件を耳にし玳安に眞否を糺すと、夫は數日前四十板の笞刑を受けて本縣を追放され原籍徐州へ送還された事がわかつたので、忽ち大聲上げて泣き出し、夫が他人の計畧に乘せられて寃の罪に服したことを怨み旅費もなく衣服もなく追放され、路上生死の程さへ計り難きを憾み、且つ自分は全く缸の底に隔離されてゐたので如何とも詮すべなきことを悔み、數々の繰言を述べ、あらゆる恨みを訴へてゐた。隣室は來昭の部屋で妻の一丈靑は先程から聽耳立てゝゐたが、やがて一聲哭いた後ちハタと靜まり返つたので不審を起し戸を叩いてみたが應へなく、室内は森閑としてゐるので俄に騷ぎ出

し、平安を喚んで戸をコヂ開けてみると蕙蓮は既に門楣の上から帶を吊り身を宙にぶら下げてゐたので仰天し、とりあへず帶を解き、生姜湯など飲ませて應急の手當をした。急を聞きつけ、月娘を初め李嬌兒、孟玉樓、西門大姐、李瓶玉兒、䔥小玉等皆集つて樣子を見、賁四娘、來昭妻一丈靑は只管介抱したので漸く息を吹き返へし、いろ〳〵言ひ慰め炕の上に寐かさうとしたが、蕙蓮は地上に腰を卸したまゝ中々立ち上がらない。そこで賁四娘と玉簫に監視させ一同引上げた時西門慶はそつと這入つて來た。

『なんだなあ、駄々兒みたように好加減に拗ねて置け。地べタに坐つてゐると身體の毒だ。さあ炕の上にあがつて、そうしてゆツくり養生するが可い』

と慰めたが、蕙蓮はかぶりを振つて怨めしげに西門慶を見上げ

『ゑゝ私しは駄々兒です。旦那は好くも私しを瞞しましたね。貴方は人をオモチャにして人を活き埋めにしたのです。毎日返へしてやる返へしてやると言つて好くも彼奴を遠方に逐ひやりましたね。何故私しも一處に逐つ拂はなかつたの』

西門慶は笑つて

『それは俺れの關係したことではない。彼奴は彼奴丈けの罪があつてお上のお判きを受けたのだからごうも仕方がない。併しお前は安心して此處に居れ。末始終面倒見てやる。まあ氣を鎭めて今夜はゆツくり休むが可い。賁四娘、玉簫、お前達は御苦勞だが宜敷相手をしてやつて呉れ。今俺れは酒を持たせて寄越すから、一杯飲んで氣を晴らすが可い』

と言つて立去つた。そこで賁四娘は蕙蓮を炕上に扶け上げ、これ又いろ〳〵言ひ慰めたが、やがて小厮が酒肴を持つて來た時には蕙蓮胸中の怨み再燃し、イキナリ炕を跳び下り、それを投捨てようとしたが、一丈青に引留められて事無く止んだ。此時賁四娘は一丈青に向つて、そつと已が指を咬んでみせた。彼等は唐辛子のような蕙蓮の振舞を見て少からず癪に障つたが何しろ主人お手附の代物だから蟲を殺してチヤホヤし、酒のお招伴せんと坐に着いた時、賁四の長男が馳せ付け、主人が喚んでゐると報らせたので、二人はこれを好い機に立上り、外へ出て恰度行き逢つた西門大姐と來保の妻惠祥の前でいろ〳〵陰口した。跡に殘つた玉簫は尚ほも頻りに蕙蓮を說

得したが頑として應せず、それから引續き飯も食はない。西門慶は心配し金蓮に相談してみたが彼女は冷やかに笑つて

『今時大した貞婦があるものですね』

とテンデ相手にもしない。一方來旺護送の顚末を誰れが蕙蓮に知らせたかと取調べてみると、それは正しく玳安の口から出たことが判明したので西門慶は大怒し、直に懲罰を加へようとした時、玳安は早くも金蓮に泣き付き、其庇護を得て辛くも遁れた。蓋し金蓮は初めから蕙蓮を强敵と睨んで排斥しようと思つてゐたが、西門慶の寵愛を憚つて程好く取りなしてゐたのである。だから今度こそ愈々片附けて仕舞へと意氣込み、先づ雪娥に對ひ

『こないだお前さんが旦那に打たれたのは一體誰れのサシガネだと思ひます。來旺とお前さんが丸で關係したように取沙汰されたのは皆蕙蓮の口から出たのですよ』

と唆かしたので雪娥はすツかり眞に受けて仕舞ひ、スグ其足で蕙蓮を訪ね散々嫌味を並べ立てゝ歸つて來た。四月十八日李嬌兒の誕日に當り、吳月娘は後廳に客を招き、折柄西門慶は外出中

であつたが、蕙蓮は朝からめかし込んでハシャギ廻り夕方部屋に入つて寐た。再三喚んでも出て來ない。雪娥は已れ生意氣な、とばかり蕙蓮を訪ね

『お前さん、勿體ぶるにも程があるよ。あれほど喚んでなぜ來ないの。箱入娘でもあるまいし』

と怒鳴つたが、蕙蓮は空寐入りして返詞もしない。雪娥は益々毒氣を吹つ掛け

『もしおかみさん、お前は來旺哥に戀ひ焦れておいでだらうが、今更あの人を喚び戾すことも出來ず、又自分も死ぬことが出來ないとはあんまり意氣地が無さ過ぎるね』

といはれて蕙蓮は忽ち起き上り

『おい、人を馬鹿にするにも程があるよ。一體誰れの御蔭であの人が罪を着たのだらう。丸で踏んだり蹴たりだ』

と、豫ねて雪娥が我が夫を盜んでゐることを金蓮から聞かされてゐる蕙蓮は口惜しさに胸も張り裂けるばかりである。一方雪娥は之れも金蓮から聞かされて西門慶に打たれたのは蕙蓮の讒言とばかり思ひ込んでゐるので益々猛り立て

『なんだ。默つてゐれば好い氣になりやがつて、そういふお前は主人を寐取つた淫婦ぢやないか』

『へい〳〵そうで御座いましようとも。私しが淫婦ならお前は小婦だよ。私しは主人にこそ關係しましたが、下人と腐れ合つた覺には只の一度も御座いません。盜人猛々しいとはお前の事だ。人の亭主を盜みやがつて、逆捻ぢ喰らはしやがる』

これを聞いた雪娥は勘忍しかね、忽ち蕙蓮の横面をピシリこ打つた。蕙蓮も今は負けてゐず攫み掛つて互に組んずほごれつした。隣の一丈青は見兼ねて中へ割つて入り雪娥を後方に引いたが雙方承知せず罵詈讒謗を極めてゐるところへ月娘が現はれ

『お前さん方は本統に呆れた人達だ。お客樣があるのに其ざまは何事です。主人が歸つて來たらスツカリ話しますよ』

と叱られて雪娥は漸く奧へ引込んだ。月娘は蕙蓮の蓬髪をじつと眺め

『お前さんは髪を結ひなほして奧へおいでなさい』

と言つたが、彼女は一言も答へない。そうして月娘が後方に去つてから門を閉ぢて泣いた。哭

いて〳〵泣きやまず、灯ともし頃のごさくさ紛れに蕙蓮は遂に雙脚の纒足帶を解いて楹の上に懸け、自ら縊れてゐたら二十五の女盛りを花と散らした。暫くして月娘は李大姐と桂姐を送つて前邊に來り、蕙蓮の部屋の前を通り過ぎた時、內がひつそりしてゐたので訝り、歸りがけに立ち寄つてみると此始末に驚き、いろ〳〵手當てをしてみたがはや既に縡切れたあとで全く取返へしのつかぬことになつた。雪娥は青くなり月娘の前に跪き、辯疏けやら詫び事をしたので自殺前の出來事に就いて家內中の口を止めた。急報に接し慌てゝ歸つて來た西門慶はそうとは知らず、全く夫を慕つての自殺と思つたので

『拙婦、福無し』

と嘆息して一片の書狀に銀三十兩添へ、李知縣に贈り、銀器紛失に就いて責罰を恐れ、自殺を遂げた云々と出鱈目の屆書を作つて司吏の檢屍を受け、一枚の紅票を求めて棺に納め、門外の地藏寺に送り火工に銀五匁與へ、薪を多く加へて火葬せよと命じた。處へ棺桶屋の宋仁は息せき馳せ付け、彼女は西門慶の强姦に遭ひ貞操を守つて死したる旨を述べ立て火葬を拒み告訴せんとい

きまいたので火家は手を束ね、送葬の費四、來與は已を得ず屍體を寺へ預けて歸つて來た。

譯餘閑談

〔棋杆〕旗竿である。廟、公署の門前にあるものは特別の形をなし、竿の中程に方形の受台あり。旗は小竿を以て其下に斜に挿す。

〔九尾狐〕瑞應編に九尾狐は赤色。四足九尾。靑丘國より出づ。これを食へば妖邪の氣及び蟲毒の類に逢はずと云々と。宋眞宗の時、陳彭年、性質奸佞、時に九尾狐と號せらる。

〔遞解〕凡そ本籍の人に非ずして罪を犯す者は、其境界から追放し護送して本籍地に返すのである。舊時の制度である。來旺は遞解されたのである。

〔公送人〕犯人を遠方に護送する役。彼等の旅費は當時犯人をして負担せしめた。

〔門樞〕門の軸木。

〔紅票〕　これは火葬の許可證ではないかと思ふ。

〔箱入娘〕　原本には玉美人とある。

二七

その日來保は東京から歸つて來た。西門慶は捲棚内に坐してゐると、來保は旅裝のまゝ進み首尾好く用務を果したことを告げ、滄州鹽客王霽雲等十二名の收監者は近日釋放さるべく、又六月十五日の蔡太師壽誕には西門慶の出席を希望する旨を申傳へた。西門慶は喜んで來保を喬大戸方へ遣はし前の話を報らせた。入交ひに賁四と來興は這入つて來て、宋仁が苦情を並べ火葬を妨害したので屍體をそのまゝ寺に預けて來たことを語つた。そこで早速手紙を以て李知縣に告げ、脅喝罪の廉で宋仁を捕縛し署に突出し、二十板を喰らせ、今後再び西門慶を煩累することあれば嚴罰に處すべしと申渡して釋放した。憐むべし宋仁は此事から身體を痛め、間もなく傳染病に罹つて死亡した。偖て宋蕙蓮の始末は之れてスッカリ片附いたので西門慶は安心し、次に來るべき蔡太師壽誕に就て考慮した。先づ長壽の銀人形四個、と金壽字壺二個を銀樓から買求め、所藏の

玉桃盃一對を捜し出し、杭州新造の大紅五彩羅緞紵絲蟒二襲を添へて考へてみたが、二匹の玄色蕉布こ一襲の大紅紗蟒衣が足らぬ事に氣がつき使を出して處の呉服屋に覓めたが、適當の物見當らず困つてゐるこ、幸ひ李瓶兒が此種の物を持つてゐたので早速それを使用し五月二十八日禮物輸送のため再び來保呉主管を東京へ向け出發させた。その頃氣候はウンこ暑くなつた。

六月一日西門慶は翡翠軒の捲棚内に坐し襟を寬ろげ髮を捌いて凉を入れた。來安は正面の前栽に打水した。草花の中に一盆の瑞香花は美しく咲いてゐたので小噴壺を持ち來らせて水を灌いだ處へ潘金蓮こ李瓶兒は手を引連れて馳けて來た。

『オホ、、、、貴方は花を愛して、自分の頭をなぜ愛さないの』

こ金蓮はいふ。暑い頃こて二人は冠をかぶらず、渦卷にした頭髪を杭州攛翠雲網で纏め、四鬢を露はした額に三つの翠面花を貼り、紅い袖無しの下から銀色の廣袖をひらめかしてゐた。西門慶は樂しさうに二人を眺めてゐたがやがて、髪を梳くから女中を寄越して呉れこ金蓮に賴んだ。

金蓮は水を撒いてゐる來安に此川をいひつけ、自分は盆栽の側に寄つて瑞香花を一朶摘まふこす

ると西門慶は遮り

『それに手を着けてはいかん。俺れはみんなに一つづゝ與らうと思つて、こら此通り採つてある』

と側にあつた磁瓶を指した。それには半開の瑞香花がふか〳〵と浮んでゐたので、金蓮は素早くその一つを搔ッ拂つて頭に挿した。西門慶は苦笑ひして別の一つを李瓶兒に與へた時春梅と秋菊は鏡台と手水盥を運んで來たので、西門慶は三つの花を春梅に渡し、月娘、李嬌兒、孟玉樓に一つづゝ屆け、又玉樓には月琴を持つて來るようにと命じた。金蓮は側から口を出し

『春梅、お前さんは大娘と二娘の方へ行つて下さい。孟三兒の方には私しが行つて月琴の話をするよ。その代りもう一つ花を下さいな。ね、いゝでしよう。私しも歌を唱ひますよ』

と西門慶の方をみかへつた。

『猾い奴だな。何んとか因縁をつけて人より餘計貰はふとする』

と西門慶は笑つて又一つ花を渡した、金蓮はそれを頭に挿して出て行つた。そこで西門慶の側には李瓶兒が獨り殘つてゐた。見ると紗裙の下には大紅の紗褌がほの見えて玉のような肌が日影

に美しく透き通つてゐる。

一方金蓮は角門の口まで來た時、ふと何か思ひ當つたように、春梅に孟玉樓の花を託し、自分はこつそり引返へして翡翠軒の槅子窓の下に立つて聽耳立てゝゐると內は靜まり返つてゐた。

『おゝお前は本統に好いねんねだ。外は措て措き、お前の色白のお○がすッかり氣に入つた』

『お父さん、幵んな酷いことをしてはいけませんよ。私しは少し具合が惡いのよ』

『具合が惡いつて何か病氣でもあるのかね』

『いゝね病氣ぢやないの、出來てゐるのですよ。あの晩貴方があんまり酷いことをしたから下肚が痛んでならなかつた』

『おゝそりやあ有難い。なぜ早く言はなかつた。出來たと知つたらその積りで加減をするわな』

金蓮は此問答を盜み聽いて胸を悸めかしてゐるところへ孟玉樓が來たので二人一處に中に這入つた。

『貴方は未だ髮を梳かなかつたの』

と金蓮は鋭く詰つた。西門慶は大に狼狽へて
『ウム女中が來たら梳かせようと思つてゐたところさ。茉莉花肥皂（石鹼に似た物）を持つて來て呉れ』
『しやぼんなごは要らないでしよう。貴方の顏は人のお臀よりも餘程白いよ』
西門慶は此話を聞かぬ振りして玉樓に對ひ
『お前はなぜ月琴を持つて來なかつたの』
『月琴は春梅が持つて來ます。大姐姐があした吳舜臣のかみさんに喚ばれてゆくのですが、何かお土產をといふので私しは今珠花を綴つてゐました』
といつてゐる處へ春梅が歸つて來て酒を運び冰盆の內に瓜を浮かべ李を沈め、凉亭に在つて紅に偎り翠に倚つた。玉樓は月娘を喚ばふと言つたが、あれは酒を飲めないからねと西門慶は退けた。金蓮は豆靑磁の凉墩兒に腰掛けてゐる。玉樓は
『それに掛けると腰が冷えますよ』

と注意する。金蓮は笑つて

『冷ねても構ひません。私しは孕んでゐないから』

と當てつける。やがて琵琶を把つて玉樓が彈手、金蓮が唄手となつて赤帝當權耀太虛を演じさせようとしたが、

『私し達はいつも末社になつて馬鹿々々しいね。けふは李大姐が唱はなければならない』

と金蓮は嫌味をいふ。

『けれど出來ない者にやれといふのは無理だよ』

と西門慶は大に辯護する。

『出來なければ側で拍子を合はせるのですね』

『こん畜生勿體振るない。餘計な事を言つて虱を咬むとはキサマのことだ』

と言ひ乍ら一副の紅い象牙板を取寄せ、李瓶兒は拍子方となり、金蓮は琵琶を取つて彈き語りをなし、玉樓は之れに和して『雁過沙』を唱つた。繡春は側で扇の風を入れ、彈き終つて酒を薦め

た時、金蓮はわざと氷を飲み生菓子を食べた。玉樓は訝り
『五姐、けふはどうして开んな冷たいものばかり食べるの』
『私しどもは肚の中に何もないからね。何を食べても平氣ですよ』
と金蓮は當て擦る。李瓶兒は思はず顏を赧めた。
『お前は本統に人が惡いよ。當擦りも好加減にして置け』
と西門慶はたしなめると金蓮は躍氣となり
『貴方こそお喋舌りだよ。お婆さんが夢心地で乾臘肉（ハム）を食べるように一本づゝスルリ〳〵と來るのだからね』
『馬鹿を言へ』
と怒鳴つた時、空はいつしか曇つてゐて遠雷の音と共に雨がサッと降つて來た。四人は花の露草の雫を眺め乍ら時にふさはしい『梁州序』『節節高』を合唱して歡んだが、驟て雨霽れ西日冷しく風を誘ふたので玉樓は立上り

『私し未だ仕事が片附かないから一寸奥へ行つて來ます』
『未だ大分あるの』
『ヽ五つ六つ珠花が殘つてゐます』
『では手傳つて上げましよう』
と李瓶兒は玉樓の跡に跟いて此場を脫した。
『あら人が惡いよ。私しばかり此處に殘してさ』
と金蓮も立去らうとしたが、西門慶に引留められ太湖石の側に腰を卸した。
『いやですよ。其んなに取つ付いては、もつとあの人を可愛がつておやんなさい』
と金蓮はキャツ〳〵と笑つて岩蔭に咲いてゐた石榴花を捥ぎ取りそれを橫鬢に挿して
『あの誰れやらは三日御飯を食べないと眼がチラ付くそうですよ』
と意味ありげに見た。西門慶は急に金蓮を引き据ゑ
『サア逹々さんと言へ。言はなければ懲らだぞ』

『オホ、、、、あの達々さんや。貴方は何を戸惑ひしたの』
數分間の後ち二人は葡萄架の下に來てゐた。そこには四つの涼墩と一つの壺があつた。西門慶は金蓮こ向き合つて小机の前に坐し、女中が運んで來た葡萄酒を飲み乍ら投壺の游戯をした。過橋とか、翎花倒入、雙飛雁、連科及第とか二喬觀音とか、楊妃春睡とか烏龍入洞とか、珍珠倒捲簾とか。西門慶の矢はいつも能く當り、其都度金蓮は酒を飲まされたので、顔はポッポと火のようにほてり、遂に坐に堪ねずなつて涼蓆の上にぐたりと身を横たへ半眼を瞪いてうと〳〵してゐる、此時五香藥酒を飲んでゐた西門慶はいつもより一層活氣附いてあたりを見廻はすと、花園内は森として夕闇の翠色なんとも言へない。
『おとうさん、あんまり酷い。私しは頭痛がします』
と金蓮が空泣きした時、紅い鞋が鼻先にあつた。

譯餘閑談

〔捲棚〕竹の柱に竹製アンペラを覆ひ家の軒先きに張り出し日避けとする。夏期に限る。

〔小噴壺〕日本でジョーロといふもの

〔瑞香花〕高さ四五尺の灌木。枝葉繁茂し、葉長楕圓、質厚く光あり、春日花開く。內白く外紅紫色、形ち丁香花に似たり、香氣高し、又一種黃色管狀あり、秋に至つて葉落つ、之を黃瑞香といふ。其纖維を以て紙を製す。

〔心肝〕心肝は親が嬰兒に對していふ言葉。日本の坊や又はねんねに當る。寶貝(ポーバイ)、嫒々(ノンノン)、小怪々(クエイクエイ)等皆類似語である。此處では成年の男が成年の女に對して用ゐてゐる。其甘垂るさ察すべし。

〔達々〕達々(ターター)は爹爹(テ・)の轉音で小兒の甘垂れ聲を取つたのである。何しろ二十四五歳の女が同年

配の男に對して達々(ターく)といふのだから甚だお安くないのである。右はいづれも閨房の私語である。

〔肥皂〕 皂筴(さいかち)の一種で筴尤も肥大なるを肥皂といふ。石鹼が輸入せぬ當時は洗濯垢落しをした。これは一種の臭氣あるゆゑ皮膚洗淨用として茉莉花を加へて搗き交ぜたものを用ゐた。今日洋肥皂(ヤンピゾー)は洗濯石鹼で香肥皂(シャンピゾー)は化粧石鹼である。即ちさいかちがしやぼんの意味に轉じたのである。

〔珠花(ツーホア)〕 ハリガネを花形にして眞珠を綴る。

〔涼墩兒〕 陶器製太鼓形の腰掛。胎兒を持つてゐる者はこういふ冷いものに腰掛けない。

〔瓜李〕 瓜、李其他凡べて水菓子。蟹などは身體を冷やすといふので房事のあとに食はぬ。

〔赤帝〕 赤帝は南方の神、此處では此種の曲名である。雁過沙、梁州序、節節高皆曲名である

〔紅牙象板〕 拍子を取る樂器。

〔投壺〕 投壺は三つ穴のある壺に矢を投げ込み、其形ちに依つて點數あり。それに依つて負けた者は罰杯を課せらる。此遊戲は東漢の光武帝時代より初まる。過橋、翎花倒入、雙飛雁連科及

第、二喬觀音、楊妃春睡、烏龍入洞等は矢が壺に入つた形である。例令ば倒扇簇の夢の浮橋、末摘花等の如し。矢は總計八本あり、客四本を取り、主人四本を取る。

〔五香酒〕五香は香料の名である。一株五根、一莖五枝、一枝五葉、一葉の間五節、五節相對すこれを燒くと香氣九天に達すとある、貴重品であるが、果してそんな物があるかごうか、兎に角之を加へた酒を飮むこ非常に亢奮して春情を催すそうである。現在五香は茴香大料などをいふ

二八

その夜は楊貴妃の醉態振りも斯くや、と酥胸を露はし雲鬟をたわめ嬌眼を斜に動かし、あらゆる媚を呈して西門慶に仕へた。まことにこれや楚王の夢、兩情飽くことを知らず、金鍾の輿、泉の如く湧き立つたまでは好かつたが、偖て翌日はぐつすり勞れて晝頃漸く起き上つた時には、西門慶は既に外出したあとだつたが、彼女は何となく身體の具合が勝れなかつた。そこで不機嫌な顔して寐台から下りて鞋を穿かふとするとどうしたものか其片足が見えないので女中を叱り飛ばし部屋中は勿論花園内を隈なく捜させたが更に見當らなかつた。

『これは屹度、誰れかゞ、盜んだのだよ』

と金蓮はヂロリと女中の顔を見廻すと、春梅は責めを秋菊にかづけ

『私しはあの時旦那の介い添ひして部屋に來ました。寐道具を片附けたのは秋菊です』

といふ。金蓮は日頃氣に適らぬ秋菊の事とて

『あゝそうだ。この餓鬼が悪いのだ』

と憎さげに見たが、忽ち春梅の方を見て

『お前、氣の毒だが、此餓鬼を花園内に引出してもう一遍隅々を捜して呉れないか。若し捜し出さなかつたら、此餓鬼を庭の敷石の前に据ゑて頭の割れるほどお辭儀をさせなければ』

春梅は意地悪く

『奥さん駄目ですよ。庭はスッカリ掃除して塵ッ葉一本落ちてゐませんからね』

秋菊は慌てゝ

『どうぞ奥さん、暫くお待ちなすつて下さい。私しは屹度捜し出します』

そこで春梅は秋菊を引ッ立て、先づ花園の築山の下から池の邊り、松墻の下と、あちらこちらと捜しあぐみ、遂に藏春塢の雪洞内に入つた。

『恁んな處にあるわけはないよ。此處は旦那の冬籠りと極つてゐるのだからね』

と春梅は反對したが、秋菊は耳にも入れず、書篋を開けてみた。春梅は益々反對して
『これは用箋や招待狀ばかり入れてある處で鞋などが這入つてゐるわけはないよ』
といふ。けれど秋菊は一向平氣で底の方を掻き廻すと二つの紙包みが出た。
『何んだらうね』
『安息香だよ』
『これは何んだらうね』
『鞋のやうだよ』
と開けて見ると果して大紅平底の鞋だつた。そこで早速部屋に戻り
『奥さん、鞋がありましたよ。藏春塢の書篋の中に拜帖と紙排草（ツーパイツアオ）と安息香と一處に這入つてゐました』
といふ。金蓮は手に取つて能く見ると大紅四季花緞子の白綾平底繡花鞋で、綠の底と藍口の金巻は同じだけれど飾糸の色が違つてゐる。失つた鞋は紗綠鎖線であるが之は翠藍鎖線である。試

に穿いてみると自分の足には少しかたい。偖ては屹度蕙蓮の遺物に違ひない。夫はいつのまに隱して置いたのだらう、と少し燒け乍ら

『これは私しの鞋ぢやないよ。春梅、お前、一つ大きな石を持つておいで、此奴を仕置きしてやるから』

といふ。秋菊は哭き出して

『これが奧さんの物でなければ一體、誰れの物で御座います。私しは搜すだけ搜しました。どうぞゆるして下さい』

と言つたが肯かず、春梅は秋菊を地上に坐らせて大きな石塊を頭の上に載せた。金蓮は漸く胸の痞を下した體で、別の鞋を穿き玩花樓に登つて化粧を初めた。

陳敬濟は袖に一物を入れて金蓮の部屋に向つた。中庭に入つた時、そこに跪坐してゐる秋菊を見た。

『小大姐(ショーダーツー)、お前はなんていふ態だね。丸で兵隊にやられた罪人だね』

と頭の上の石塊を取り除けて立たせた。金蓮は樓上で敬濟の聲を聞きつけ、

『姐夫(チーフ)、好い處へお見にだ。誰れもゐないから此處へ入來つしやい』

と叫んだ。敬濟は上つてみると金蓮は綠の黑髮を紅糸で紮つて渦に卷き銀絲の鬏髻の上に玫瑰花を滿載し、鏡台を離れて手を洗ひ乍ら春梅に茶を命じた。敬濟は急に何か思ひ出してクス〳〵笑つた。

『おやをかしな人だね。私しの顏に何か描いてあるの、思ひ出し笑ひは罪だよ』

『いや全くをかしい。笑つていけなければ向ふへ行きます』

と立ち掛ける。金蓮は側に寄つて手を抑へ

『お前さんは酷い人だよ。蕙蓮が死んでから薩張り此處へ來なくなつたが、幵んなに私しを嫌はなくこも好さそうなものだ』

　敬濟は益々笑つて懷中から鞋を出し

『一體これは誰れの物でしよう』

『おや貴方がそれを持つてゐたの。これは不思議だ。私しはけふ女中を叱り飛ばしてあちこち捜せさたが、ごうしても目附からなかつたのですよ』
『サアごうしてこれが私しの手に這入つたか當てゝ御覽なさい』
『屹度貴方が盗んだのだよ』
『馬鹿を仰つしやい。私しは近頃此處へ來たことはありません』
『それは蕙蓮がゐないから張合ひがないのでしよう。私しはお父さんにそう言つてみよう。何こいふかしら』
『へい〳〵御隨意になさいまし、私しは此鞋を持つて歸ります』
『其鞋は私しの物ですよ。貴方が持つてゐることはなりません』
『だが一旦手に這入つた以上は雷に打たれても放さない積りです。兎に角何か代りを頂戴するのですね。貴方の使ひふるしのハンケチでも』
『それでは餘り失禮ですから、あした新奇に一つ拵へて上げましよう』

『新しいのは百枚あつても仕様がありません』
金蓮はニッコリ笑つて
『お父さんに叱られますよ』
と言ひ乍ら、袖中から一枚の舊手巾を出して敬濟に渡した。それは四隅に　さをつけ、白綾の面に鶯々夜香を燒くといふ圖を繡してある。敬濟はそれを納めて鞋を手に入れた次第を語つた。
來昭の小倅小鐵棍は今年十二歲の皙白小僧であるが、きのふ夕方花園内に入つて殘物の菓物を女中から貰ひ受け、そこに脫ぎ捨てゝあつた片足の女鞋を何げなく拾つて翌朝おもちやにしてゐると敬濟が見附けて瞞し取つたのである。西門慶は此話を金蓮から聞き傳へて小鐵棍を滅茶苦茶に折檻した。來昭の妻一丈靑は金蓮を怨めしく思つた。
その晩西門慶は金蓮の部屋に入ると彼女は蕙蓮の鞋を穿いて寐てゐる。不思議に思つて其わけを訊くと金蓮は腹を立て
『丸で寶物のようだよ。安息香と一處に此鞋を大事になほして置いたのは誰です』

と言つた。

譯餘閒談

〔拜帖〕拜帖、紙排草、安息香等は婚禮用の品物である。
〔紙排草〕紙排草は薬蘭の一種で結婚の時其葉の一片を取つて女家が男家に贈る。
〔姐夫〕姐夫は女壻である。
〔玫瑰花〕玫瑰は紫紅色の薔薇、匂高し。頭飾用とし、或は酒茶の中に入れて飲む。
〔鶯鶯〕鶯々は西廂記中の美人、普濟寺に泊し、夜、香を焚いて父の靈を祭るといふ一節がある。其繪である

二九

次の日金蓮は早く起きて西門慶を送り出し、針箱を持つて翡翠軒に入り、そこの石台に腰掛けて鞋形を剪り初めた。間もなく春梅は李瓶兒を喚んで來た。

『貴方はどんな鞋を作るの』

『大紅素緞子を表にして白綾の平底鞋を作る積りです。鞋先きの刺繍は鸚鵡桃を摘む形など面白からうと思ひます』

『それは屹度うつりが好う御座いますね。私しは十錦緞子の小片れがあるから、貴方と同じ模樣で作つてみましよう。私しのは高底鞋よ』

とそう言つて二人は模樣を描き初めた。片足描き了つた時、金蓮は

『あゝ孟三姐も鞋を作ると言つてゐたから、私し此處へ喚んで來ましよう。貴方憚りですが片方

の描き殘しをお願ひしますよ』

と金蓮は急に立上つて奧へ行つた。

玉樓は部屋の護院炕に倚つて鞋を縫つてゐるご、金蓮は馳け込んで來た。

『おやモウ出來たの。大層早いのですね』

『いゝえ、これからですよ。今やつご片方丈け繪を描き終へたところです。涼しい中に仕上げたゐるご思ひます。李大姐も來てゐますから貴方も花園に被入つしやいな。三人一處に話し乍らやらうぢやありませんか。おや貴方のは黑ですね』

『ゑゝ年相應にヂミな物を川ゐないといけませんよ。きのふ片方やつてゐたあれと同じものです爪先は羊の皮で雲形に金絲を卷き紗綠線紗で周圍を端ち取らうご思ひます』

『兎に角早く入來つしやいな。李大姐が待つてゐますよ』

『まあお茶を飲んで被入しやいな』

『お茶は向ふへ運ばせて下さい。サア〳〵忘れ物のないように』

こせき立てゝ連れ出した。上房の前を通ると月娘が廊下に立てゐた。

『おやお揃ひで何處へ行くの』

『今ね、李大姐が鞋を作るので孟三兒を喚んで形を作つて貰ふのです』

と好加減な事を言ひ捨てゝスタ／＼花園内に來た。玉樓は金蓮の仕掛けた鞋を見て

『貴方はいつも紅色の平底鞋を作るが、高底の方が格好が好う御座いますよ。若し音がして否やなら漉羅紗を上げますから、高底を一度、拵へてみて御覧なさい。姿勢が好くなりますよ』

『いえ私しのは睡鞋ですからね。平底でなければいけません。鞋が片方見えないと思つたらあの頑白小僧に拾はれてスッカリ汚ごされて仕舞つた。それで旦那が新奇に拵へろと被仰つたのです』

『道理できのふ一丈青が淫婦、忘八糕子と怒鳴つてゐましたよ。子供が息を吹き返へしたから好いようなものゝ若し死んで仕舞つたら誰れのトガだと思ふと言つてゐましたよ。旦那は餘程酷く打つたものと見えますね。それから大姐姐（月娘）は小鐵棍を喚びよせて一伍一什を聞きました小鐵棍のいふには、私しは奇麗な物を拾つたからおもちやにしてゐると姐夫（敬濟）が見つけて銀

の輪と取換へてやるから俺れに呉れと言つたのだそうです。頑世ない子供の事とて何も知らず渡して仕舞つたのです。そうすると大騷動が持ち上つたのです。一體誰れがこれを旦那に言ひつけたのだらうといふことになりました』

『大姐姐は何とか言つてゐましたか』

『いゝ貴方の事に就いて別に何にも言ひません。唯近頃は丸で亂世だ。九尾の狐が妖術を遣ふから家中が時々ひつくりかへるような騷ぎが起る。一體來旺が罪に落されたり、蕙蓮が首を吊つたりしたのは誰れの指し金だらう。今片方の鞋が無くなつたとて大騷ぎをやつてゐるが天日の下でみつともない眞似をすれば鞋の一足やそこら無くなつても仕方がないのですよと言つてゐました。

『あらそれは全く嘘ですよ』

と金蓮は流石に顔を赤めた。玉樓は附け加へて

『一丈青が忘八糕と言つたのは多分姐夫(敬濟)を指したのでしょう』

とい。金蓮はこれを聞いて益々顏を赤めた。夕方西門慶が歸つた時、金蓮は早速此話をした西門慶は大怒して翌日來昭の門番を罷免し、平安をして代らせた。來昭はその後獅子街の空屋係りとなつたので收入が俄に減じた。

一日周守備の紹介で一人の相人が來た。此人年四十餘りで頭に青道巾を戴き、身に布袍を着、腰に黃績雙穗絛を結び草履を穿き、手に龜殼扇子を持つてまことに飄逸たる趣きがある。先づ大廳に請じて姓名を問ふと、姓は吳、名は奭、道號は守眞、浙江仙遊の生れで、幼より師に從ひ天台山紫虛觀に修業し出家して諸國に遊ぶと稱してゐた。西門慶は當時二十九歲の寅年で七月二十八日午時生れである。相人は指を繰つて戊寅年、辛酉月、壬午日、丙午時であるから白露已に交り八月の算命(サンミン)である。人と爲り一生耿直、事を幹する二無し。喜べば和氣春風。怒れば迅雷烈火一生多く妻財を得、少からず紗帽を得、死に臨んで二子あり老を送る。但六六を出でずして嘔血流濃の災あり、愼しむべし

承漿地閣要豐隆、準乃財星居正中、生平造化皆由命、相法玄機定不容

と言つた。西門慶は大に喜び、妻妾を喚び出して觀相を請ふた。先づ月娘の相を觀て

『顏は滿月の如く家道興隆の祥あり。唇は紅蓮の如く衣食豐かに足る、必ず貴を得て子を生ず。聲は淸く響く。必ず夫を益して福を發す乾姜の手、女人必ず善く家を持す。照人の鬢、神道定つて秀氣あり。但し足らない處がある。それは淚堂に黑痣があるので、若し夫、疾に宿せば必ず夫を刑す。眼下の皺紋も亦六親を主つて氷炭の如し。

女人端正好儀容、緩步輕如出水龜、行不動塵言有節、無肩定作貴人妻、

と言つた。次に李嬌兒を見て

額尖露骨幷蛇行、早年必定落風塵、假饒不是娼門女、也是屛風後立人

と言つた。次に孟玉樓を見て

口如四字神淸徹、溫厚堪問掌上珠、威命兼全財祿有、終主刑夫兩有餘

次に潘金蓮を見て

擧止輕浮惟好淫、眼如點漆壞人倫、月下星前常不足、雖居大厦少安心

次に李瓶兒を見て

花月儀容惜羽翰、平生良友鳳和鸞、朱門財祿堪依倚、莫把凡禽一樣看

次に孫雪娥を見て

燕體蜂腰是賤人、眼如流水不廉貞、常時斜倚門兒立、不爲婢妾必風塵、

次に西門大姐を見て

惟夫反目性通靈、父母衣食僅養身、狀貌有拘難顯達、不遭惡死也艱辛、

次に春梅を見て

天庭端正五官平、口若塗硃行步輕、倉庫豐盈財祿厚、一生常得貴人憐

と言つた。西門慶は白銀五兩を封じて吳神仙に謝したが吳は受けず、依つて一疋の大布を衣料として送り、又守備府の小厮に銀五錢を與へて立ち去らせた。

やがて西門慶は芭蕉扇を握つて花園の聚景堂に入つた。此處は綠陰深く蟬の聲盛んである。忽ち一陣の風が花香を送つたかと見るこ春梅が梅湯を持つて來た。西門慶は戲れて

『お前の人相は大變好いそうだよ。若し子供が出來たら附添の女中を一人抱へてやる』

といつて抱き締めた。

金蓮は日頃李瓶兒の色白を羨ましく思つてゐたが、其日は人相に落第したので氣がさし、部屋に入つて湯浴みをし、白粉と茉莉花を脂で溶いて全身に塗りつけ、晝寐をした。西門慶が春梅を手離して部屋に來た時には、螺鈿欄杆の床の內に紅綃の胸當てをした色白の美人が、鴛鴦枕を頭にしてすや〳〵と睡つてゐたので、喜んで近寄ると芬とゐならぬ匂がした。すると眠むつてゐた顏が俄に崩れて、まぶたの間から星のような眸が動き輝いた。

譯餘閒談

〔素と十錦〕素緞子は無地無紋の緞子である。日本でこれを繻子といふ。十錦は各種の色絲で模樣を織出した緞子で、日本の西陣織のやうなものである。

〔雲頭〕　雲頭は鞋或は着物のへりに用ゆる雲形模樣である。三雲頭などゝいふ。
〔忘八糕〕　破倫の意味を含む罵言である。
〔乾姜〕　藥名、薑根を乾製して作る。色白く內實するものをよしとす。美人の手に譬ふ人相學にあるものと見ゆる。

三〇

金蓮は西門慶の餓ゐと勞れを察し、餡入の餅と酒を注文した。暫く經つて秋菊が持つて來たものを飮むと丸で氷で冷やしたようにつめたい。金蓮はイキナリ注子を取つて秋菊の顏に酒を投げ掛けた。

『旦那に冷酒を飮ませようと思つて、不都合な奴だ』

『でも此頃始終冷いものを上つてゐらつしやるから、わざと氷で冷やして來たのです』

『それだからお前さんは馬鹿だよ。時と場合を考へないで生意氣に口答へをする。よし〳〵此間の仕置きが未だ足りないのだ。けふはウンとお行儀を習はせてやる』

と春梅に命じて先づ横面を十許り張らせ、院子に坐らせて例の通り頭の上に大石塊を載せた。

そうして西門慶と一處に又も臥戸に入つた。

春梅は廊下の大理石の椅子に凭つて鞋を縫つてゐる。琴童は角門からそつと顏を出した。
『お前さん、何か用なの』
と春梅は針の手を休めた。琴童は秋菊の跪坐せる樣を見て、指を動かして笑つた。
『用があるなら早くお言ひなさい。何んですねに、幵んな手眞似をして』
『張安が來て旦那に是非お目に掛りたいと言つてゐます』
『今お休みですから待たせて置きなさい』
琴童はしほ〳〵と引返へした。暫くして又角門の口に顏を出した。
『未だお休みですか』
『蒼蠅い人だね。張安、張安と大した騷ぎだが、夢に遊んでゐる人は急に目が覺めるものではない』
『そいつは困つたな。張安は旦那に逢つてから何處へか行く用があるさうだから日が暮れては困る』

『でも好い心持ちに寐てゐる人を起すわけにはゆかない。あした來いと言つたら好いでしよう』

西門慶は寐床の中で其聲を聞きつけ、春梅を喚んでわけを訊ねた。

『おゝそれは是非會つてやらなければならない』

と俄に起き上つて着物を着た。金蓮は不審に思つて

『張安に何か大事な用があるのですか』

こ訊く。

『家の墓地の隣の地面は趙寡婦の持ち物だが此間張安が來て三百兩で賣ると言つてゐた。俺れは二百五十兩に直をつけてやつたが、多分その話だらう。內には一つの井戶と四つの貯水池と三つの捲棚と三間廳と築山花木井亭の外に矢場と打毬場がある。あれを買つて連絡すれば僅かの金を注ぎ足す丈けで立派なものになるよ』

と言ひ乍ら出て行つた。金蓮もやがて起き上り化粧をして院內に出で琴童を喚んで秋菊を二十板打てと命じた、十板打つた折しも、金蓮を訪ねて來た李瓶兒は秋菊のために詫びを入れてやつ

たので、殘りの十板は打たれずに濟んだ。李瓶兒は笑ひ乍ら金蓮に語つた。

『老潘が十五歳の丫頭(ヤードー)を連れて來ましたが、七兩五(チリヤンウーチエン)錢だそうです。安い物ですね。二姐姐(アルチーく)の處へ置くのだそうですが、どんな兒だか見てやらうぢやありませんか』

やがて二人は丫頭を見に行つた。丫頭は夏花と稱けられその日から李嬌兒に使はれた。

偖て來保と吳主管は炎熱を冒して長途の旅を續け、漸く東京に到着して先づ萬壽門外に宿借り翌日青衣を羽織つて天漢橋の蔡府の門前に來た。今度は門番が變つてゐたので、西門員外も東門員外も俺れの知つたことぢやない、と劍もホロ、の挨拶であつたが、その中一人見知つた者が來たので三人の門番に錢一兩づゝ與へ、翟管家に面會を得、先づ南京反物と銀三十兩を送り、鹽客王四の件に就いて禮を述べ、次に壽誕禮物進上の件を申出たところ、翟管家は快く引受け、首尾よく蔡太師の引見を得た。蔡太師は蟒衣、金壼、玉盞、銀像等の禮物を見て大に喜び、西門慶は如何なる役目を勤めてゐるかと訊いた。主人は一介の鄕民で官職はないと答へると、蔡太師は幸ひ昨日朝廷から二三の空職を下し賜つてあるから、その方の主人にも相當の役目をつけてやらう

と早速書類を調べ、衛金吾衛衣左所、副千戸、山東提刑所理刑の下に西門慶の名を書き塡め、又清河縣驛丞の下に吳典恩の名を記し、山東鄆王府當差の下に來保の名を記して明日早朝吏兵二部から辭令書が下がることを申渡し、旅費として銀十兩を二人に與へ、西廂に下りて酒飯を認めよと言つた。翟謙は太師の命令けに依つて二人を西廂に請じ入れ酒飯のもてなしをなし、話の序に自身の妻が病氣なるにより十五六歲の女を一人世話して吳れと賴み、西門慶宛の書狀に銀二十五兩添へて出した。來保は頻りに辭退したが、翟謙は强ひてこれを渡し、且つ明日の辭令書取下けに就いて万遺漏なからんため李中友といふ男を紹介した。來保等は李中友と共にやがて此處を立ち出で天漢橋の酒屋に入つて銀三兩を李に送り酒飯を饗應して万事の手續きを依賴した。そこで二三日中に滯りなく進行し、金吾太尉朱勔の印鑑附きの票帖を受取り二人は大喜びで夜を日に繼いで清河縣に歸つて來た。

或日西門慶は妻妾を聚景堂に集め蓮花を賞した。宴半にして李瓶兒は見へなかつた。月娘は繡春に

『お前の主人はどうした』

と訊ねた。

『お腹が痛むと言つてをります』

『それはいけない。此處へ來て唱でも聽くと氣が晴れる。閉ぢ籠つてゐると却つて惡くなるとそうお言ひなさい』

西門慶は月娘に

『誰れか、どうかしたのか』

と訊ねた。

『李大姐が腹が痛むと言つてゐますから見せにやつたのです』

孟玉樓はいふ。

『李大姐はもう臨月が來てゐるのぢやないのですか』

金蓮は側から打ち消し

『いゝ八月に出來たのですから未だ早う御座いますよ』

間もなく李瓶兒は青い顏して出て來た。月娘は杯を渡し

『熱いのを一杯、引つ掛けると氣分がなほりますよ』

こ言はれて仕方なく、グッと飮み干すと腹はキリ〳〵こ痛み出す。

春梅等は『皆畏る夏日』を唱つてゐる間に李瓶兒は坐に堪ゐなくなつて部屋に歸つた。附添つて行つた小玉は間もなく戻つて來て

『奧さん、六娘は腹が痛くつて炕の上に轉つてゐます』

と注進した。月娘は喫驚りして

『私しはそう思はないではなかつたが、六姐(金蓮)が來だ早いこいふので、ウツカリ喚びつけて飛んだことをした。貴方、早く取上婆さんを喚んで下さいよ』

こいふ。西門慶は慌てゝ平安を喚び寄せ

『蔡老娘にスグ來て吳れ』

こいひつけた。今は酒ごころの騷ぎか。一同引連れて李瓶兒の部屋に入つた。
『李大姐、ごんな風にお腹が痛むの』
と月娘は落着いて訊ねた。李瓶兒は眉を顰め
『胸から下肚に掛けて堪らなく痛むのです』
『あゝそれでは起き上つてゐないこいけません。寐てゐると胎を壞る恐れがあります。今お婆さんが來ますから少しの間辛棒なさい』
と慰め、
『誰れがお婆さんを喚びに行つたの』
と一同を見廻した。玳安は皆に附いて來たが
『はい平安が喚びに行きました』
と答へた。
『馬鹿、お前は何んで恁んな處に愚圖々々してゐるの。自分が早く喚んで來るが可いや』

と言はれて西門慶も氣が付き、早速早馬に騎せて玳安を遣はした。

『何しろ之れは一大事ですからね。手遅れがあつては申譯けがありません』

と月娘は獨り呟やいた。金蓮は李瓶兒の出産を妬ましく思つたので、そつと孟玉樓を引き出し西の簷下に立つて涼を入れながら盛んに蔭口をきいた。

『この暑いのに御苦勞樣だ。何も皆で騷がなくとも生れるものは自然に生れますからね』

と言つてゐるところへ蔡老娘が來た。

『どなたが御主人で御座います』と大勢の女を見廻した。李嬌兒は

『このおかたが大娘（ダーニヤン）ですよ』

と月娘を指した。蔡老娘は其前に出て恭々しく頭を下げた。月娘は靜かに

『姥姥、宜しく賴むよ』

と一言いふと、蔡老娘は仔細らしく牀台の端に寄つて李瓶兒の腹を撫で廻はし

『おゝ今が恰度潮時です。草紙（ツアオツー）と襁褓を早く持つて來て下さい』

といふ。月娘は小玉にいひつけて己が部屋から取寄せた。

孟玉樓は蔡老娘が來たのを見て

『部屋に行つてみようぢやありませんか』

と言つたが、金蓮は否み

『貴方は見たければ行つて御覧なさいな。私しは否やです。子供を儲けてまことに仕合せな人ですが、今生れるのは少し早過ぎるようですね。さつきの言葉で見ると大姐姐は怒つてゐたようですが、私しはいはれのないことを言つたわけではありません』

『さうですね。勘定してみると恰度六月中に止つた見當ですね』

『だからをかしいぢやありませんか。黄花女兒(ホワンホワニユール)でもあるまいし、多寡が二度添ひぢやありませんか。それに一二個月も早くヒリ出して御覧なさい、誰れの兒だか知れないと言はれても仕方がないようなものですよ』

と言つてゐるところへ、小玉が草紙と繃接と小褥子を持つて部屋に入るのを見た。玉樓は

『おや大姐姐(ダーチー〳〵)がいつのまにか、あんな用意をしてゐたのでしよう』

といふと金蓮は冷やかに

『大老婆(ダーローポー)(正妻)と小老婆(ショーローポー)(妾)と子供の生み競をしたら、いづれゴタ〳〵の種ですよ。折角出來て芽出度いが、糠喜びになりやしませんかね』

『まあ貴方は何故そんな事をいふの。人に聞かれると悪う御座いますよ』

と玉樓は流石にあたりを憚つた。此時孫雪娥は慌てゝ馳せ付け倉暗で物に躓きつゝ部屋に入つた。

『まあ、あの態を御覧なさい。人が子供を産むのに大騒ぎをして』

と金蓮は益々冷やかに笑つた。

間もなくオギヤ〳〵といふ聲が聞え、蔡老娘は一際高い聲を出し

『當家の御主人樣、どうぞたんまり御褒美を願ひます。産れたのは坊つちやまで御座います』

と叫んだ。月娘は急に此由を西門慶に報らせると西門慶は手を淨め、天地祖先の位牌の下に香

を焚き、百二十分の清清醮を告げ、盆に臨んで慶あり、草に坐して虞れなしと子母平安を祈つた時しも宣和四年戊申六月二十三日、一家は擧つて歡喜に滿ち、手の舞ひ足の蹈む處を知らぬありさまであつた。獨り金蓮は已が部屋に入り戸を閉ぢて泣いた。

蔡老娘は嬰兒の臍帶を咬み切り、衣胞を埋め、定心湯を煎じて産婦に飲ませた。月娘は酒飯を調へ西門慶は銀五兩封じて謝禮した。それから蔡老娘は三日の開通つて來て赤兒に湯をつかはせたので、別に一疋の緞子を與へて其勞を謝した。赤兒は色白くふくやかに性れついての縹緻好しで西門慶の喜び一方ならず、次の日早朝から起きて十副の方盒に喜麵を盛り、親戚近隣に配附した。應伯爵と謝希大は西門慶が子を設けたと聞いて逸早く慶賀に來た。又薛嫂に依賴して乳母を求めると、近頃夫に生き別れた三十歲の寡婦が六兩で賣物に出てゐた。月娘は本人に會つてみると性質柔和で身體は小清潔でもあり。早速それを買入れて每月五錢の手當てを與へ、衣服は當家持ちといふ約束した。恰度其時來保と吳主管は東京から歸つて來て、此度の授官の沙汰を報らせた。

西門慶は本處提刑所の理刑、賀金員の缺を補つて、金吾衞副千戶五品大夫の職を授けられたのである。從つて吳月娘は五花官誥夫人である。又吳主管は本處の驛丞、來保は鄆王府校尉となつた。これは印信劄付を見ても、吏兵二部の勘合を見ても、誥身を見ても何處から見ても相違なき事實であつた。李瓶兒が男子を產んで三日を出でずして此面目を得た西門慶の喜びは何に譬へよう。早速我が子を官哥となづけ、翌日來保を提刑所に遣はし、先づ任官の文書を送達した後ち、俄に多數の職工を招いて官服、官帽、寶帶の類を注文し、その出來上りを急いだ。此報を聞いた親戚故舊は西門家の廳堂に群がり我れも我れもと賀ひ祝した。

譯餘閒談

〔注子〕支那の德利は注ぎ口と把手が附いてゐる。材料は錫又は銀である。現今これを酒壺と稱す。

〔青衣〕黑色の長服でボーイの正服である。故に之を賤しんで女の方に轉じて婢の普通名詞となつた。此處では下人が主人の使で貴人を音訪れたので青衣を着て行つたのである。但し昔は青綠の物を用ゐたが今は色が濃くなつて黑色となつた。又青衣に伴ふて綠色の帽がある。これも下僕の正帽である。今は下人といへども斯う云ふ帽を冠らない。若し冠れば忘八と言つて物笑ひの種である。

〔當差〕當差は大家の召使である。それは家柄に依つて一種の役目とも見做さる。鄆王府當差は空名の役人である。

〔金吾〕金吾は執金吾の畧で天子の守護役也。先づ近衛といふような意味だらう。秦の中尉は漢の執金吾である。本來金吾は惡鳥の名で、天子出御の際これを禦ぐ役目であるさうな。後ちに空名となつた。

〔銜〕銜は官吏の位階をいふ。

〔驛丞〕驛は官文書を傳達すために設けた馬次ぎ場である。後ち往來の官吏に馬を貸與へ或は

官金糧食を運び、必要の人馬を地方から驅り集めて用便を足した。驛丞は其監督

〔草紙〕草紙は落し紙である。馬糞色の粗造なものである。

〔綳接〕綳接はおしめである。汚物を拭ふため有合せの布を用ゆ。

〔黃花女兒〕未通女

〔褥子〕蒲團又はクシヨンの類

〔老婆〕老婆は老爺に對照した言葉で、年老ゐた意味はない。即ち旦那に對する奥さんである。大老婆は夫人で小老婆は第二以下の夫人である。いづれも正式結婚したものである。又家主公、家主婆こいふ言葉がある。これも正式の夫妻を指す。

〔醮〕道士壇を設けて祈禱する事を醮こいふ。此處では西門慶が道教を信じてゐて其神に禱つたのであらう。百二十分は能くわからぬが道教最敬の祈禱のように思はれる。

〔赤兒〕赤兒は色白くてはいけないのだが、此處では盛んに色の白い事を賞揚してゐる。此赤兒短命に終つたが作者がそういふ意味を含めてゐたかもしれない。

〔喜麵〕普通の支那うどんであるが恁ういふ場合には喜麵と稱する。

〔印信〕官吏の印鑑である

〔割付〕上官より下官に與へる公文書

〔勘合〕割印を押した手形である。

〔諧身〕辭令書

大正十二年七月二日印刷
大正十二年七月五日發行
大正十二年九月十日再版

金瓶梅と支那の社會狀態 中

定價 銀二弗五十仙

著者 井上進

發行者 上海文路二二七號 杉江房造

印刷者 上海海甯路十四號 蘆澤民治

印刷所 上海海甯路十四號 蘆澤印刷所

發行所 上海文路 日本堂書店
電話北二〇八三
振替口座福岡三六七〇番